

元興寺

国宝元興寺極楽坊本堂ほか防災施設事案に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書



2002

元興寺境内遺跡調査会

元興寺

国宝元興寺極楽坊本堂ほか防災施設事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

2002

元興寺境内遺跡調査会

序

元興寺は日本の中世庶民信仰を考究する上で、今日避けて通ることのできない重要な位置付けをいただいております。昭和18年、戦火の最中始まった禅室解体修理事業は、時代の嵐の中一時中断されるも、多くの方々の強い意志と支えのもと無事完成、次いで昭和26年から極楽坊本堂が、昭和31年から東門がそれぞれ解体修理されていきました。その過程で、他に類を見ない多くの庶民信仰関係の遺物が発見され、信仰を通した中世の人々の心が眼前に現れたのでした。このような貴重な資料を一括して国宝・重要文化財として守り伝えると同時に、そのメッセージを正しく読み解き、また最新の技術を用いて保護・保存してゆくため、財団法人元興寺文化財研究所が設立されました。

このような諸活動の一環、不時の災害から文化遺産を保護するため昭和33年以降防災工事が行われ、当時最新の設備が設置されました。以来40年、幸い大きな災害もなく今日に至りました。

平成10年、元興寺がユネスコ世界遺産「古都奈良の文化財」のひとつに登録されたのを契機に防災の諸施設について再検討がなされました。その結果、施設の老朽化、機能の先鋭化、多種類の防災・防犯への対応にこたえる新たな措置が必要とされました。平成12年の下半期、関係諸官庁のご理解の基に国庫補助事業「国宝元興寺極楽坊本堂ほか防災施設事業」を開始することになりました。

本書はこれに伴って、貴重な地下構造の発掘調査を行った記録であります。本書に記載されている多くの資料は今後の元興寺研究のみならず、南都奈良町を研究して行く基礎資料となることでしょう。多くの方々のご利用を希求する次第であります。

最後になりましたが、今回の防災工事では非常に多くの方々の貴重なご協力をいただきました。ここに深く御礼申し上げる次第であります。

平成14年3月

宗教法人 元 興 寺
代表役員 辻 村 泰 善

発刊を喜ぶ

平城京遷都とともに飛鳥の地から移建された平城飛鳥寺一元興寺は、現在にまで法灯を絶やさぬ寺刹である。宝徳年間の一揆により、伽藍の大半は焼失したものの、僧房（禅室）や極楽堂は今日に至るまでその姿を伝える。いま、住民が史跡や名所をいかした街づくりにとりくむことで世間に知られている「奈良町・ならまち」の地は、そっくりそのまま旧元興寺境内に該当する。旧伽藍の堂塔は焼亡しても地下には大寺・元興寺伽藍の基壇や礎石、種々の宗教活動を伝える施設がそっくりそのまま残されているのである。

多くの地鎮・鎮壇に係わる金銀珠玉を出し礎石のよく遺る塔跡、極楽堂東側の膨大な量の中世葬祭具を埋納した整理坑、境内に運びこまれて保存されるに至った旧講堂の大礎石など、発掘調査はそのかみの元興寺の変遷を見事に浮かび上がらせていく。

元興寺の僧房（禅室）・極楽堂は僧房遺構最古の遺存例であり、極楽堂も智光が“極楽”の存在を説いた最古の遺構として広く知られている。天下稀有、日本仏教史を彩る極めて重要な寺院の一である。

主要伽藍焼亡後も、この寺は極楽浄土の聖地、人々の靈の赴く所と觀ぜられ、死者追善のおびただしい墓標が境内隨所に見られたが、近年は院内に整然と整備され、宗教的美観を生み出している。かつて、坪井良平先生が山城国木津惣墓を調査し、画期的な成果を生み、日本の葬祭史を解明する基礎を作られたが、この業績をふまえて見倣い、調査が実施されたのもこの元興寺旧境内地の墓標群であった。

いま、元興寺は喜びに溢れている。世界文化遺産「古都奈良とその文化財」として登録され、新しい寺史が展開できるようになったからである。中興の師－辻村泰圓師はかねてから僧房（禅室）・極楽堂の保存のためには、市中寺院として最も恐ろしい火災の厄を徹底的に防ぐための施設－防火防災施設の設置を早くから説き昭和30年代に当時としては最新の装置を文化庁、県の補助を得て完成された。以来40年間の時間の推移の中で施設は老朽化、今回再度の設置工事が嗣僧辻村泰善師のもとで実施されることになった。新生元興寺の第1歩ともいべき事業である。

この防災施設設置にあたっては、世界文化遺産登録、史跡指定地であることから発掘調査を実施することとなった。1点名物発見主義の調査とは異なり、今回の調査では極楽堂、その北東に所在した太子堂周辺の変遷史が鮮やかに浮かび上がることとなった。本来あるべき地道な発掘調査であり、元興寺史に重要な一頁を加えることになった。世界文化遺産、史跡として価値を一層高め、深化させる調査となった。こうした地道な調査の積み重ねの中から「真の元興寺史」が生まれてくることを銘記したいと思う。まずはその内容をここに報じ、関心の方に応えたいと思う。

平成14年3月

元興寺境内遺跡調査会
会長 水野正好

例　言

1. 本書は奈良県奈良市中院町11番地に位置する史跡元興寺旧境内で行われた発掘調査についての報告書である。
2. 本書に使用した方位は、II章2節が磁北である他は特に指定のない限り座標北を指し、遺跡の測量は国土測定法第VI座標系による。
3. 遺構の実測および写真撮影は佐藤亜聖、宇田員将が行った。
4. 遺物の実測は新谷桃子、高島志保、武田済子、仲井光代、長沼暦、長谷川義明、星田恵理、宇田、佐藤が主に行った。
5. 遺物の写真撮影は大久保治（財団法人元興寺文化財研究所）が行った。
6. 本書の執筆はIII章6節を渡辺智恵美（財団法人元興寺文化財研究所）が、それ以外を佐藤が執筆し、編集は佐藤が行った。

※表紙の墨字は醍醐寺所蔵「元興寺伽藍縁起並流記資材帳」より抜粋・トレースを行った。また、表紙の建物実測図は元興寺極楽坊正面立面図（「元興寺極楽坊本堂、押室及び東門修理工事報告書」より転載）である。

目　次

I. 調査の経緯	1
II. 元興寺の歴史と既往の調査	
(1) 元興寺の歴史	2
(2) 極楽坊内における既往の調査	8
III. 調査の内容	
(1) 地区割と調査区の配置	14
(2) 第1トレンチの調査	14
(3) 第2トレンチの調査	41
(4) 第3トレンチの調査	46
(5) 第4トレンチの調査	46
(6) 元興寺境内防災工事に伴う発掘調査より出土した遺物の分析	52
IV. 調査のまとめ	
(1) 検出遺構について	55
(2) 出出土器皿の分析	56

I. 調査の経緯

日本最古の仏教寺院として名高い飛鳥寺をその前身とする元興寺は、数多い庶民信仰資料で知られる他、近年年輪年代学から西暦582年伐採の年代が推定できる建築部材が見つかり、大いに注目を集めた。

元興寺は職中より続いた解体修理とともに、昭和33年より大規模な防災工事が行われ、当時の最新設備を用いて不測の事態に備える体制がとられたが、設置後40年を経てこれらの施設の老朽化が目立つようになり、また各種機器の誤作動も多く起こるようになった。そこで今回新たに防火施設と防犯施設の改修を行う事となった。

宗教法人元興寺から現状変更の申請を受けた奈良県教育委員会では、主要配管設置の為の掘削が一部造構面に達することを確認し、検討の上、元興寺境内遺跡調査会（会長 水野正好 奈良大学教授）を設置、奈良県教育委員会指導の元発掘調査を行う事にした。調査は2001年6月11日より開始し、7月13日に終了した。また、整理作業は調査終了直後から開始し、2001年度末までをその期間に充當した。調査体制は以下の通りである。

調査主体 元興寺境内遺跡調査会

調査担当 元興寺境内遺跡調査会

会長 水野正好（奈良大学教授）

副会長 藤澤典彦（大谷女子大学教授）

顧問 坪井清足（財団法人 元興寺文化財研究所所長）

委員 狹川真一（財団法人 元興寺文化財研究所考古学研究室室長）

岡本広義（財団法人 元興寺文化財研究所考古学研究室主任研究員）

角南聰一郎（財団法人 元興寺文化財研究所考古学研究室研究員）

佐藤亞聖（財団法人 元興寺文化財研究所考古学研究室研究員）

事務局長 奥洞二郎（財団法人 元興寺文化財研究所事務局長）

現地調査担当 狹川真一、佐藤亞聖

調査および整理作業参加者

【現場作業】青木晋、宇田貝将、鎌田一夫、坂野進、林貢、松下孝嗣、本山久雄

【整理作業】新谷桃子、宇田貝将、大西美奈、高島志保、武田浩子、仲井光代、長沼暦、長谷川義明、豊田恵理

調査指導・協力者（順不同、敬称略）

近江俊秀、岡本智子、篠原豊一、武田和哉、立石堅二、中島和彦、松浦五輪美、松田真一、山川均

奈良県教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所、奈良市教育委員会

II. 元興寺の歴史と既往の調査

(1) 元興寺の歴史

今回調査を行った元興寺極楽坊は、奈良時代の元興寺僧房にそのルーツを持ち、非常に古い歴史を有する寺である。調査の内容を報告する前にその歴史について概観したい。元興寺の歴史については多くの研究があるが、近年刊行された岩城隆利氏による『元興寺の歴史』は最も明快にその変遷を記述されている。これらの研究をもとに元興寺の変遷とその背景について概観する。

『上宮聖德法王帝説』『元興寺伽藍縁起並流記資材帳』『頭戒論』『三国仏法伝通縁起』にみられるように、欽明天皇七年戊午の年（538）に仏教が公伝、これを受けて崇峻天皇元年（588）、飛鳥の地に法興寺（飛鳥守）の造営が着手される。この工事は20年近く続けられ、推古天皇17年（609）金堂本尊が完成し、一応の完成をみた。和銅3年（710）、平城京遷都に伴い、飛鳥にあった諸寺院の多くが平城京城に移転、法興寺も和銅4年（711）に桙院が、養老2年（718）に法興寺そのものがそれぞれ移転し、この法興寺が元興寺と呼ばれるようになる。

元興寺の往古の伽藍については中世以降、伽藍内に町屋が侵入したことにより旧態を知る由もないが、現在残る地名、地割、発掘調査の結果からおおよその伽藍が復元されている。現在の極楽坊は僧坊東室南階大房の一部であり、周辺には現在も小塔院、塔跡が残存する。『元興寺縁起』『今昔物語』によると、当時の本尊は弥勒仏で、天竺から震旦を経て渡来した三国伝来の佛像であったとのことである。『七大寺日記』や『七大寺巡礼私記』などによると、南大門には日本一とうたわれた金剛力士像があり、中門には二天像、八夜叉像などがあったという。現在神護寺中門に残る二天像は『神護寺略記』などによると延久七年（1196）に源頼が元興寺の像を模して制作したものである。このように往古の元興寺には現在残っていない広大な伽藍と優れた仏像が数多く存在していたことがわかる。

元興寺の歴史の中で最も重要な出来事の一つで、極楽坊が現在まで命脈を保った原因となった事に、智光曼荼羅の成立があげられる。奈良時代に三論教学を代表した僧として智光と顕光があげられる。智光は龜田連出身で、元興寺を中心に活動し、宝龟年間（770 - 781）に死亡したと伝えられる高僧で、「般若心經術義」や「淨名玄論略述」、「玉闕盆經疏術義」、「大般若經疏」、「中論疏記」、「大憲度經疏」、「正觀論」、「初學三論宗義」、「法華玄論略述」、「般若灯論疏」、「玄音論」、「無量寿經論疏」などを著し、当代一流の三論学者であった。しかしここで重要なのは彼の著した『無量寿經論疏』が、平安期に『往生要集』を著して浄土教を確立する源信以前に、中国の正統の浄土思想を伝えていたことである。慶滋康胤によって11世紀末までに著された『日本往生極楽記』には、次のような説話が載せられている。

元興寺に智光と頼光という二人の僧がいた。幼少より同室同学してきたが、頼光はある時より物も語らず修行もせず、理由も話さなかった。そしてとうとう亡くなってしまった。智光はこの親友の死後の行場所を知ろうと、二・三ヶ月の間祈念しついで夢中で頼光のいるところへ辿りついた。そこは極楽であったが、頼光いわく、ここは汝の来る所ではないから早く去れとのことであった。そこで智光は頼光はどうしてここへ来れたかを問うた。頼光いわく、自分は経論を読んで極楽に生まれたいと願い、ひたすら弥陀の相好浄土の莊嚴を観想してその功を積んだのでここに来ることができた。汝はまだここに来られる身ではない、とのことであった。智光はこれを聞き、更に泣いて極楽浄土への道を問うたので、頼光は智光を仏の前へと連れて行った。仏は、仏の相好と淨土の莊嚴を觀想せよと教え、右手の掌に小淨土の相を示した。智光は夢から覚めて画工に夢中でみた仏の掌の淨土を描かせ、一生これを觀想して往生したという。

この説話が眞実とは考えられないが、少なくとも10世紀末までは元興寺東室南階大房の一室に板繪曼荼羅があり、そのいわれにこの説話が誕生したものと考えられる。淨土教研究が智光によって早くも奈良時代から行われていたことを考え合わせると、この智光曼荼羅は奈良時代末から平安時代初頭に成立したと考えることも可能であろう。とりもなおさず、この智光曼荼羅の存在こそ、元興寺の伽藍衰退の後も東室南階大房が極楽坊として今日まで法燈を受け継いだ原因となるのである。

平安時代の元興寺は、多くの僧侶が諸法会の記録に見られ、学僧としての活躍が見られる。また各地において港湾修築や治水など社会事業も行っていたものと見られる。しかし、他の多くの官寺がそうであったように、元興寺にあっても平安期は衰退の時代であった。

元興寺の教学は三論宗を中心として南都六宗兼学の寺院であったが、平安期に聖宝（832 - 909）が出現するに及んで異変が生じる。彼は醍醐寺開祖の真言僧としても有名であるが、それ以上に三論に秀でた学僧であった。彼はやがて東大寺東南院院主となり、三論宗の中心が東大寺へと移るきっかけを作る。そして延久三年（1071）には宣旨によって東大寺東南院に元興寺と大安寺の三論宗が吸収され、三論長者が固定されるようになる。これに伴い、おそらく近江国愛知郡など元興寺三論衆が有していた所領も移動したものと考えられ、ここに元興寺の教学、經營の衰退がはじまるのである。

教学の衰退はあっても、他の人寺同様平安前期まではまだ法要仏事にある程度の国家的援助が続いている。しかし、11世紀半ば、院政期にはこれらの援助も著しく衰え、また興福寺とその僧兵の強大化にともない著しく没落していく。長元8年（1035）の「堂舍損色檢錄帳」（『東南院文書』）には欠損してわからない中門と南大門以外の堂舎の悉くが崩壊、朽損しており、金堂は風鏸、風招が奪われ、壁は落ち、高欄や連子窓もなくなっており、東室北階大房に至ってはすでに消滅し、大木が繁るという有様であると記されている。『古今著聞集』にはこの

時期元興寺が、寺の修繕のためその名も「元興寺」と呼ばれていた天下の名宝ともいえる琵琶を手放そうとしたことが記されている。

このように没落の一途を辿るかにみえた元興寺であるが、先に少しふれた浄土教の展開のなかで新たな光明を見出す。奈良時代にも三論・法華系浄土思想は存在していたが、平安時代には主に天台教団によって爆発的に浄土教が広まる。円仁によって始められた常行三昧は、やがて不断念佛として年中行事に組みこまれ、やがてその教団内から『往生要集』を著した惠信僧都源信を生み出す。また、南都でも三論系浄土教者永觀が、往生講や迎講といった新しい布教手段を開発し、浄土思想は急速に広まって行った。このような浄土思想を追求する集団が集まつたものを別所といい、ここに集う人々を聖と称したが、元興寺はその僧房が別所的なものになっていたと考えられる。同時に興福寺の南、猿沢の池近辺にある菩提院や淨名院などが興福寺別所として存在し、極楽坊周辺が念佛者の集まる空間を形成していたと考えられる。このことを端的に表しているのが智光曼荼羅である。先にも述べたとおり、この曼荼羅はもともと奈良時代に作られた一尺四方の小型板絵であったことが『覚禅抄』に記されている。この曼荼羅の原本は室町時代に焼失したが、現在12世紀の転写と考えられる大型の板絵曼荼羅が元興寺極楽坊に残存している。この曼荼羅には智光と頼光と考えられる二人の僧が描かれており、智光曼荼羅のいわれを知らしめる流布本であると考えられる。浄土教の広まりとともにこの曼荼羅の記述も多く見られるようになり、流布本も作られるなど僧房の一角が南都の浄土教の中心基地として機能していったことを示している。

現本堂内陣の柱には極楽坊（坊）の百日念佛のために水田を寄進した寄進文が刻まれている。この寄進文の最も古いものは嘉応三年（1171）のもので、このころすでに極楽坊において百日念佛講が行われていたことがわかる。12世紀初頭大江義通の著した『七大寺日記』には極楽坊で智光曼荼羅を拝見した記録が見えるが、この記述では東室南隅大方の中心に馬道が存在し、その東第一房に曼荼羅が置かれていたとある。解体修理の結果からも1171年以前に僧房の改造が行われ、極楽坊が成立していたことが確認されている。ここで行われた百日念佛講は興福寺僧や有力都市民を中心として行われており、本堂柱刻寄進銘には天福元年（1233）までの百日誦寄進文が見られる。

このような念佛講の隆盛の中で極楽坊は再び大きな変化をむかえる。現在元興寺には寛元二年（1244）の極楽坊造営に関する棟札が残っている。この棟札の存在から現在の本堂の造営が寛元二年になることが分かる。平安後期の改造が僧房と仏堂を馬道で切り離しただけのものであったのに対し、寛元元年の改造は全体構造に変更を行う大規模なもので、その造営に関して往生講衆百余人、結縁衆二百余人がいう人々が関係していたことがわかる。この改造によって本堂内陣の周辺に多くの人々が行進できる空間が創生されたことは、念佛講に参加する人の数がそれまでの本堂では包摂しきれないまでになっていた事の現われとも考えられる。これにあわせるように、

本堂で行われていた念佛講にも変化が生じる。柱刻寄進銘の最新のものは文永二年（1265）のものであるが、ここでは「極楽坊七昼夜念佛」五番衆に屋地を充却するという文面が見られる。それまでの百日念佛講にかわって、大幅に簡略化された七日念佛講が開催されるようになった背景には、念佛講に参加する人々の階層の低下とそれに伴う参加者の増加があったものと考えられ、極楽坊の改造は百日念佛講から七日念佛講への変化が大きく関係していたものと見られる。現在元興寺に保管されている数多くの庶民信仰資料は元興寺の民衆寺院化の果実であり、この民衆寺院化こそ、極楽坊を今日まで残した原理であったと言える。

このような庶民化を顕著にあらわす遺物として、現在収蔵庫に保管されている聖德太子十六才像がある。平安期以降南都北嶺において駅廻信仰への回帰が盛んになると、日本仏教の創始者として聖德太子への信仰が非常に盛んになる。そのような宗教的雰囲気の中、文永五年（1268）、西大寺觀音と関連の深い仏師、善春によって一体の聖德太子十六才像が作られる。この像はもともと極楽坊の北側にあった太子堂に保管されていたものと考えられるが、ここで注意したいのはその像内にあった納入物である。この像の胎内からは「像立記」、像立の中心的役割を果たしたと考えられる眼清による「眼清願文」、多数の人々の微小の供として米や穴あき銭を供え円満法界平等利益を願う「太子供養佛供敬白文」、彩色のために丹二両を寄進した「道忍寄進状」、五千人近い人々の名が刻まれた「結縁交名状」、結縁父名が記された「聖德太子摺仮」、金品を添えて寄進した人々の名前、願文などを記した「太子千杯供養札」などが見つかっている。この納入物の一貫した性格は、この像が庶民の寄進によって像立されているということである。納入物に記された人名はそれまでの仏像に記されていた交名録の人物と比しても階層の下がった人々であり、先に述べた念佛講の庶民化と同様の現象が造像に関する重要な例である。

以上のように、鎌倉以降急速に庶民信仰を取り入れて行く元興寺であるが、その背景には後に奈良町と呼ばれる町域の都市民の成長があった。12世紀末頃から、寺院の門前に形成されていた町屋を寺院内の延長としてとらえ支配体制を及ぼした門前郷が成立する。興福寺門前郷を編成した南都七郷を始め大乗院門跡郷、一条院門跡郷などの大郷、その元に多数の小郷が成立するという形態で徐々に整備が進んだこれらの門前郷が、現在に至る奈良の宗教都市の原型を確立したが、元興寺においても元興寺郷が存在した。しかしその範囲は興福寺郷などに比すると小さく、寺の西南部を中心とする部分のみであった。『小五月郷図』を見ると、この段階の元興寺はまだ伽藍そのものの範囲を維持しており、極楽坊の北側や吉祥院北側への辻子の貢入は見られるものの伽藍内部への民家の侵入は少ないようであった。

このような町屋景観が一変するのが室町時代後期に相次いで起こった土一揆による南都焼亡である。宝徳3年（1451）、奈良に起こった土一揆は元興寺旧伽藍の多くを焼き払った。『康富記』には10月14日元興寺寺辺に放た

れた火により金堂が炎上し、そのあおりで興福寺大乗院と、元興寺桙院寺が移った桙定院が炎上した。この際、智光曼荼羅原本も失われたということである。現在元興寺にある阿弥陀如来像もこの際桙定院から搬入されたものと言われる。その後桙定院は興福寺大乗院と一体化してしまい、その独自性は失われる。

この土一揆により焼失した元興寺金堂は焼失後十年たってようやく復興が行われる。『大乗院寺社雜事記（以下雜事記と略）』寛正3年（1462）5月11日には「近日金堂如形造作云々」とあり、金堂の復興が開始、その後同年7月5日には立柱上棟、寛正5年（1464）には勧進のための久世舞が行われる。寛正7年（1466）には椿井仏師春慶によって本尊の丈六仏が造像されている。しかしその後金堂に関する記事は無く、『多聞院日記』永錄13年（1570）の記事に「元興寺弥勒堂ノ跡ヨリ石ノ贋ホリ出、金數多在之」という条文が見られる。弥勒堂が弥勒仏を本尊としていた金堂であると考えられることから、永錄段階では金堂が完全に「跡地」となっていたことがわかる。この跡地には芝突抜町、芝新屋町、西新屋町、中新屋町といった新しい町屋が侵入し、遅くとも16世紀には旧境内中心部までが町屋となっていたと考えられる。このことは元興寺近辺に存在する念佛講衆碑にもあらわされる。農村部では村落結合が早く、14世紀には講衆碑が見られるが、元興寺周辺では天文19年（1550）白毫寺墓地にある松南院地蔵講銘の地蔵石仏を始めとして16世紀に町屋単位の講衆が形成されることがうかがえる。ただ、現存しないが『雜事記』文明9年（1477）中の極楽坊境内墓地見取図には「十三部經結衆五輪」なるものが描かれており、15世紀末頃から講衆の形成が始まっていたと考えられる。

この他の堂舎について見てみると、『雜事記』寛正3年（1462）の条に南大門でボヤがあり、仁王像が損壊したという記録が見られる。これはその後修理の記録があることから門そのものが焼亡するような大火災ではなかったと思われ、実際明応6年（1497）には門内で猿樂が行われている。五重大塔は古来より倒壊することなく存在しつづけ、何度も修理が行われた記述が見えるが、安政6年（1859）毘沙門町より出火した大火により焼亡してしまった。昭和2年（1927）に行われた発掘調査によって基壇鍾道具等が発見されている。中門は応仁元年（1467）に落雷の記事がみられ、中門觀音堂も天文19年（1550）に猿樂が催されているが、この觀音堂も安政の大火で大塔諸共焼死てしまっている。元興寺西金堂と称された吉祥堂は『雜事記』寛正3年（1462）の条に、吉祥堂修理のため中院郷にあった元興寺竈殿の釜を郷民4・50人で引き出した、という記事が見られる。その後も修理等が続いたが、延徳4年（1492）の久世舞以降記録が見られない。小塔院は律僧が止住する律院であった。元興寺内の他の堂舎が衰退の道を辿って行くのに対し、明応9年（1500）に横寺本尊の製作を行うなど盛況を呈し、安政の大火も生き延びた小塔院は今日までわずかにその命脈を保っている。

このような中世後期の元興寺の中で、元興寺の中心となっていったのが極楽坊である。極楽坊は応安年間（1368～1375）に律僧が入って律宗寺院となっていた。宝徳3年（1451）の火災をまぬがれた極楽坊は被災した桙

定院の阿弥陀如来像を受け入れるなど盛況を呈する。『雜事記』文明15年（1482）の条に応永年中に現極楽坊東門が東大寺から移築されたことが記録され、棟瓦にも「応永十八年六月」の銘が見られるなど1400年前後に現在の東門が移築されたことがわかる。さらに文明初年頃（1470年前後）にも修理が行われるなど、この頃整備が行われたようである。これには興福寺大乗院の後支えがあったことが想定されている。また、『雜事記』には同じ応永年間頃現本堂の北東部分に太子堂が建てられ、聖徳太子像が安置されていたことも記録されている。今回の調査地の内第1トレーニングはこの太子堂の推定地に位置するが、後述するように調査の結果からはこの位置に太子堂が存在した直接的な証拠は得られなかった。

このように中世後期に至っても繁栄を続けた極楽坊では、鎌倉時代後期に始まった七日念佛と、少し遅れて始まったと考えられる百万辯念仏などの念佛講が多数行われ、極楽往生を願う人々の聖地となっていたが、これと連動して境内に故人の遺骨等を納める納骨堂としての性格が極楽坊に付与され始める。『雜事記』には前関白一条兼良が南都で死去の後法花寺・大安寺・不退寺・極楽坊・眉間寺・白毫寺に分けて納骨され、中でも極楽坊に納められたものは金箔を貼ったものであったことが記されている。庶民のみならず貴族クラスの納骨も行われていたことがわかる。現在元興寺に残る納骨五輪塔は鎌倉期のものから寛永3年（1626）までのものがあるが、最も数が多いのは15世紀後半から16世紀末ごろのものである。このように極楽坊が極楽そのものと考えられるようになると、やがてそれは拡大解釈されるようになり、極楽坊の境内そのものが極楽であるとの認識に変化していく。『雜事記』文明9年（1477）の条に尋単がかつて極楽坊に埋葬した人物の墓参りをする記録があり、見取り図から極楽坊東南隅に石塔の並ぶ墓地が形成されていたことがわかる。このように極楽坊境内そのものが聖地となった結果、ここに直接埋葬が行われるようになり墓地化してゆくのであった。

このように中世末頃までに町民の信仰と興福寺大乗院の力を背景とし繁栄を保った極楽坊であったが、信長以降の変動により大きく性格が変化していく。信長による奈良城中把握、秀吉政権下による興福寺の勢力削減や筒井氏の転封、そして徳川政権による町切りと朱印寺院化、寺請制の確立などを通し、本来の民衆寺院としての性格を失ってゆく。しかし寺盛そのものは明治初頭の廃仏毀釈まで衰退せずに、近世も奈良の名所として寺觀を保ったようである。

参考・引用文献

岩城龍利 1983 『増補 元興寺編年史』上・中・下 吉川弘文館

1982 『元興寺』中央公論美術出版

1999 『元興寺の歴史』吉川弘文館

木下泰道 1970 「元興寺極楽坊境内考」『元興寺極楽坊（第二収蔵庫）建設に伴う発掘調査報告書』 元興寺佛教民俗資料研究所

(2) 極楽坊境内における既往の調査

本節では極楽坊境内におけるこれまでの調査について確認する (Fig. 001~003)。なお、紙面の都合上主要な調査について概観するにとどめたい。

特別防災工事に伴う調査

報 文：辻村泰蔵・水野正好 1962 「南都元興寺極楽坊中世信仰資料包藏坑発掘調査概要」『大和文化研究』第7卷1号

元興寺 1965 「元興寺極楽坊総合収蔵庫（第1収蔵庫）建設報告書」

岡本一士 1976 「元興寺極楽坊境内の発掘調査」『日本仏教民俗基礎資料集成』第1巻 中央公論美術出版
期 間：1961年7月6日～8月5日

調査地：本堂東側

調査者：水野正好

内 容：極楽坊における最初の本格的調査。現在の東門と本堂の間付近を調査。大型の包藏坑を検出した。包藏坑は深さ110cm程度を測り、平面ひょうたん型を呈する。埋土は5層に分かれるが、壁面の立ち上がりはほぼ垂直で、埋土に長期間開口していた痕跡がみられず、出土遺物に層間接合例が見られるなど短期間の廃絶が想定されている。出土遺物は極楽坊屋根裏から発見されたものと同様の庶民信仰関連資料が大量に発見された。これらの遺物は鎌倉時代のものから寛永13年初鉄の寛永通宝まで時期差を持っていることから、本堂内に納められていたものを寛永年間以降に整理、投棄したものと考えられている。

なお、本調査で出土した遺物の保存処理が我が国の、出土遺物に対する本格的保存処理の開始となったことは特筆すべき事項である。

第1収蔵庫建設に伴う発掘調査

報 文：元興寺 1965 「元興寺極楽坊総合収蔵庫（第一収蔵庫）建設報告書」

岡本一士 1976 「元興寺極楽坊境内の発掘調査」『日本仏教民俗基礎資料集成』第1巻 中央公論美術出版
期 間：1963年8月1日～8月20日（1次調査）、9月6日～9月30日（2次調査）

調査地：第1収蔵庫

調査者：伊藤久嗣

内 容：極楽坊所蔵の仏教民俗資料や発掘調査で発見された資料を保管するための収蔵庫建設に伴う調査。調査の結果永正12年（1515）『極楽坊記』に記された堂南庭の小池と考えられる池と、その上層に経営された墓地が検出された。池からは柿経、納骨五輪塔、位牌、土器類などが出土した。上層の墓地群は16世紀を中心として造

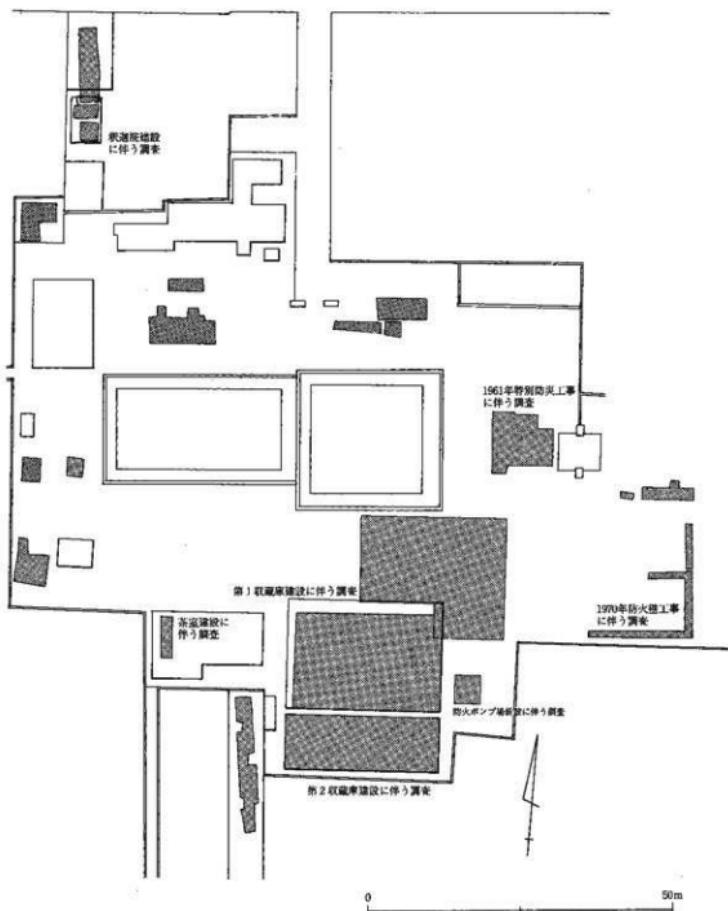


Fig. 001 極楽坊における過去の調査位置図 (S=1/800)

常されたものと考えられ、墓地廃絶に伴う石塔整理坑内から正保三年（1646）の石塔が出土していることからこの時期墓地の無縁化に伴い整理が行われたと考えられている。しかし後述する第二収蔵庫建設に伴う調査では享保年間の石塔が出土しており、墓地整理の時期は18世紀まで下がると考えられる。

第2収蔵庫建設に伴う発掘調査

報 文：元興寺佛教民俗資料研究所 1970『元興寺極楽坊（第二収蔵庫）建設に伴う発掘調査報告書』

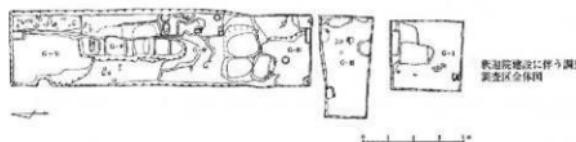
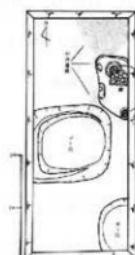
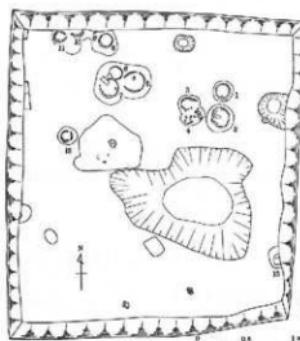
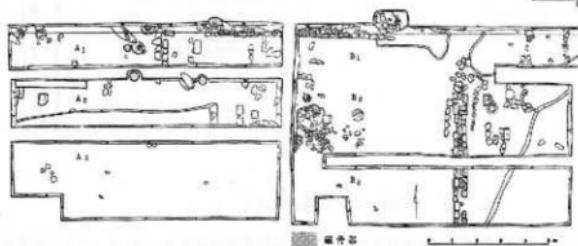


Fig. 002 梶楽坊における過去の調査 (1)

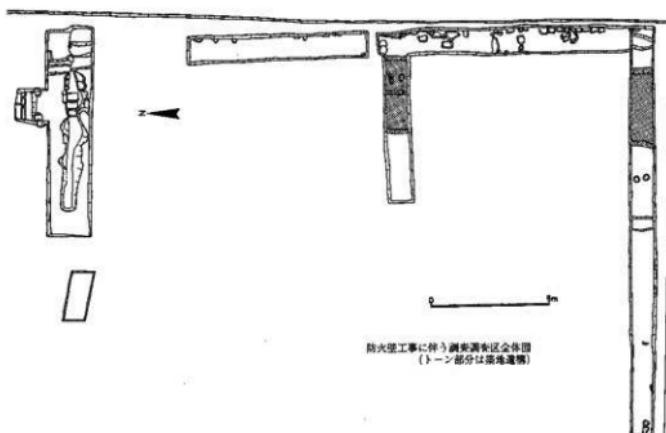


Fig. 003 極楽坊における過去の調査 (2)

岡本一士 1976 「元興寺極楽坊境内の発掘調査」『日本仏教民俗基礎資料集成』第1巻 中央公論美術出版
期 間：1969年12月5日～12月27日（第1次調査）

1970年1月5日～1月17日（第2次調査）

調査地：本堂南側、現第二収蔵庫

調査者：木下寄連 奥野義雄

内 容：表土層と近現代の搅乱層直下の茶褐色砂質土上面で石積遺構、石塔婆整理坑や蔵骨器埋納土坑が検出されている。遺構検出レベルは地表下1mである。

石積遺構は東西・南北に存在しており石列内に享保5年（1720）の銘文を持つものがあり、18世紀半ば以降の築地の基礎であったと考えられる。また、享保年間までは墓地が継続していた可能性も示している。石塔婆整理坑はB1地区北隅に存在し、永鏡9年（1566）を初見、元禄7年（1694）を最新銘として多くの石塔婆が埋納されていた。墓地跡は主にA1、A2区に多く、A3区には見られない。出土した蔵骨器について報告書では17世紀半ばとされているが、いずれも現在の編年で見ると16世紀半ばから後半のものである。

防火壁工事に伴う発掘調査

報 文：元興寺佛教民俗資料研究所 1970 「元興寺極楽坊防火壁工事に伴う発掘調査概報」

期 間：1970年7月27日～8月22日

調査地：本堂南東、現駐車場南壁付近

調査者：奥野義雄

内 容：現在の駐車場付近に東西南北逆L字形のトレンチを設定し行われた調査である。地表下1m付近まで中世の層が存在する。調査区東側に現道路と並行して幅2~3mの高まりが存在し、奈良時代の築地の可能性が指摘されている。また、北側に設定されたトレンチでは基壇状の遺構が見つかっており、調査者は往古の東門を想定している。

駁迦院建設に伴う発掘調査

報 文：奥野義雄 1977 「元興寺極楽坊駁迦院建設工事に伴う発掘調査概要」『古代研究』11 元興寺佛教民俗

資料研究所 保存科学研究室

期 間：1970年7月

調査地：禅室北西

調査者：奥野義雄

内 容：禅室北側の駁迦院建設に伴い行われた調査。東室北階大房の推定地である。中世前半のピット（報告では16世紀となっているが、瓦器梶の編年が確定した現在では中世前半の遺構と考えられる）、奈良時代に遡ると考えられる石敷遺構が見つかったが、東室北階大房の直接的証拠は得られなかった。

防火ポンプ場新設に伴う発掘調査

報 文：岡本一士 1975 「防火ポンプ場新設に伴う発掘調査」『古代研究』6 元興寺佛教民俗資料研究所 考古学研究室

岡本一士 1976 「元興寺極楽坊境内の発掘調査」「日本佛教民俗基礎資料集成」第1巻 中央公論美術出版

期 間：1972年

調査地：本堂南東、ポンプ場

調査者：岡本一士

内 容：防火ポンプ場の新設に伴い行われた調査。8.7m²が調査された。調査の結果第1・2收藏庫で発見された墓地の延長が発見されている。計12個体の藏骨器が出土し、それらはすべて瓦質土器深鉢を転用したものである。中には内面に八葉曼荼羅と光明真言が墨書きされたものも見られる。

茶室建設に伴う調査

報 文：岡本広義 1993 「元興寺小子坊西・茶室建設予定地・発掘調査概要」『元興寺文化財研究』No.46 (財)

元興寺文化財研究所

期 間：1991年8月20日～8月25日

調査地：小子坊西端

調査者：岡本広義

内 容：小子坊西端の茶室建設に伴う調査である。15m²の小規模な調査であるが、近世の土坑、中世の包含層（整地土？）、土師器釜を埋納する土坑が検出されている。中世の包含層は今回の調査で検出した整地土1と類似しており、鎌倉時代の整地土の可能性がある。土師器釜埋納土坑はこの層を切っており、出土遺物は16世紀後半のものである。

以上これまでに極楽房境内で行われた発掘調査を概観してきたが、これらの情報から分かることを大まかにまとめるところとなる。

まず古代の元興寺僧房であるが、これまでの調査において、古代の元興寺に関する情報は非常に希薄である。わずかに防火壁工事に伴う調査において築地の一部と考えられる遺構が検出されているが、僧房そのものの遺構や礎石は見つかっていない。

中世の元興寺については残存する多くの庶民信仰資料が鎌倉以降のものであるように、鎌倉以前の遺構については明確でない。糸迦院建設に伴う調査において多くの瓦器碗が見つかっているようであるが、調査が小規模なこともあり遺構の状況は不明確である。中世前半期の元興寺については今回の調査の課題と言うことができるであろう。

中世後半期の資料については1961年の防災工事に伴う調査以来非常に豊富な情報が得られている。最も特徴的なのは墓地である。現在のところ茶室、第1・2収蔵庫、ポンプ室からそれぞれ墓地が見つかっているが、防火壁や本堂前では墓地そのものが見つかっておらず、墓地の範囲は本堂・禪室南側に限定できる。またその時期についても出土土師器釜がほぼ16世紀初頭以降を中心とすることから、文献史料に見られる墓地の範囲と時期に矛盾しない。ただ、本堂・禪室南側の一連の調査においては墓地以前の状況が不明確で、墓地形成以前については課題を残す。

これらの調査例を参考に今回の調査を行った。

II. 調査の内容

(1) 地区割と調査区の配置

地区割りについては奈良国立文化財研究所（現独立行政法人奈良文化財研究所）が設定した平城京内の地区割りに準じた（奈良国立文化財研究所1990）。地区割りおよび座標の配置はFig. 004の通りである。

トレンチの配置は主に防犯センサーのケーブル埋設箇所を対象とし、中でも主要配線設置のため掘削が深く及ぶ4箇所について調査を行った。第1トレンチは本堂北東に位置し、東室南階大房と小子房の間に位置していると考えられる。江戸期の境内絵図に見られる「太子堂」の推定地に隣接する。第2トレンチは押室北西に位置し、南北に設置した。第1トレンチ同様東室南階大房と小子房の間に位置すると考えられる。第3トレンチは押室西側に位置し、東室南階大房の延長上に位置する。第4トレンチは本堂南東に位置する。昭和の半ばまで存在した池の際にあたると考えられる。

(2) 第1トレンチの調査

検出遺構 (Fig. 005)

前節でも述べたとおり本堂北東に設置したトレンチ。約16m²の範囲を調査した。狭いトレンチ調査であったが出土遺物は膨大で、瓦・土器等がコンテナ30箱以上出土した。近現代の擾乱が著しく、遺構の残存は良好ではない。

基本層位 (Fig. 006)

基本層位は上層から現代のコンクリート等を含む黒褐色砂質土、鎌倉時代の整地土と考えられる明褐色粘質土（整地土1）、平安時代の整地土と考えられる黄灰色粘土（整地土2）からなる。明褐色粘質土の上層にはわずかに褐色土の層があり、調査時に若干遺物の混入が見られた。遺構は鎌倉時代の整地土上面で検出した第1遺構面と、平安時代の整地土上面で検出した第2遺構面、地山上面で検出した第3遺構面の3面が存在する。

第1遺構面

明褐色粘質土上面で検出した遺構。擾乱が著しく遺存は良好でない。柱列1、土坑3、ピット3を検出した。後述するように土坑のうちSK114、SK133は擾乱孔により整地土1が乱されていたため第1遺構面で検出、掘削してしまったが、本来第2遺構面に属するものである。このため上記の遺構については第2遺構面の項で報告する。

柱列

SA135 (Fig. 007・008)

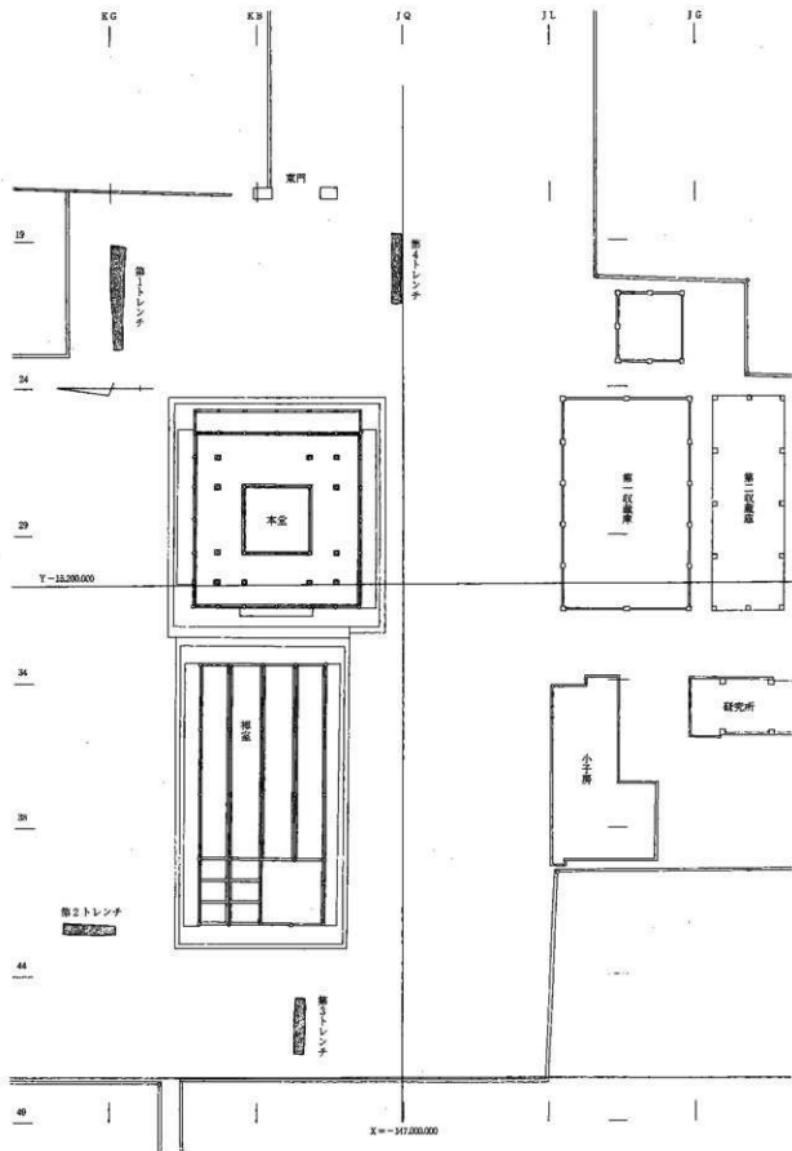


Fig. 004 調査区位置図及びグリッド配置図 (S=1/500)

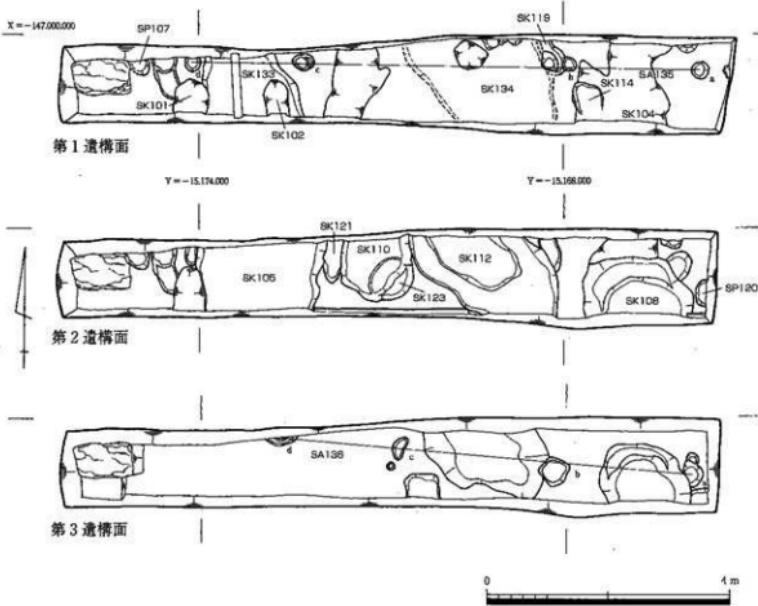


Fig. 005 第1トレンチ造構全体図 (S=1/80)

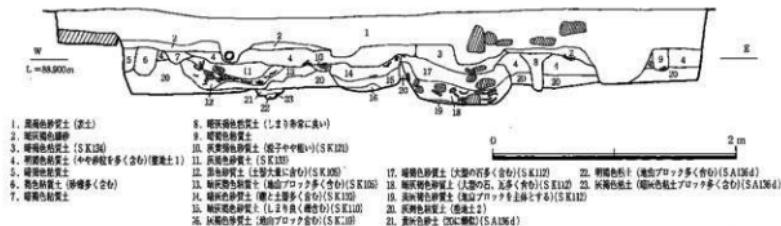


Fig. 006 第1トレンチ北壁土層図 (S=1/80)

調査区北側で検出した柱列。4個の柱穴で構成され、b - c間に存在したと考えられる柱穴はSK134によって削平される。N - 1° - Wの方位を有し、柱間はa - b間200cm、b - c間440cm、c - d間180cmを測る。柱穴はいずれも径30cm内外、深さ25~30cm程度を測り柱痕跡を有する。柱穴は径15cm程度の柱痕跡を有し、裏込には瓦や石が使用されていた。SA135 aからは柱を抜き取った跡に13世紀代の土師器皿を逆位で安置した状態で検出した。さ



Fig. 007 SA135平面・断面図 (S=1/80)

らに根石に使用されていたと考えられる被熟し

た石材も出土しているが、これには径12cm程度

の柱材の痕跡が明瞭に残存していた。

土坑

SK119

調査区北端KG20・21区に位置し、SA135b、

SP115、SK134に切られる。切り合いが激しく、

本来の形状は不明である。埋土内より12世紀代

の土師器皿や古代の瓦等が出土したが、切り合いから13世紀代の遺構と考えられる。瓦は立てた状態で出土し、
人為的に配置された可能性がある。

SK134

調査区中央付近KG21区に位置する。多数の搅乱に切られ依存は良好でない。第2遺構面SK112の上面に位置する浅い土坑で、東西幅約200cm、南北は調査区外へと続く。埋土は暗褐色粘質土の單一層で、人為的埋め戻しはみられない。埋土内から多数の14世紀代の土師器皿や白磁碗片、ミニチュア羽釜、古代瓦等が出土した。この土坑についても調査時の判断ミスから本来の形状を大きく損なってしまった。

第2遺構面

明褐色砂質土（整地土1）除去後検出した遺構面。7基の土坑を検出した。いずれの土坑も大量の遺物を包含していた。

土坑

SK105 (Fig. 009)

調査区西寄りKG22区に存在し、SK121に切られる。東西幅約200cm、深さ約40cmを測り、南北は調査区外へと延びる。埋土内より12世紀第3四半期頃の膨大な量の土師器皿、瓦器輪、瓦器皿等が出土した。埋土は黒色砂質

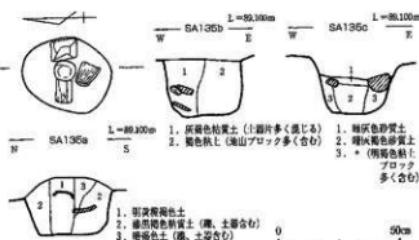


Fig. 008 SA135柱穴遺物出土状況及び上層断面図 (S=1/20)

土と地山ブロックを少量含む暗灰褐色粘土の2層に分かれ、遺物の出土は黒色砂質土に集中する。遺物は大半が正位置で配置されていたが、特に意識して並べられた状況ではなく、乱雜に投棄された状況であった。また、土器に混じり瓦や石なども混じっている。底部形状は一様でなく、特に東側に起伏が多い。

SK108 (Fig. 009)

調査区東側KG20区に位置する土坑。東西幅約180cm、深さ70cmを測り、南半は調査区外へと続く。埋土は3層に分かれる。最上層（3）は暗灰褐色の砂質土で石が多量に出土した。中層（4・5）は軟質の黑色土で、締りが悪く灰を含む。12世紀末の土器類が多く出土した。下層（6）は黄灰褐色粘土で地山ブロックを均質に含む。遺物の出土は少ないが、12世紀代の遺物が少量出土した。各層とともに遺物の出土状況に人為的な配置は見られない。底部形状は一様でなく、北側に1段のテラスを有する。壁の立ち上がりはほぼ垂直である。

SK110

調査区中央部KG21・22区に位置する土坑。SK121・SK123を切りSK112に切られる。東西112cmを測り、北端は調査区外に達する。埋土は上層から礫を多く含む暗灰色砂質土、暗灰褐色砂質土、地山ブロックを少量含む灰褐色砂質土となる。底部形態はほぼ平坦で、壁面の立ち上がりは垂直に近い。13世紀前半から半ばの遺物が出土した。

SK112

調査区中央西寄りKG20・21区に位置しSK110を切る。東西約160cmを測り、南北両端は調査区外に達する。埋土は上層から大型の石を多く含む灰褐色砂質土、石、瓦、土器を多量に含む暗灰褐色砂質土、地山ブロックを主体とする淡灰褐色粘土からなる。土坑中央部には地山ブロックを主体とする淡灰褐色粘土を埋土とする窪みが存在した。壁面の立ち上がりは急で、東端は一部オーバーハングする。遺物の出土状況に規則性は無く、種類とともに一括投棄された状況であった。出土遺物の年代は13世紀初頭を示す。

SK114 (Fig. 009)

調査区東側KG20区に位置しSK108を切る。現代の擾乱であるSK104を掘削段階で検出した土坑。SK104により整地土1が失われていたため、第1遺構面で検出、掘削してしまったため、全体図では第1遺構面に記載している。径35cm程度の円形を呈する。大半が破壊され本来の形状、深さ等は不明であるが、埋土内から12世紀末頃の大量的の土師器皿、瓦器、瓦、石が出土した。遺物の出土状況に規則性はみられず、一括して投棄された状況であった。出土遺物中には小型瓦器碗等も含まれる。

SK121

調査区中央部KG22区に位置し、SK110に切られ、SK105を切る。切り合いが激しく、北端は調査区外に達する

事から本来の形状等は不明である。埋土は灰黄褐色砂質土で、瓦等を多く含む。

SK123 (Fig. 009)

調査区中央付近KG21区に位置し、SK110に切られる。大半をSK110に切られるため、本来の形状は不明だが、底部径は長軸約70cm、短軸約55cmを復元できる。埋土は上層が地山ブロックと炭を含む明褐色土、下層は灰褐色土である。遺物はほとんど見られない。

SK133

調査区西寄りKG22区に位置する。多数の搅乱、旧防災施設の配管に切られ、遺存は良好ではない。東西幅約160cm、深さ約24cmを測り、南北両端はそれぞれ調査区外へ延びる。埋土は灰褐色砂質土の單一層で、埋土内に石を多く含む。人為的埋め戻しの痕跡は見られない。この土坑については本来第2遺構面SK105の上面に掘りこまれた土坑であり、整地土の下面に存在するものであったが、調査時の判断ミスから第1遺構面で掘削してしまった。埋土内よりSK105に起因すると考えられる土器に混じって13世紀前半の土器が出土した。

ピット

SP120

調査区東端KG20区に位置するピット。南北44cmを測る長方形を呈し、東端は調査区外に延びる。建物等を構成する他のピットは見られない。埋土内から瓦質土器の細片が出土した。瓦質土器は幅広の縱方向のヘラミガキを有するなど14世紀代の輪火鉢の可能性がある。当遺構周辺は整地土1が不安定で、また当遺構の埋土が整地土1に類似するため、あるいは本来第1遺構面の遺構であった可能性がある。

第3遺構面

地山と類似するが暗褐色の濁りを少量含む明褐色粘質土（整地土2）を除去後検出した遺構面。柱列1、土坑2を検出した。

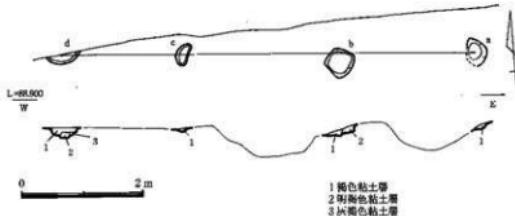
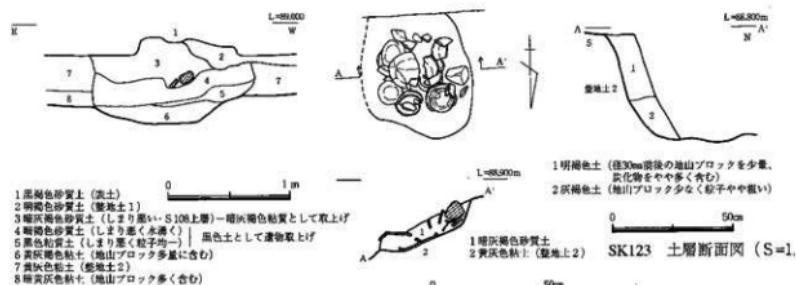
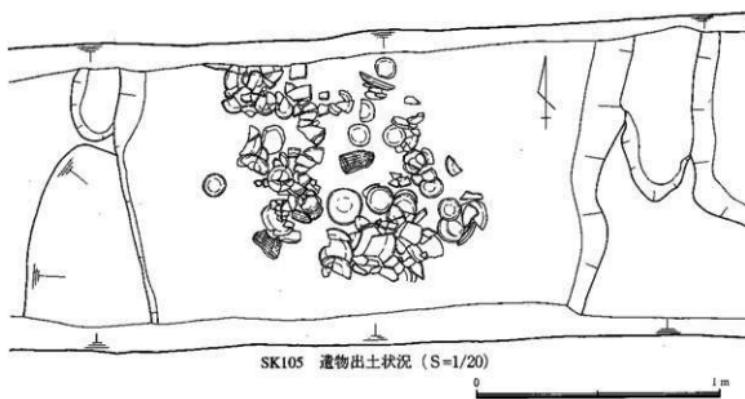
柱列

SA136 (Fig. 009)

調査区内を東西に横切る柱列。a～dの4つの柱穴より構成される。a-b間228cm、b-c間256cm、c-d間200cmを測り、N=5° 50' -Wの方位を有する。柱穴はいずれも35～55cmを測り不整形を呈する。出土遺物はみられない。

出土遺物

第1遺構面検出遺構出土遺物



SA136 平面・柱穴土層断面図 (S=1/80)

Fig. 009 第1トレンチ検出遺構

SA135出土遺物 (Fig. 010)

各柱穴より瓦器碗（1）、土師器皿（2～6）が出土した。1～4がSA135a、5・6がSA135b出土である。

瓦器碗（1）は復元底径4.7cmを測る。底部外面に断面三角形の貼付高台を有する。内面には螺旋状暗文を有し、外面にはミガキが見られない。

土師器皿（2）は復元口径8.5cm、器高1.6cmを測り、平坦な底部と直線的な体部を有する。口縁端部はわずかに肥厚する。底部外面にユビオサエ、口縁部をナデ調整する。3は復元口径9.5cm、器高1.7cmを測り、口縁端部に面を持つ。4は口径9.2cm、器高1.7cmを測り、底部はやや上げ底気味を呈する。5は復元口径10.4cmを測り、底部外面は強いユビオサエにより変形する。口縁端部には面を持つ。6は復元口径12.0cmを測り口縁部はやや尖り気味に納める。いずれも13世紀代のものである。

SK119出土遺物 (Fig. 011)

土師器皿（1・2）が出土した。1は復元口径9.0cm、器高1.75cmを測り、緩やかに湾曲する体部を有する。口縁部は比較的厚く丸く取まる。2は復元口径11.7cmを測り、体部下半にはナデによる段を有する。

SK134出土遺物 (Fig. 012)

土師器皿（1～10）、土師器蓋（11）、白磁碗（12・13）、軒平瓦（14・15）が出土した。

土師器皿には赤色系のもの（1～5）と、白色系のもの（6～10）がある。赤色系のものはいずれも体部と底部の境界付近に指頭圧痕が明晰に残り、ヘソ皿状を呈するもの（1・4）と平底のもの（2・3・5）がある。1は復元口径8.8cm、器高2.0cm、2は復元口径9.8cm、器高1.6cm、3は復元口径8.6cm、器高1.9cm、4は口径7.1cm、器高1.6cm、5は復元口径10.6cm、器高2.3cmをそれぞれ測る。白色系のものは複数の形態が見られる。6は復元口径8.8cmを測り、やや器高が高い。口縁部のナデは体部下半に及ぶ。7は復元口径12.1cmを測り、比較的直線的な体部を有する。口縁部のナデは体部上半に施す。8は復元口径12.8cmを測り精良な胎土を有し、比較的器高が低い。口縁部のナデは体部下半に及ぶ。9は復元口径11.4cmを測り、比較的器高が高い。口縁部のナデは体部下半に及び、体部にはナデによる段を有する。10は復元口径11.2cmを測り、器高の高い杯型を呈する。口縁部のナデは口縁部のみに施す。

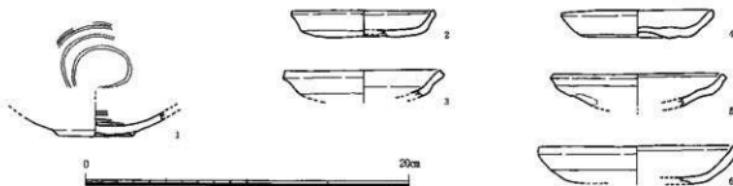


Fig. 010 SA135出土遺物 (S=1/3)

土師器皿（11）は復元口径9.3cmを測る小型のものである。内湾した後短く外側に突出する口縁部と比較的厚い鉢を有する。

白磁はいずれも口縁部の細片である。12は口縁端部を短く折り返し、13は口縁端部を緩やかに外反させる。

軒平瓦は平安時代のもの（14）と奈良時代のもの（15）がある。14は額貼付によって成形し、凹面に布目、凸面にケズリ痕が残る。瓦当文様は氾の痛みが見らる。半分以上を欠損するため中心能りは不明であるが、唐草と花文を組み合せたもので、類例については不明である。15は均等唐草文を持つものである。厚さ7.4cm、内区厚さ3.3cmを測り、上外区に杏仁形珠文、下外区に龜文を施す。6661Da型式のものと考えられる（奈良市教育委員会1996）。

当遺構の年代は土師器皿の年代観から14世紀後半頃のものと考えられる。

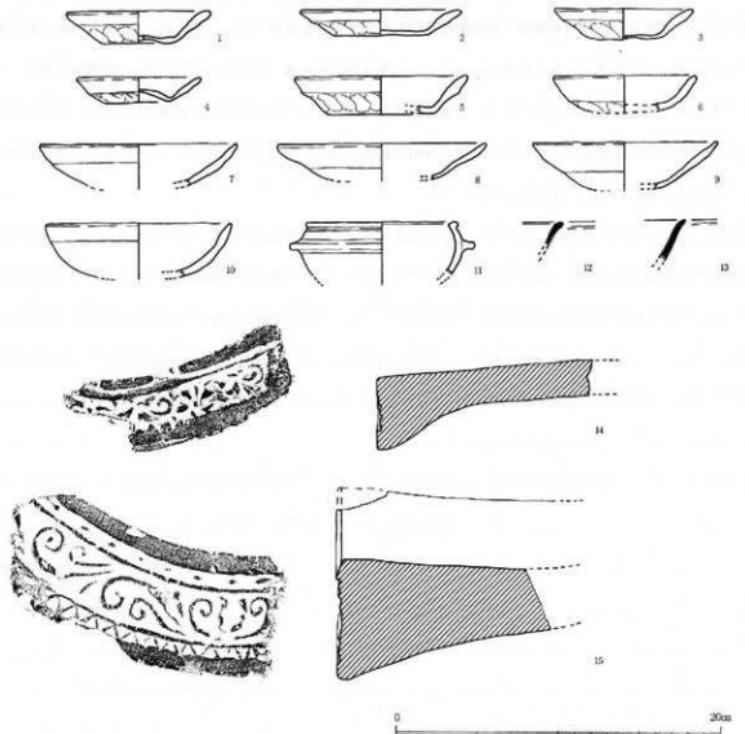


Fig. 011 SK119出土遺物 (S=1/3)

第2造構面検出遺構出土遺物

SK105出土遺物 (Fig. 013・014)

大量の遺物が出土したが、このうちいくつかを図化した。

土師器皿 (1~19)、瓦器皿 (20~24)、瓦器碗 (25~35)、瓦質捏鉢 (36)、白磁碗 (37~39)、青磁碗 (40)、黒色土器碗 (41)、綠釉陶器碗 (42)、須恵器杯 (43)、須恵器碗 (44)、須恵器鉢 (45) が出土した。

土師器皿には口径10cm、器高1.5cm前後的小皿 (1~12) と、口径15cm、器高3cm前後の大皿 (13~19) がある。9は口径8.8cm、器高1.2cmとやや小ぶりで、18も復元口径12.8cmと大皿の中では小振りである。口縁部形態にはややバリエーションがあり、口縁端部を丸くおさめるもの (3・7・10・11・13・16)、端部を上方に擒み上げるもの (4・5・14・17)、口縁端部に面取を施すもの (1・2・6・18)、口縁部を緩やかに外反させるもの (12・15) がある。口縁部の調整については19が2段ナデを施す他は1段ナデの範疇で納まるものである。胎土にも複数のバリエーションがあり、淡橙色で雲母・赤色酸化土粒をやや多く含むもの (1~6・10・11・13・14・16~19)、橙色で砂粒・雲母をやや多く含みやや粗いもの (9)、白色で長石粒を多く含むもの (12・15)、淡橙色で精良、大きめの長石粒を部分的に含むもの (7・8) がある。製作技法については大半が粘土紐巻き上げと考えられるが、一部に粘土板切込の痕跡も残る。いずれの皿も使用の痕跡はほとんど見られないが、3には内面に油煙の痕跡が而的に付着し、16は口縁部に煤が付着する。

瓦器皿はいずれも平坦な底部と強く立ち上がる体部を有し、口縁部は強いナデにより短く外反する。底部外面には放射状に指頭圧痕が残る。底部内面にはジグザク状のヘラミガキがあり、体部内面にはヘラミガキは見られない。20は口径9.5cm、器高1.65cmを測り、底部内面のミガキは14往復以上を施す。21は口径9.0cm、器高1.8cmを測り、底部内面のミガキは11往復を数える。22は口径9.3cm、器高1.9cmを測り、底部内面のミガキは9往復を数える。23は口径9.8cm、器高1.75cmを測り、底部内面のミガキは8往復を数える。24は口径9.2cm、器高1.5cmを測り、底部内面のミガキは5往復程度を数える。

瓦器碗はいずれも口径14.5cm前後を測り、内湾する体部と断面三角形の貼り付け高台を有する。内面見込み部のヘラミガキはいずれも2回転前後の崩れた連結輪状暗文だが、34のように4回転のしっかりしたものもある。外面はいずれも上半のみにやや乱れた4分割のヘラミガキを施すが、34は下半に至るしっかりした4分割ヘラミガキを施す。34については器壁も厚く、1型式先行するものである。また、35の外面ヘラミガキは口縁部のみに施す。これらの瓦器碗について個々の口径、器高、その他の情報を詳述する。25は復元口径14.0cmを測り、外面のユビオサエが顕著である。26は復元口径15.0cm、27は口径14.3cm、器高5.4cm、復元底径5.2cmを測る。28は口径15.0cm、器高5.2cm、底径4.7cmを測り、器壁やや薄い。29は復元口径14.6cm、器高5.35cm、底径4.7cmを測り器

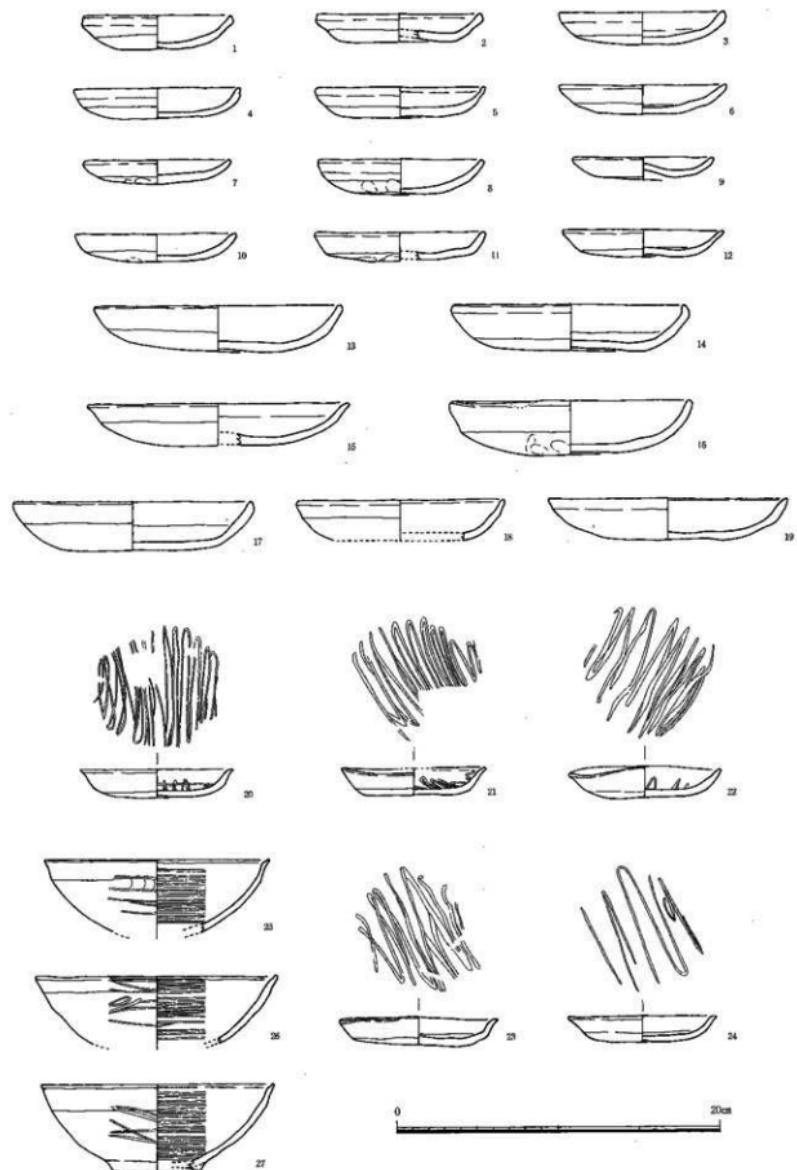


Fig. 013 SK105出土遺物 (S=1/3) (1)

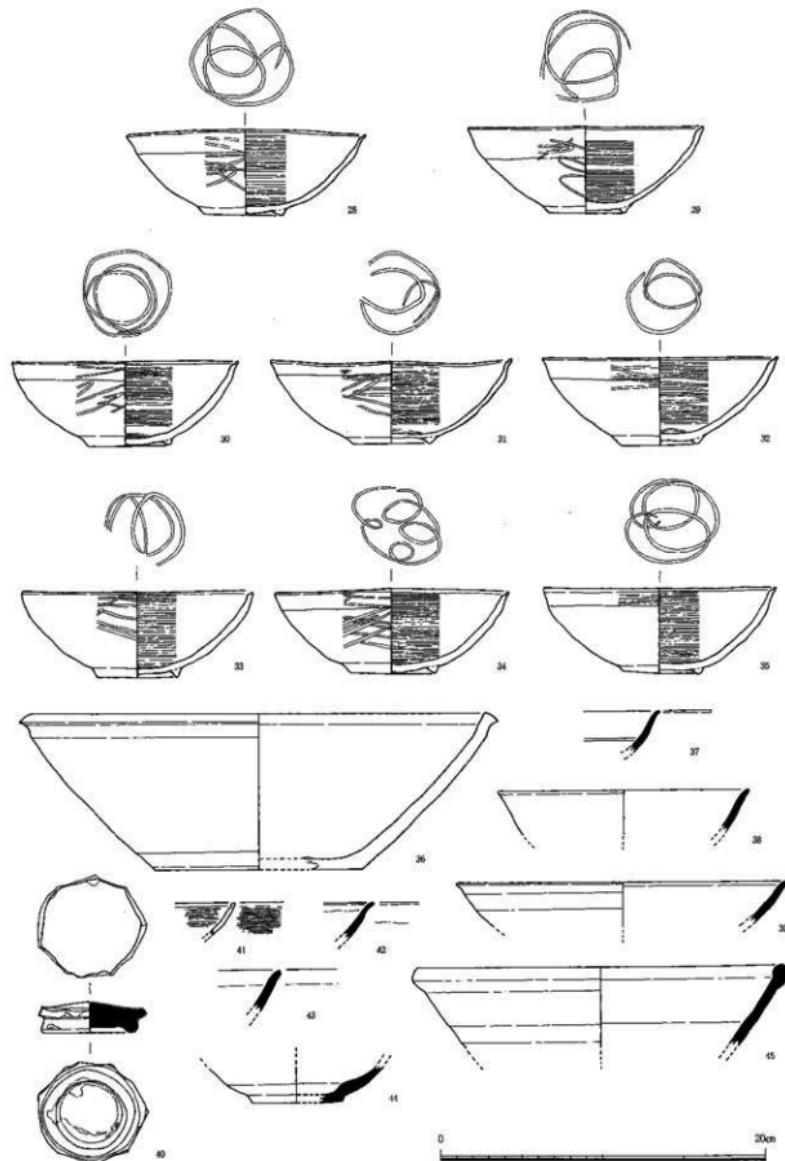


Fig. 014 SK105出土遺物 (S=1/3) (2)

質やや薄い。30は口径14.0cm、器高5.2cm、底径5.1cmを測る。器壁はやや厚い。31は復元口径15.0cm、器高5.2cm、底径4.7cmを測り、器壁薄い。32は口径14.5cm、器高5.4cm、底径4.7cmを測り、外面のミガキはやや粗い。33は復元口径14.4cm、器高5.3cm、復元底径5.0cmを測る。高台は他に比べやや低い。34は口径14.6cm、器高5.3cm、底径5.2cm、35は口径14.4cm、器高5.2cm、底径5.1cmを測る。

瓦質挂鉢（36）は復元口径28.1cm、器高9.7cm、復元底径13.0cmを測り、平坦な底部と直線的に開く体部を有する。口縁端部は四角く取まるが、端部を強いナデにより外側につまみ出す。内外面ヨコナデ調整を行い、内面下半は使用の為摩滅する。外面下半付近には重ね焼きの痕跡が残る。焼成は完全な瓦質焼成である。形態的には東播系須恵器にも見えるが細部の調整や焼成が異なり、产地は不明であると言わざるを得ない。

白磁（37～39）はいずれも碗である。細片ばかりで全体像を知るものはないが、38は復元口径15.6cm、39は復元口径20.7cmを測る。いずれも白磁V類焼であると考えられる。

青磁（40）は碗底部である。底径5.7cmを測り、高台疊付付近まで施釉する。周縁を打ち欠き陶製円板に転用している。

黒色土器（41）は口縁部のみの細片である。内外面黒色処理したB類焼であり、内外面に密なハラミガキを行う。口縁端部には内面側から1条の沈線を施す。10世紀頃のものと考えられる。

綠釉陶器（42）は口縁部のみの細片である。口縁部はわずかに外反する。焼成は淡灰色の須恵質を呈し、内外面施釉する。

須恵器杯（43）は口縁部のみが残存する。直線的な体部とわずかに外反する口縁部を有する。胎土は灰白色を呈し、やや粗い。数少ない奈良時代の遺物であると考えられる。

須恵器碗（44）は復元底径5.6cmを測る。円板状の底部を有し、内面に窪みを持つ。胎土は黑色粒子を含み灰白色で硬質である。底部外面には糸切りの痕跡が残る。11世紀後半頃の東播系須恵器碗である。

須恵器鉢（45）は復元口径23.4cmを測り、直線的な体部と丸く納める口縁部を有する。胎土は黑色粒子を含む淡灰色で、焼成は堅緻である。篠窯産須恵器鉢C類（石井1995）で、10世紀後半のものと考えられる。

当遺構の年代は古い遺物の混入が若干あるものの、出土瓦器の年代を参考としたい。34が若干先行する可能性があるものの、その他はおおむね川越縄年III・A型式古段階（川越1983）、12世紀第3四半期頃のものと考えられる（森島1992）。

SK108出土遺物（Fig. 015）

土師器皿（1～15）、瓦器碗（16・17）、瓦器皿（18）、東播系須恵器鉢（19・20）、青白磁合子（21）、軒平瓦（22）が出土した。

土師器皿には口径9.5cm前後の小皿（1～10）、口径14cm前後の大皿（11～15）の2種がある。小皿はいずれも体部が緩やかに立ち上がるもので、やや上げ底になるものもある。口縁部のナデはいずれも底部近くまで達する。口縁部に面を持つものは少ない。1は口径9.5cm、器高1.9cmを測り、口縁端部に面を持つ。2は復元口径9.5cm、器高1.3cmを測り、底部はやや上げ底状を呈する。3は口径9.6cm、器高1.55cmを測り、口縁端部に面を持つ。4は口径9.1cm、器高1.7cmを測り、口縁部に煤が付着する。5は復元口径10.0cm、器高1.6cmを測り、体部上半に粘土紐の痕跡が残る。6は口径9.1cm、器高1.85cmを測り、口縁端部はやや上方に引き出す。底部はやや上げ底状を呈する。7は口径9.0cm、器高1.8cmを測り、内外面被熱する。8は口径9.8cm、器高1.7cmを測り、体部はやや直線的である。10は口径9.3cm、器高1.5cmを測り口縁端部はやや肥厚する。大皿はなだらかに湾曲する体部を持つものと、やや強く屈曲する体部を持つものがある。11は復元口径14.2cm、器高2.4cmを測り、体部は強いナデのため屈曲する。口縁端部はナデによる面を持つ。12は復元口径12.7cm、器高2.45cmを測り、湾曲する体部を持つ。13は復元口径14.3cm、器高3.2cmを測り、湾曲する体部を持つ。口縁端部はわずかに上方へつまみ上げる。14は復元口径14.0cm、器高2.6cmを測り、体部には強いナデによる段を有する。15は口径13.4cm、器高2.3cmを測り、湾曲する体部を有する。

瓦器楕（16・17）はいずれも断面三角形の貼り付け高台を持ち、内面見込み部に1～2回転の連続輪状略文を有する。16は復元口径14.3cm、器高4.2cmを測り、外面のミガキは口縁部のみに残る。17は復元口径14.3cm、器高4.7cmを測り、外面には崩れた分割ミガキが残る。

瓦器皿（18）は口径8.7cm、器高1.6cmを測り、底部外面には放射状にユビオサエ痕が残る。口縁端部はわずかに窪む。内面見込み部には8往復程度のジグザグ状略文が残る。

東播系須恵器鉢（19・20）はいずれも直線的な体部と端部が外側に肥厚して上方に面を持つ口縁部を有する。内外面ヨコナデ調整を行い、内面下半には使用による擦痕が残る。

青白磁合子（21）は型押しの合子である。平坦な底部と短い受け部、直線的に上方へ引き出す口縁部を有する。胎土は白色で精良である。

軒平瓦（22）は均等唐草文を持つものである。厚さ6.4cm、内区厚さ3.4cmを測り、上外区に杏仁形珠文、下外区に锯齿文を施す。6661Da型式のものと考えられる。

当遺構の年代は出土瓦器類がいずれもIII-A型式新段階にあたるもので、東播系須恵器鉢の型式もII期1段階のものであることから（森田1986・1995）、12世紀末頃の年代が想定される。

SK110出土遺物（Fig. 016）

土師器皿（1～21）、瓦器楕（22～25）、瓦器皿（26）、東播系須恵器鉢（27）、瓦器鉢（28）が出土した。

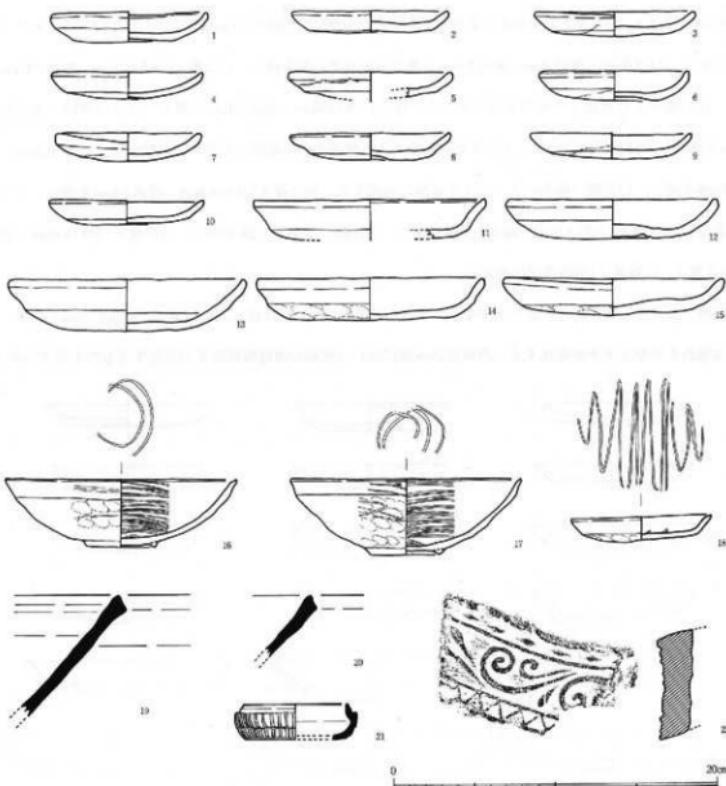


Fig. 015 SK108出土遺物 (S=1/3)

上部器皿には口径9.5cm前後の小皿（1～13）と、口径14cm前後の大皿（14～21）がある。小皿はバリエーションが豊富で、複数の形態がある。1は口縁部を内側に折り返すいわゆるコースター状の形態を呈する。復元口径7.9cm、器高1.4cmを測る。2は緩やかに湾曲する体部とやや上げ底気味の底部を有する。口径9.3cm、器高1.7cmを測る。3は復元口径10.2cm、器高1.35cmを測り、口縁端部に面を有する。4は薄手で焼成の良好なものである。口径9.9cm、器高1.55cmを測り、口縁端部を小さく上方に引き上げる。口縁部には1箇所煤が付着する。5は復元口径9.6cm、器高1.5cmを測り湾曲する体部と上げ底状の底部を有する。口縁部には複数煤の付着が見られる。6は復元口径9.2cm、器高1.6cmを測り、口縁端部は短く上方へ引き上げる。やや厚手である。7は復元口径10.0cm、器高1.9cmを測り、緩やかに湾曲する体部とやや上げ底気味の底部を有する。やや厚手である。11は口径9.7cm、器高1.6cmを測り、体部に粘土縫の接合痕が残る。12は口径9.6cm、器高1.9cmを測り、底部に粘土縫の接合痕が残る。13は

口径9.7cm、器高1.7cmを測る。全体的に被焼痕を有する。大皿には口径が12cm代のもの（14・15）とそれ以上のものがある。14は復元口径12.3cm、器高2.3cmを測り口縁端部に面を持つ。15は復元口径12.3cm、器高1.95cmを測る。16は緩やかに湾曲する体部を持つもので、復元口径13.6cm、器高2.4cmを測る。17は口径15.1cm、器高2.7cmを測り、口縁部の強いナデにより体部が屈曲する。体部の広い範囲を被焼する。18は復元口径14.8cm、器高2.55cmを測り、17同様口縁部のナデにより体部が屈曲する。19は復元口径14.8cm、器高2.3cmを測り、やや厚手である。20は復元口径13.9cm、器高2.3cmを測り、口縁部にわずかに面を持つ。21は復元口径14.0cm、器高2.5cmを測り、口縁部に1箇所焼が付着する。

瓦器椀（22~25）は完存率が悪く全体像が分かれるものが多い。22は復元口径14.4cm、器高4.75cmを測り、外面には崩れた分離ミガキが存在する。内面見込み部には1~2回転の連結輪状暗文が存在するものと考えられる。

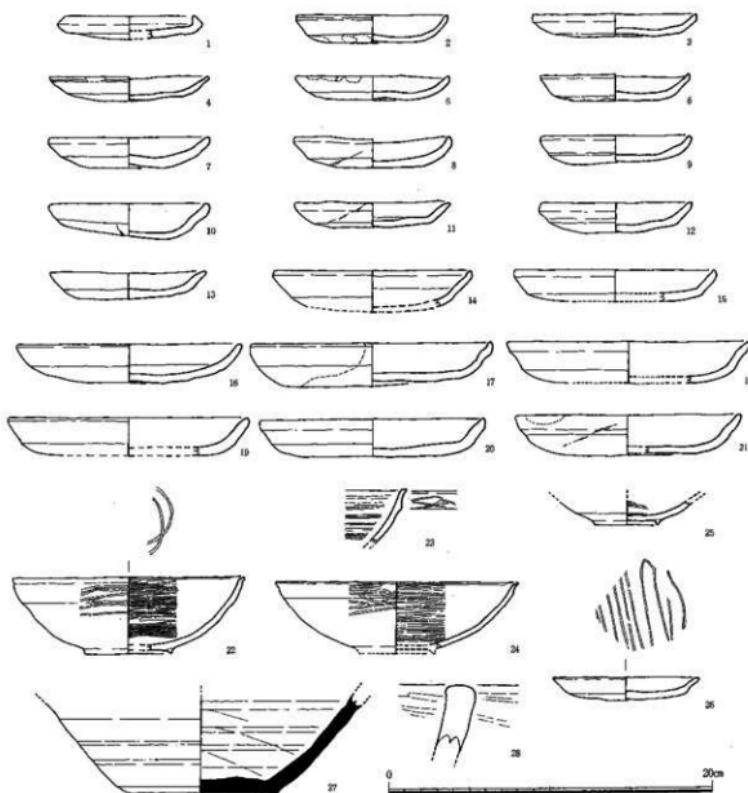


Fig. 016 SK110出土遺物 (S=1/3)

23は口縁部のみ残存する。外面のミガキは口縁部のみに残存する。24は復元口径15.0cmを測り、外面には崩れた分割ミガキが残る。25は底部のみが残存する。見込み部には1回転以上の連結輪状暗文が残る。

瓦器皿（26）は復元口径9.0cm、器高1.4cmを測り、見込み部には最低5往復のジグザグ状暗文が残る。

東播系須恵器鉢（27）は体部下半から底部が残存する。底径9.2cmを測り、底部外面は回転糸切りを行う。内面は使用により摩滅する。

瓦器浅鉢（28）は端部の肥厚する厚手のものである。灰白色の比較的緻密な胎土を有し、内外面幅の広いヘラミガキを施す。

当遺構の年代は出土瓦器碗の型式がIII-A型式新段階であり、土師器皿の年代観も矛盾しないことから12世紀末頃の年代が考えられる。

SK112出土遺物 (Fig. 017)

土師器皿（1～26）、瓦器椀（27～30）、東播系須恵器鉢（31～34）、白磁椀（35～37）がある。

土師器皿には口径10cm前後的小皿（1～18）、口径14.5cm前後の大皿（19～26）がある。土師器小皿は体部が緩やかに済曲し口縁部が丸く収まるものが主体であるが、底部から明瞭に立ち上がるもの（10・13・16）もある。口縁端部の形態には上方へ摘み上げるような面を有するもの（2・4・5）、弱い面を持つもの（1・3・15）、外反するもの（13）なども見られる。9の外面には煤が付着する。製作技術については多くのものに粘土紐巻き上げの痕跡が見られるが、6には円板切りこみの痕跡が見られる。17はいわゆるコースター状の皿である。18は足高台を有する皿である。それぞれの法量を記述すると、1が口径9.9cm、器高1.6cm、2は口径9.6cm、器高1.95cm、3は口径9.8cm、器高1.75cm、4は口径9.9cm、器高1.8cm、5は口径9.7cm、器高2.1cm、6は口径9.5cm、器高1.7cm、7は口径9.9cm器高2.1cm、8は口径9.5cm、器高1.5cm、9は口径9.0cm、器高1.75cm、10は口径10.1cm、器高1.5cm、11は復元口径9.0cm、器高1.4cm、12は口径9.5cm、器高1.7cm、13は復元口径11.2cm、器高1.9cm、14は口径10.0cm、器高1.7cm、15は口径9.4cm、器高2.05cm、16は口径9.3cm、器高1.6cm、17は口径9.4cm、最大径10.8cm、18は復元口径10.6cm、器高3.0cm、高台径7.4cm、高台高1.5cmをそれぞれ測る。土師器大皿は無高台のものが主体だが有高台のもの（26）もある。無高台のものには緩やかに済曲する体部を有するもの（19～21・23）と、ナデにより稜がつくもの（22・24・25）がある。口縁部形態は大半が丸く収まるものだが、ナデによる面を持つもの（22・25）も存在する。22、24には粘土紐の痕跡が明瞭に残る。19は口径13.4cm、器高3.0cm、20は復元口径12.8cm、器高2.5cm、21は復元口径14.0cm、器高3.1cm、22は復元口径13.4cm、器高2.8cm、23は復元口径14.4cm、器高2.7cm、24は復元口径14.2cm、器高2.55cm、25は復元口径14.8cm、器高2.7cm、26は復元高台径10.3cm、高台高2.3cmをそれぞれ測る。

瓦器輪（27～30）はいずれも内面にやや隙間の多い圓線ミガキ、外面上半に崩れた分割ミガキを施す。27は復元口径14.0cm、器高4.8cm、復元高台径4.6cmを測る。内面見込み部には最低2回転の連結輪状暗文を施す。高台は断面三角形の貼り付け高台である。28は復元口径14.6cmを測り、体部外面には粘土紐の痕跡を残す。29は復元口径14.4cmを測り、内面の圓線ミガキはやや粗い。30は高台径4.5cmを測り高台の位置は底部より上位に位置する。見込み部には2回転の連結輪状暗文を施す。

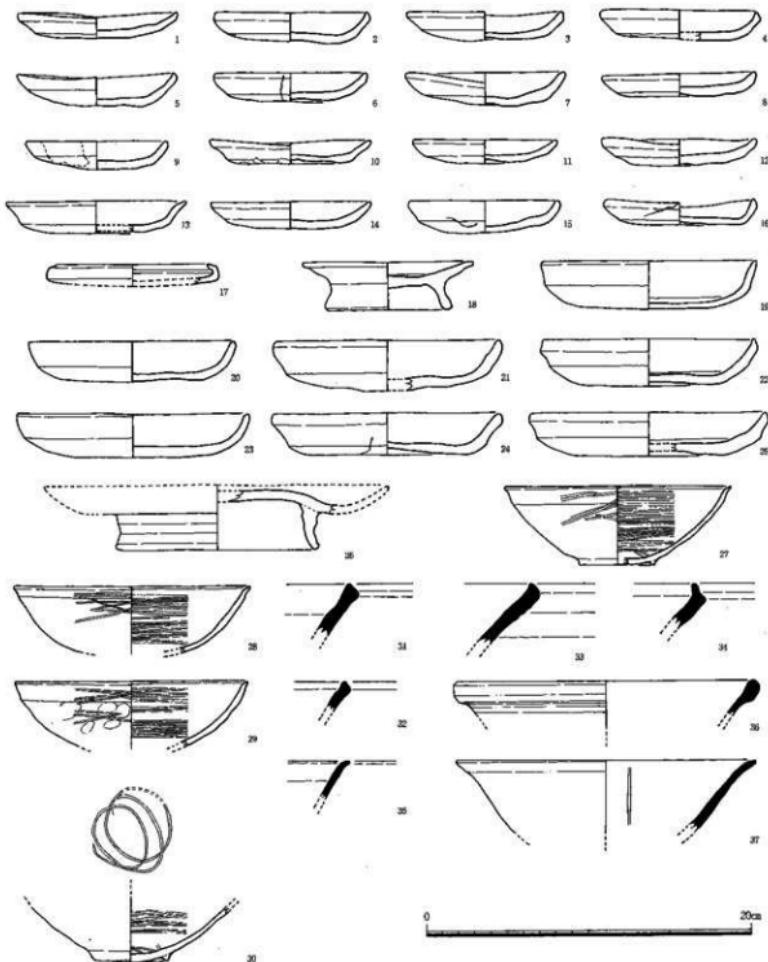


Fig. 017 SK112出土遺物 (S=1/3)

東播系須恵器鉢（31～34）はいずれも灰色の硬質のものである。断面形態は口縁端部をやや肥厚して四角く収めるもの（31・32）、丸く肥厚して内側に短くつまみ出すもの（33）、上方に長く摘み上げるもの（34）がある。

白磁碗（35・36・37）はいずれも細片である。35は口縁端部がほぼ水平に外反し、内面に圓線を有する。VI類のものである。36は復元口径18.8cmを測り、厚い玉縁の形態を呈する。釉はややくすんだ白色を呈する。IV類のものである。37は復元口径18.6cmを測り、白色の釉薬を施す。口縁部は緩やかに外反し、内面には分割線を有する。VIII類のものである。

当遺構の年代は瓦器碗がIII-A型式新段階のものであり、土師器皿、東播系須恵器鉢もII期1段階のものと矛盾しないことから、13世紀初頭の年代が考えられる。

SK114出土遺物（Fig. 018・019）

土師器皿（1～25）、瓦器皿（26～28）、小型瓦器碗（29）、瓦器碗（30～32）、白磁碗（33）、土師器釜（34）、東播系須恵器鉢（35～38）、軒丸瓦（39・40）、軒平瓦（41）、埠（42）が出土した。

土師器皿（1～25）には口径10cm前後的小皿と口径14cm前後の大皿がある。小皿（1～17）には様々な種類のものがある。口縁部形態を見ると、口縁端部を肥厚させて収めるもの（1）、口縁端部を丸く収めるもの（12～15・17）、口縁端部に面を持つもの（2～4・6～8）、口縁端部を上方へ引き上げ気味に収めるもの（5・9・11）、口縁端部に沈線を伴う強い面を持つもの（10）、口縁端部を弱く外反させるもの（16）がある。口縁部のナデは体部下半まで滑らかに施すものが大半であるが、強いナデによって稜を持つもの（1・2・5・6・8・9）、2段ナデを持つもの（14）もある。それぞれの法量は1が復元口径9.4cm、2は復元口徑9.0cm、3は口径9.3cm、器高1.5cm、4は口径9.8cm、器高1.8cm、5は口径9.3cm、器高1.9cm、6は口径9.8cm、器高2.0cm、7は口径10.0cm、器高1.8cm、8は口径9.4cm、器高1.8cm、9は口径9.8cm、器高2.0cm、10は復元口径8.8cm、器高1.2cm、11は口径9.0cm、器高1.3cm、12は復元口徑11.0cm、器高1.5cm、13は口径9.6cm、器高1.9cm、14は口径9.6cm、器高1.8cm、15は口径9.9cm、器高1.7cm、16は復元口径9.4cm、17は口径10.1cm、器高1.8cmをそれぞれ測る。大皿（18～25）は小皿同様口縁形態にいくつかのバリエーションがある。口縁端部を丸く収めるもの（20・23・24）、口縁端部に面を持つもの（18・21・22）、口縁端部を折り返し気味に上方へ引き上げるもの（19・25）がある。口縁部のナデは体部下半まで滑らかに施すものが主であるが厚手で2段ナデを施すものもある。23には内面に工具痕が残る。法量は18が口径13.9cm、器高2.7cm、19は口径14.0cm、器高2.3cm、20は復元口径13.9cm、21は口径14.3cm、器高2.1cm、22は復元口径13.0cm、器高2.0cm、23は口径13.2cm、器高3.1cm、24は復元口径13.4cm、25は復元口径15.8cm、器高3.2cmを測る。

瓦器皿（26～28）、26は復元口徑8.4cm、器高1.5cmを測り、体部外面は粘土縫の接合痕が残る。内面見込み部

には5往復程度のジグザグ状暗文を有する。27は口径9.3cm、器高1.9cmを測り、内面の暗文は摩滅のため不明瞭である。28は口径8.3cm、器高1.6cmを測り、内面見込み部には4往復程度のジグザグ状暗文を有する。

小型瓦器椀（29）は復元口径7.7cm、器高2.8cmを測り、底部には断面逆台形の比較的のしっかりした高台を貼りつける。口縁端部には沈線を持ち、内面見込み部には細かいジグザグ状暗文を施す。

瓦器椀（30～32）、30は復元口径14.4cm、器高4.8cm、底径4.3cmを測り、底部には断面三角形の貼り付け高台を持つ。内面見込み部には2回転程度の連結輪状暗文を施す。外面のミガキは口縁部のみに施す。31は復元口径13.6cm、器高4.3cm、底径5.9cmを測り、内面見込み部には3回転程度の連結輪状暗文を施す。外面のミガキは体部上半にくずれた分割ミガキを施す。32は復元口径13.3cm、器高4.6cmを測り、高台は断面逆台形を施す。体部外面のミガキは崩れた分割ミガキを体部上半に施す。

白磁椀（33）は復元口径16.2cmを測り、口縁部を玉縁状に肥厚させる。IV類のものである。

土師器釜（34）は復元口径20.1cmを測り、「く」字状に外反する口縁部と下膨れの体部を持ち、水平に延びるやや厚い鶴を貼り付ける。内面には板状工具の痕跡が多数残る。

東播系須恵器鉢（35～38）はいずれも口縁部の破片である。直線的な体部とやや上方に肥厚する口縁部を有する。38はやや厚手である。

軒丸瓦（39・40）、39は内区のみが残存する複弁のものである。中房径約7.1cmを測り、連子数は1+8+8を測る。40は復元径20.3cmを測る複弁のもので、中房径6.3cm、弁区径13.6cmを測り、連子数は1+6である。62350型式のものと考えられる。

軒半瓦（41）は瓦当高5.1cmを測り、内区厚さ2.4cmを測る。外区文様は上外区が朱文、下外区は不明である。

埴（42）は土師質のものである。1面が残存するのみであるため、法量等は不明である。胎土は砂粒を大量に含み粗い。

当遺構の年代は出土瓦器がIII-A型式新段階であり、東播系須恵器がII期1段階のものであることなどから12世紀末から13世紀初頭のものと考えられる。

SK121出土遺物 (Fig. 020)

軒丸瓦（1）が出土した。複弁のもので、中房と外区の一部、弁区のみが残存する。外区は鋸歯文と考えられる。全体像が不明であるが、飛鳥寺と同範囲のある6201Ab型式と考えられる。

SK133出土遺物 (Fig. 020)

土師器皿（2～10）、須恵器杯（11）、瓦器皿（12・13）、瓦器椀（14～17）、白磁椀（18）、青磁椀（19）、白磁壺（20）、東播系須恵器鉢（21・22・24）、東播系須恵器椀（23）、石製円板（25）がある。

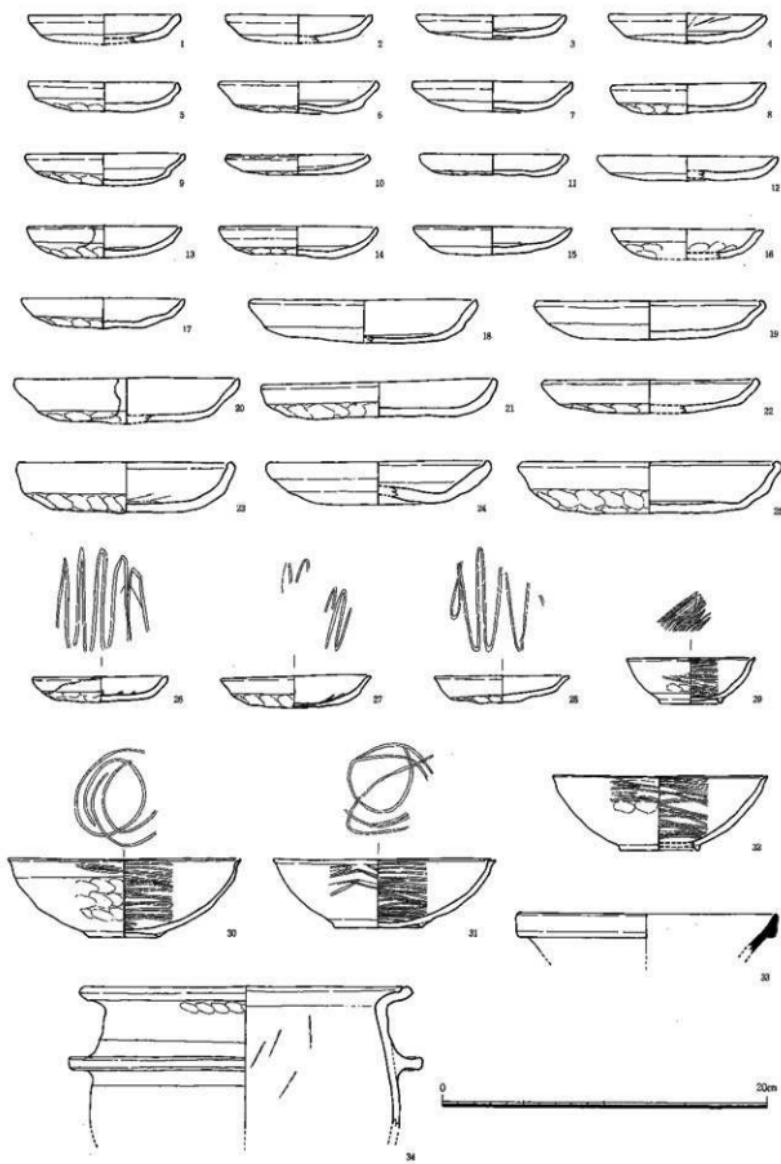


Fig. 018 SK114出土遗物 (1) (S=1/3)

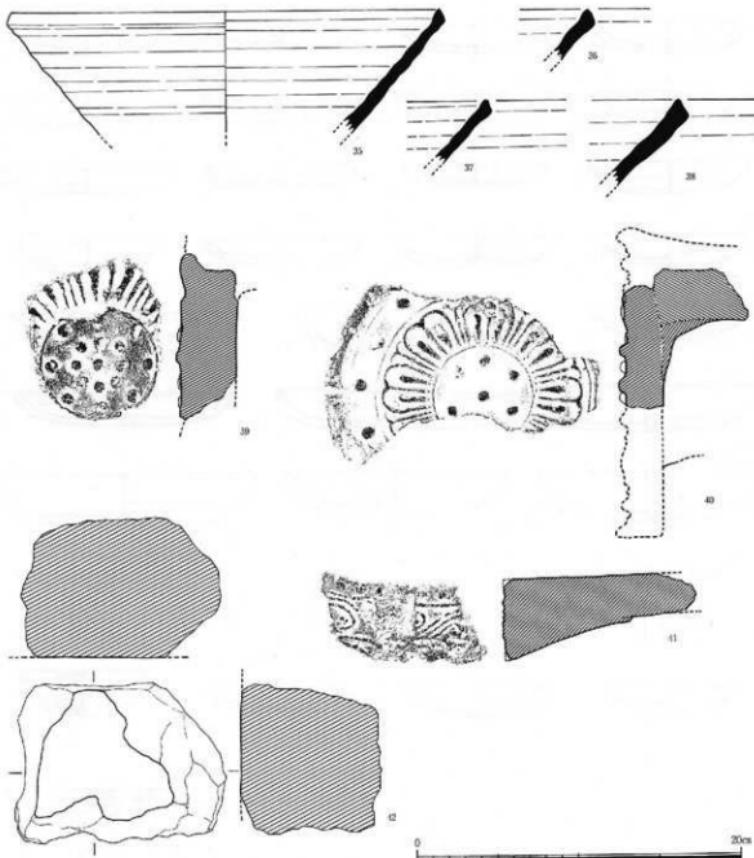


Fig. 019 SK114出土遺物 (2) (S=1/3)

土師器皿には口径10cm前後の小皿（2～7）と、口径14cm前後の大皿（8～10）がある。土師器小皿はいずれも緩やかに湾曲する体部を持つが、やや上げ底気味になるもの（2・3・7）、やや立ち上がりの急なもの（6）がある。口縁端部に明確な面取りを持つものは見られないが、丸みを持つつ面を形成するもの（5）もある。2は復元口径9.0cm、器高2.0cm、3は復元口径9.5cm、器高1.9cm、4は復元口径10.3cm、器高2.0cm、5は口径9.6cm、器高2.1cm、6は口径9.8cm、器高2.0cm、7は口径9.3cm、器高1.6cmをそれぞれ測る。

大皿は口径12cm前後の中皿とも呼べるやや小型のもの（8）と14cm前後のものがある。8は復元口径12.2cmを測り、口縁端部に面を持つ。体部中央付近には内面からの打撃による焼成後穿孔が見られる。9は復元口径

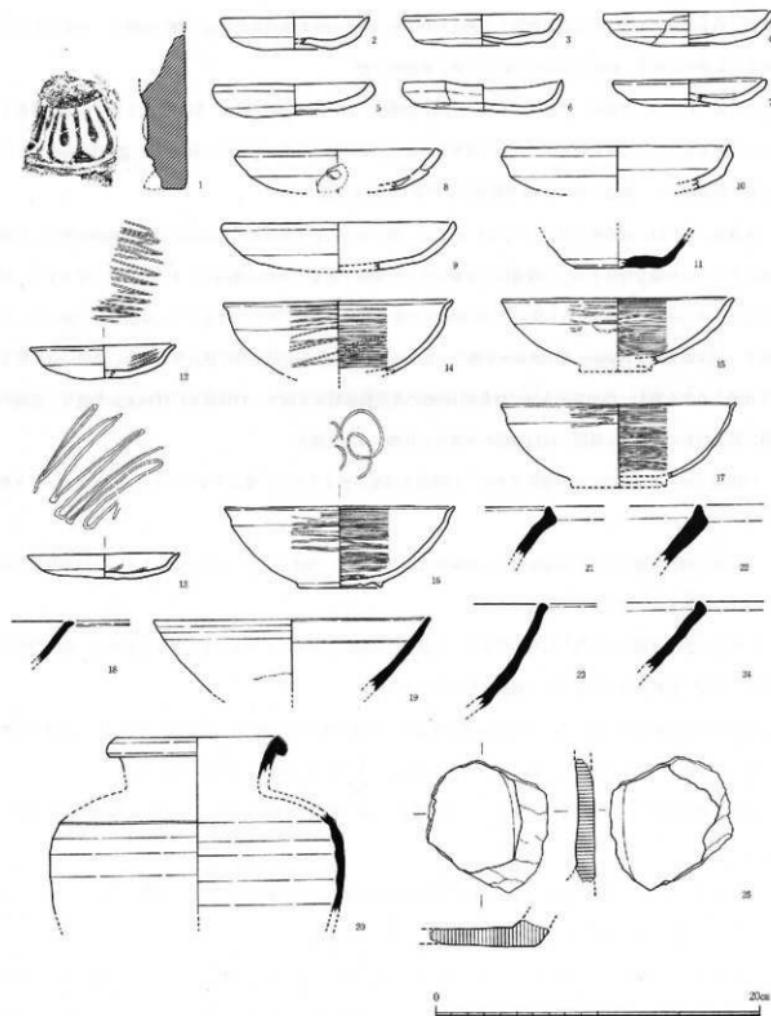


Fig. 020 SK121・133出土遺物 (1.SK121、2~25.SK133) (S=1/3)

13.8cm、器高2.7cmを測り、部にはナデによる稜を有する。口縁端部は上方へ摘み上げ気味の面を持つ。9は復元口径14.2cm、器高2.9cm程度を測る。

須恵器杯(11)は復元底径5.2cmを測り、内外面ヨコナデ調整を行う。底部外面はヘラキリと考えられるがナ

アのため不明瞭である。古代の須恵器とも考えられるが、白色の比較的良好な焼成と薄い器壁から中世のものであるとも考えられる。断定できないためとりあえず図化した。

瓦器皿（12・13）は器形、ミガキともにやや差異がある。12は復元口径8.8cm、器高2.0cmを測り、強く屈曲する口縁部を有する。内面見込み部には10往復程度のジグザグ状暗文を施す。13は口径9.3cm、器高1.6cmを測り口縁部の屈曲は弱い。見込み部には5往復程度のジグザグ状暗文を施す。

瓦器碗（14～17）は器皿の厚いもの（14～16）と、薄いもの（17）がある。14は復元口径14.0cmを測り、口縁部はナデにより強く外反する。口縁端部の沈線はやや不明確である。外面は体部下半まで分割ミガキする。15は復元口径14.4cm、器高4.1cmを測り、口縁端部の沈線はやや不明確である。外面上半には崩れた分割ミガキを施す。16は復元口径14.0cm、器高5.0cmを測り、底部には断面三角形の貼り付け高台を有する。外面には中位まで分割ミガキを施し、内面見込み部には最低3回転の連結輪状暗文を施す。17は復元口径14.4cmを測り、器高の割に薄手のものである。外面には口縁部のみ崩れた分割ミガキを施す。

白磁碗（18）は口縁部のみの細片である。口縁部を外反させるもので、釉はややくすんだ白色を呈する。V類のものである。

青磁碗（19）は復元口径17.0cmを測り、直線的な体部を持つ。内面上半にわずかに沈線を持つ。内面全面と外面上半に施釉する。同安窯系青磁碗である。

白磁壺（20）は細片を合成したものである。玉縁状の口縁部と肩部がやや強く張る器形を有する。胎土は黒色粒子の少ない比較的精良なもので、釉薬はやや厚くかける。

東播系須恵器鉢（21・22・24）は口縁端部を肥厚させた後上方へやや摘み上げたもの（21・22）、器壁が薄手で肥厚した後丸く収まる口縁部を持つもの（24）がある。細片のみで法量等は不明である。

東播系須恵器碗（23）は消曲する体部と、若干肥厚して丸く収まる口縁部を有する。胎土、焼成は鉢と同じである。

石製円板（25）は長軸11.0cm、短軸8.8cm、厚さ1.65cmを測る。滑石製石鍋の底部を転用したものである。打ち欠きのみで仕上げ、側面に研磨等は見られないが、底部外面には一部擦痕が見られる。

当遺構の年代は、出土瓦器碗の中に若干新しい要素を持つものも見られるが外面のミガキや見込み部のミガキ等からIII-A型式古段階のものと考えられ、東播系須恵器もII期第1段階のものであることから12世紀第3四半期頃のものと考えられる。

SP120出土遺物 (Fig. 021)

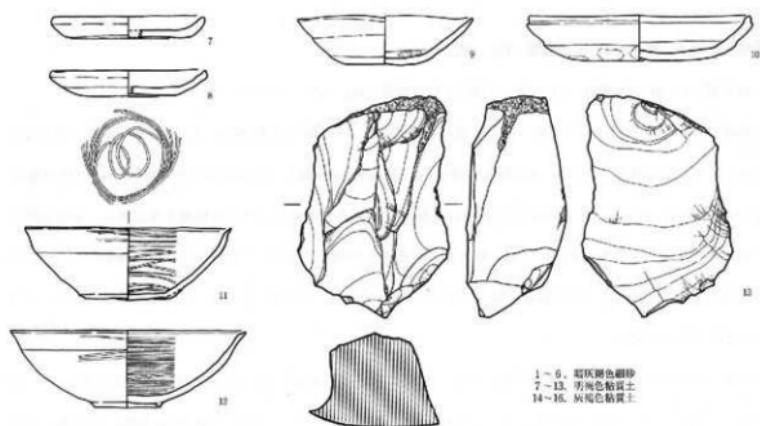
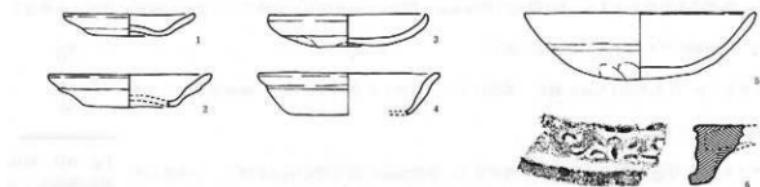
瓦質土器鉢が出土した。やや湾曲する体部と四角くおさまる口縁部を有する。内面には横方向のやや幅の広い

ヘラミガキを施し、外面は口縁部を横方向に、体部を縦方向にヘラミガキする。輪花状を呈する浅鉢であると考えられる。

暗灰褐色細砂層出土遺物 (Fig. 022・023)

第1遺構面を被覆する包含層である。土師器皿 (1~5)、軒平瓦 (6)、ガラス製玉 (Fig.

Fig. 021 SPI2I出土
遺物 (S=1/3)



1~6. 暗灰褐色細砂
7~13. 明褐色粘質土
14~16. 灰褐色粘質土

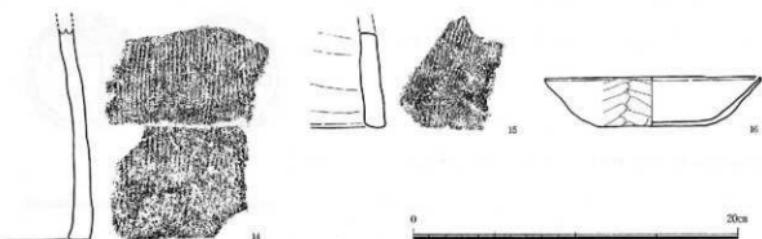


Fig. 022 暗灰褐色細砂、明褐色粘質土、灰褐色粘質土出土遺物 (S=1/3)

023) が出土した。

土師器皿は小皿(1~4)と、大皿(5)がある。1は口径8.2cm、器高1.35cmを測り、赤褐色を呈するヘソ皿である。2は復元口径10.2cm、器高2.0cmを測る。赤褐色を呈し、ヘソ皿になるものと考えられる。3は復元口径9.8cm、器高1.95cmを測り、口縁端部に面を持つ湾曲する体部のものである。4は復元口径11.4cm、器高2.6cmを測る。色調は赤褐色を呈する。5は復元口径14.4cm、器高4.1cmを測り、直線的に収まる口縁部と湾曲する体部を持つ。口縁部のナデは体部中央付近に及ぶ。

軒平瓦(6)は瓦当高3.7cmを測る。界線はなく、退化した唐草文を持つ。断面観察からは瓦当貼付であると考えられる。

ガラス製玉(Fig. 023)は破片のみ残存する。長軸5mm、復元径4.5mmを測り、中央部に円孔を有する。色調はくすんだブルーを呈する。この遺物については卷末に自然科学分析を掲載した。

明褐色粘質土(整地土1)出土遺物(Fig. 022・024)

土師器皿(7~10)、瓦器挽(11・12)、石器(13)、銭貨(Fig. 024)が出土した。

土師器皿には小皿(7・8)と中皿(9)、大皿(10)がある。7は復元口径9.6cm、器高1.4cmを測り、平坦な底部と強く立ち上がる体部を有する。8は復元口径9.9cm、器高1.6cmを測り、口縁端部に面を持つ。9は口径10.9cm、器高3.1cmを測る。やや深く、体部から口縁部は直線的に延びる。口縁部のナデは体部下半に及ぶ。14世紀代の白土器にあたるもので、明褐色土の上層、暗灰褐色砂質土との境界に存在した褐色土に属する遺物の可能性が高い。10は復元口径13.5cm、器高2.8cmを測り、体部下半にはナデによる稜を有する。口縁端部には強いナデによる沈線を伴った面を持つ。

瓦器挽(11・12)には2種類のものが見られる。11は復元口径12.8cm、器高4.5cmを測り、底部には退化した貼り付け高台を有する。内面のミガキは粗く、外面は口縁部のみにミガキを施す。内面見込み部には2回転の連結輪状暗文を施す。12は復元口径14.4cm、器高4.7cmを測り、内面見込み部には2回転程度の連結輪状暗文を施す。高台は断面三角形の貼り付け高台である。

石器(13)はサスカイト製の石核である。長軸14.1cm、短軸9.3cm、最大厚5.7cmを測る。風化の状態から古代以前のものとは考えられず、中世の段階で製作されたものと考えられる。

銭貨(Fig. 024)は和同開珎である。鋳上がりは良好で、銭文は明瞭である。



Fig. 023 暗灰褐色細砂出土ガラス玉 (S=1/1)



Fig. 024 明褐色粘質土出土銭貨 (S=1/1)

当整地土の年代はやや遺物に混じりが見られるが、第1遺構面の遺構との関連から12世紀末以降14世紀後半以前の年代が考えられる。注意したいのは11の瓦器碗である。この瓦器碗はIII-C型式の古手のものと考えられ、13世紀第2四半期の年代が考えられる事から、この層の年代をこれに求める事が可能である。

灰褐色粘質土（整地土2）出土遺物（Fig. 022）

土師器壺（14・15）、土師器杯（16）が出土した。

土師器壺は同一の個体と考えられる。いずれも壺の底部付近の破片である。外面縱方向のハケ調整、内面板状工具によるナデを施す。端面は鞋いヶズリを施す。15にはスカシが存在する。

土師器杯（16）は復元口径13.4cm、器高3.0cmを測り、器壁は薄い。内面ナデ調整、外面ヘラによる分割ケズリを施す。口縁端部は小さく摘み上げる。

当整地土の年代は16の土師器が参考となる。この土師器は南都I新段階に編年されており（三好1995）、9世紀前半の年代が考えられる。

その他の遺構出土遺物（Fig. 025）

本文中で特に記述しなかった遺構出土の遺物について解説する。

SK101から陶製サイコロ（1）、SK102から軒平瓦（2）が、SP107から土師器皿（3・4）がそれぞれ出土した。SK101・102は現代の擾乱、SP107はトレーナー西半で検出したピットである。

陶製サイコロ（1）は1辺2cm前後を測り、白色の精良な胎土を有する。塞の目は鋭利な刺突具によって穿孔され、内部に赤色顔料が付着する部分もある。

軒平瓦（2）は瓦当高4.0cmを測り、頭貼り付けによって成形する。界線の内側に均等唐草文を施す。平安時代後期～鎌倉時代初期のものと考えられる。

土師器皿（3・4）、3は復

元口径9.5cm、器高2.15cm

を測り、強いナデにより外

反する口縁部を有する。口

縁端部には数カ所煤が付着

する。4は復元口径12.7cm、

器高2.6cmを測る。内面に

は煤が付着し、口縁端部に

はナデによる面を持つ。

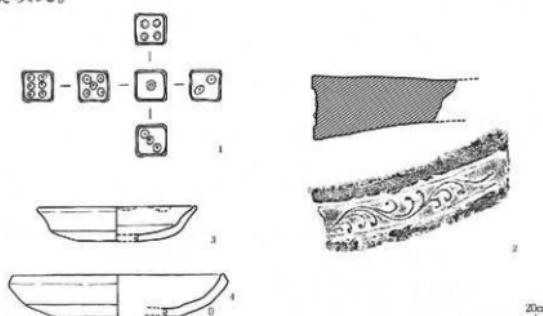


Fig. 025 その他の遺構出土遺物（S=1/3）

(2) 第2トレンチの調査

検出遺構 (Fig. 026)

桜室北西隅に南北方向で設定したトレンチである。14.4m²の範囲を調査した。基本層序は表層から黒褐色土(表土)、瓦礫を多く含む暗灰褐色砂質土、整地土と考えられる明褐色の粘土からなる。遺構面は整地土上面で検出した1面のみで整地土除去後の遺構は見られなかった。

検出した遺構には土坑7基、ピット1基がある。

土坑

SK201

調査区北端KI43区に位置し、SK202を切る。北半、西半は調査区外に達し、本来の規模は不明である。埋土は暗褐色粘質土の単層で、埋土内から13世紀半ば～後半の土器が出土した。

SK202

調査区北端KI43区に位置し、SK201に切られる。西半も調査区外に達し本来の形状は不明である。埋土は上層が暗褐色粘質土、下層は暗灰褐色粘質土で、埋土内から13世紀前半の土器が出土した。

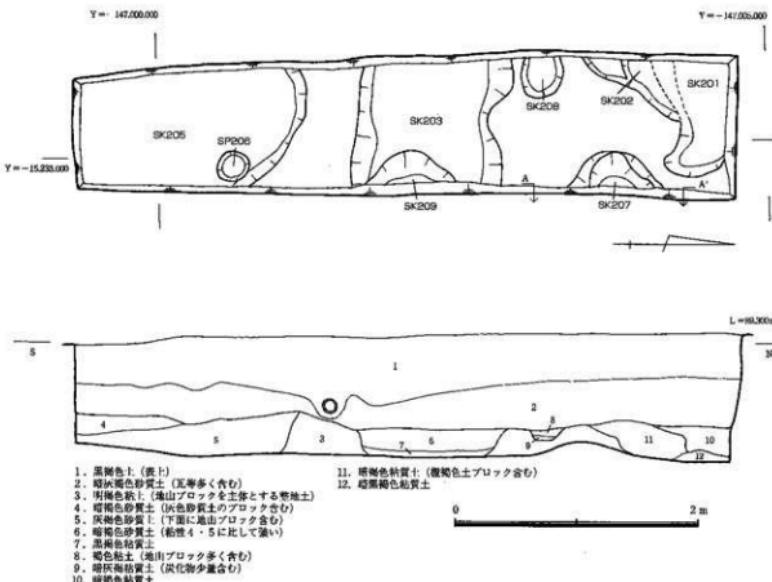


Fig. 026 第2トレンチ遺構全体図・西壁土層図 (S=1/40)

SK203

調査区中央部KH43に位置し、SK209に切られる。南北120cmを測り、東西は調査区外に達する。埋土は下層が黒褐色粘質土、上層が暗褐色砂質土で締まりはよくない。埋土内から13世紀半ばの土器、鎌倉前期の瓦等が出土した。

SK205

調査区南半KG43・KH43に位置し、SP206に切られる。東西南半が調査区外に達し、形状・規模等は不明である。埋土は上層が暗褐色砂質土、下層が灰褐色砂質土で、遺物の出土量は少ない。埋土内から16世紀代の土師器皿等が出土している。

SK207 (Fig. 027)

調査区北西隅KI43区で検出した。東半は調査区外に達し、本来の形状は不明である。平面は不整円形を呈すると考えられ、底部形態もやや起伏を有する。埋土は上層が暗灰色土、下層が明褐色粘土で、下層から拳～人頭大の石が多く出土した。埋土内から土師器細片と古代瓦が出土したが、造構の帰属年代を示す遺物は見つからなかった。

出土遺物

SK201出土遺物 (Fig. 028)

土師器皿 (1～3)、瓦器碗 (4～6)、瓦

器皿 (7) が出土した。

土師器皿 (1～3)、1は復元口径10.4cm、

器高1.5cmを測り、平坦な底部にやや急に立ち上がる体部を持つ。2は復元口径13.4cmを測り、体部には口縁部のナデによる棱を有する。3は復元口径14.4cm、器高2.3cmを測り、やや上げ底状の底部を有する。

瓦器碗 (4～6) はいずれも口縁部の破片である。内面のミガキには隙間が多く見られ、外面は非常に崩れた分削ミガキを施す。

瓦器皿 (7) は復元口径8.6cm、器高1.4cmを測り、内面見込み部には最低3往復のジグザグ状暗文を施す。

当造構の年代は出土瓦器碗がIII-A型式新段階の中でもやや新しい様相を持つ事から13世紀初頭頃の年代が考えられる。

SK202出土遺物 (Fig. 028)

土師器皿 (8～11)、束縛系須恵器鉢 (12)、瓦器碗 (13・14) が出土した。

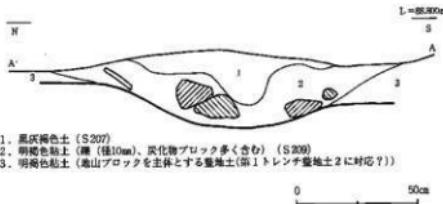


Fig. 027 SK207 土層断面図 (S=1/20)

土師器皿（8～11）、8は復元口径9.4cm、器高1.4cmを測り、器高が低く口縁部は比較的シャープである。9は復元口径10.2cm、器高1.4cmを測り、口縁部はシャープに取まる。10は復元口径11.6cm、器高1.6cmを測り、口縁部は丸く取まる。11は復元口径14.3cm、器高2.4cmを測る。体部下半には強いナデにより稜を有し、口縁部には崩い面を有する。

東播系須恵器鉢（12）は広く開く体部と肥厚した後上方へ摘み上げる口縁部を有する。焼成は灰色で堅緻である。

瓦器椀（13・14）、13は底部のみの破片である。断面三角形の貼り付け高台を有し、内面見込み部には1回転以上の連結輪状暗文を施す。14は復元口径14.0cmを測り、口縁端部は強く外反する。外面のミガキは口縁部のみにわずかに残る。

当遺構の年代は瓦器椀がIII-A型式新段階、東播系須恵器鉢がII期第2段階に相当することから、13世紀前半の年代が考えられる。

SK203出土遺物 (Fig. 028)

土師器皿（15・16）、東播系須恵器鉢（17）、瓦器椀（18～21）、瓦器皿（22）、軒丸瓦（23）が出土した。

土師器皿（15・16）、15は復元口径13.2cm、器高2.0cmを測り、平坦な底部と直線的に開く体部を有する。口縁端部は丸く取まる。16は復元口径13.2cm、器高2.5cmを測り、体部には強いナデによる後線を有する。口縁部には煤が付着する。

東播系須恵器鉢（17）は口縁部の破片である。直線的な体部と上下に肥厚する口縁端部を有する。

瓦器椀（18～21）、18は底部の破片である。高台は潰れた絆状を呈し、底部より上位に位置する。内面のミガキは体部と見込み部が未分離になっている。19は口縁部の破片である。器壁は薄く、ややいびつに歪む。内面のミガキは隙間が広く、外面のミガキは口縁部のみに施される。20は復元口径12.4cmを測り、比較的直線的に広がる体部を有する。内面のミガキは粗く、外面のミガキは省略される。口縁端部は明瞭な面を持ち、端部の沈線は省略される。21は底部のみの破片である。退化した高台を持ち、内面のミガキは体部と未分離のラセン状ミガキである。

瓦器皿（22）は復元口径9.1cm、器高1.8cmを測る。口縁部はナデにより強く外反する。内面には粗いジグザグ状暗文を施す。

軒丸瓦（23）は、複弁のものである。復元径15.9cm、復元中房径4.1cm、復元弁口径8.7cm、外縁幅1.6cmを測る。一見平安のものに見えるが、外縁幅の広さ等から鎌倉時代のものと考えられる。

当遺構の年代は、出土瓦器椀がIII-C～III-D型式であることから13世紀第3四半期頃の年代が考えられる。

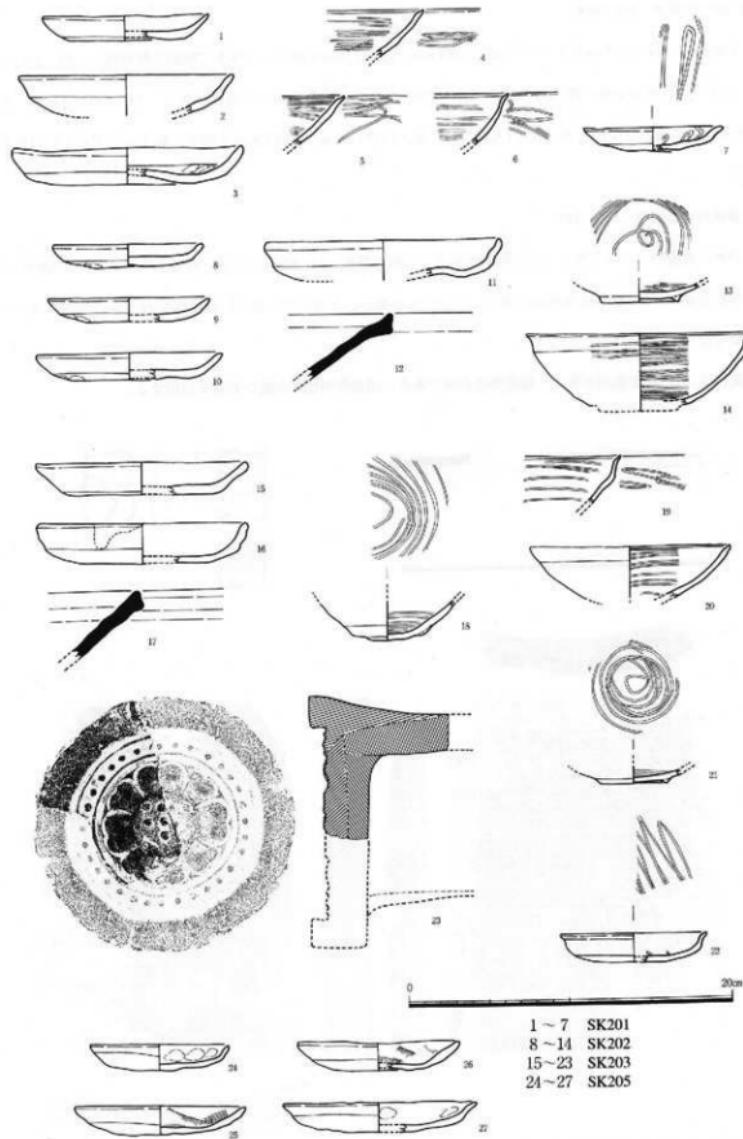


Fig. 028 第2トレンチ出土遺物 (S=1/3)

SK205出土遺物 (Fig. 028)

土師器皿（24～27）が出土した。24は口径8.6cm、器高1.7cmを測り、内外面に指頭圧痕が残る。25～27はいずれも浅くやや外反気味に開く体部を有する。内面にはやや幅の広いハケ調整が残る。25は口径10.6cm、器高1.8cm、26は復元口径10.1cm、器高1.8cm、27は復元口径12.0cm、器高1.8cmを測る。胎土はいずれも灰白色を呈する。

遺構外出土遺物 (Fig. 029)

中世の遺構のベースとなっている明褐色粘土から須恵器蓋（1）、砥石（2）が、壁面から平瓦（3）が出土した。須恵器蓋（1）は復元径20.0cmを測り、平坦な天井部と、下方に折り返す口縁端部を有する。内外面ヨコナデ調整を行う。

砥石は（2）は欠損部が多く、規模等は不明である。淡褐色の比較的脆い石材を使用する。

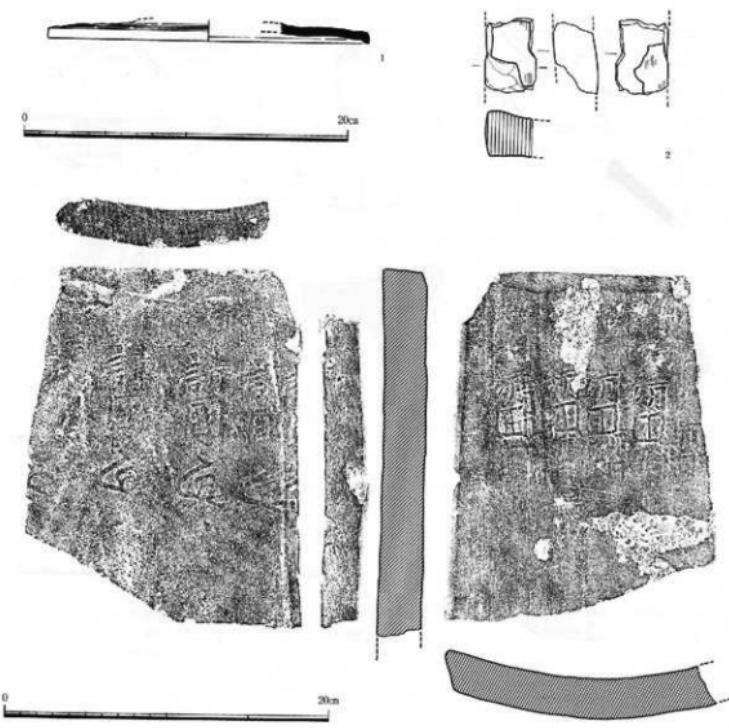


Fig. 029 第2トレンチ遺構外出土遺物 (S=1/3)

平瓦（3）は厚さ2.5cmを測り、凸面ケズリ調整、凹面布目を有し、凸面に「請國〔花押〕」、凹面に判読不能の文字のタキを有する。

（3）第3トレンチの調査（Fig. 030）

第3トレンチは桝室西側に東西方向で設定したトレンチである。25m²の調査を行ったが、調査区中央付近に存在した現在の井戸であるSE301や現代の攪乱孔であるSK302によって層位が安定せず、工事掘削が遺構面に影響を及ぼさないと判断したため調査を中断した。基本層位は上層から黒色砂質土、幕末から明治頃の土器を含む灰褐色粘質土、16世紀頃の土師器皿が出土した炭、焼土を含む黒褐色土、灰褐色砂質土となる。いずれの層も疊りが悪く不安定であるが、炭、焼土を含む黒褐色土は調査区東端に比較的安定して存在していた。

出土遺物（Fig. 031）

各層から中國産染付（1）、土師器皿（2~6・8）、国産染付（7）が出土した。

1は魚鱗文を持つ染付け輪である。復元底径6.0cmを測り、表土より出土した。C群のものである（小野1985）。2~4はいずれも灰褐色粘質土から出土した土師器皿である。口径7.0cm、器高1.5cm前後を測り、緩やかに湾曲する形態を呈する。口縁部をナデ調整し、内面見込み部には仕上げナデを施す。いずれの口縁部にも煤が付着する。

5・6は明褐色粘土から出土した土師器皿である。いずれも口径7.6cm、器高1.6cm前後を測り、口縁部に煤が付着する。口縁部ナデ調整を行うが、内面見込み部に仕上げナデは見られない。

7は明褐色粘土から出土した国産染付けである。復元口径9.8cmを測り、直線的に立ち上がる体部を有する。外面上には草花文を施文する。

8は黒褐色土から出土した土師器皿である。外反気味に開く体部と薄く平坦な底部を有する。体部と底部の境界には窪みを有する。胎土は暗褐色を呈する。

（4）第4トレンチの調査

第4トレンチは本堂南東側に南北方向で設定したトレンチである。27m²の範囲の調査を行った。基本層序は上層から黒色砂質土（表土）、黒灰色砂質土（表土）、非常によく縮まった灰褐色砂質土、暗褐色砂質土からなる。最下層には整地土と考えられる地山のブロックを含む層があるが、整地上直下からは遺構は見つからなかった。

検出した遺構は6基の上坑、11基のピットである。

検出遺構（Fig. 032）

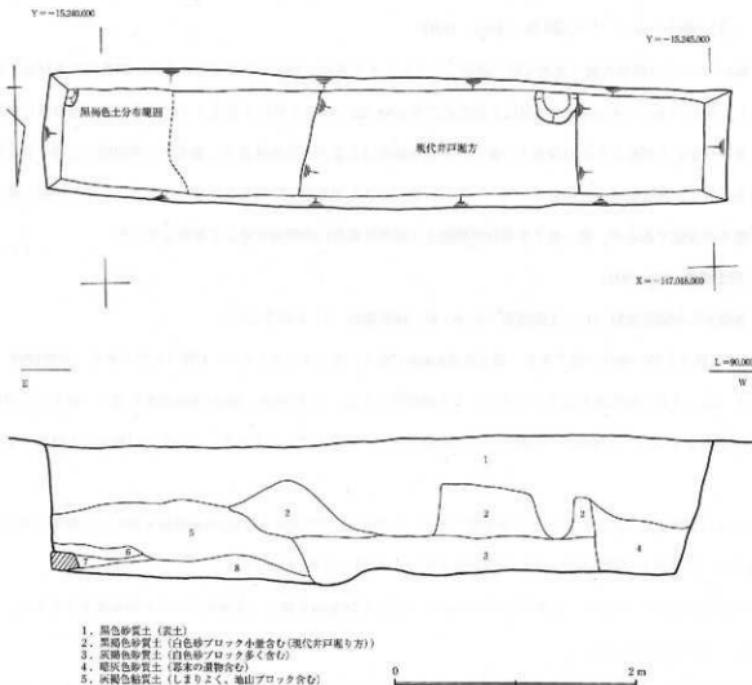


Fig. 030 第3トレンチ造構全体図・南壁土層図 ($S=1/40$)

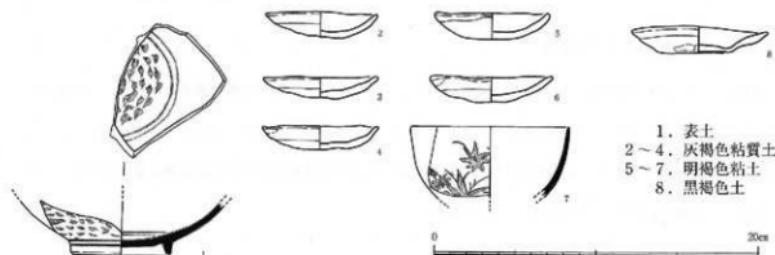


Fig. 031 第3トレンチ出土遺物 ($S=1/3$)

土坑

SK402

調査区東端JR19区に位置し、SK403を切る。東半、南半が調査区外に達し、本来の規模は不明である。埋土は黒褐色の締りの悪い粘質土で、底部付近からは湧水が見られる。埋土内から幕末頃の遺物が多数出土した。

SK403

調査区東端JR19区に位置し、SP401、SK402に切られる。壁の立ち上がりは急で、埋土は黒褐色の砂質土である。遺物の出土はほとんど見られないが、鎌倉時代の瓦1点が出土した。

SK406

調査区東南部JR20区に位置しSK407を切る。径135cm前後の円形を呈すると考えられるが、南半分が調査区外に達しているため正確な規模等は不明である。埋土は上層が締まりの悪い暗灰褐色砂質土、下層が締まりの悪い暗褐色砂質土である。埋土内から近代の遺物が出土した。

SK407

調査区北東部JR20区に位置し、SK406、SP427に切られる。径85cm前後の不整円形を呈すると考えられるが北半は調査区外に達し、本来の形状は不明である。深さ20cmと残りは良くない。埋土内から古代の土器が出土した。

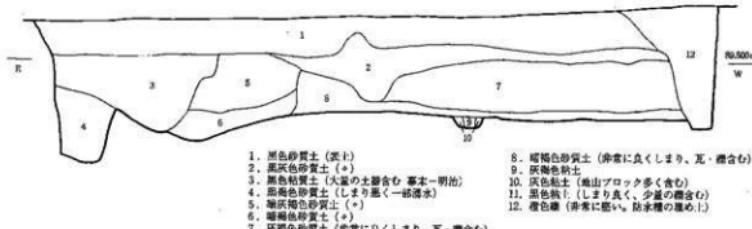
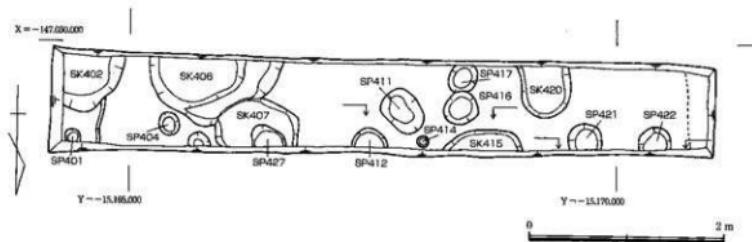


Fig. 032 第4トレチ遺構全体図・南壁土層図 (S=1/50)

SK420

調査区南東JR21区に位置する土坑。すでに上面が削平されおり、3cm程度が残存していたのみである。東西50cmを測り、南半は調査区外に達する。埋土内から12世紀末頃の瓦器焼が出土した。

SP416・SP411 (Fig. 033)

調査区中央部JR20・21区に並列して位置するピット。建物等を構成するかどうかは判断できない。SP416は径30cm、深さ25cm程度を測る。柱痕跡は径15cm程度を測り、裏込めには瓦を多く配する。埋土内から古代の土器の他瓦器焼、白土器が出土した。14世紀以降の遺構と考えられる。

SP411は径45cm、深さ30cm程度を測る。柱痕跡は約20cmを測り、裏込めには多数の石を配する。埋土内から瓦器焼等が出土した。

SP421・SP422 (Fig. 033)

調査区北西JR21区に並列して位置するピット。建物等を構成するかどうかは判断できない。SP421は径40cm、深さ30cm程度を測り、柱痕跡は15cm程度を測る。最下層には暗褐色粘土質が存在し、その上面を覆うように地山ブロックを主体とする明褐色粘土が覆う。柱痕跡はこの層まで達しない。埋土内から13世紀代の瓦器焼が出土した。SP422は径35cm、深さ30cm程度を測り、柱痕跡は径20cmを測る。柱痕跡内には瓦が多量につめられており、抜き取りの後埋め戻した可能性がある。埋土内から12世紀代の土師器皿、瓦器焼が出土した。

出土遺物 (Fig. 034)

黒褐色粘土出土遺物

陶器小杯（1・2）、染付仏飯具（3・4）、陶器小皿（5）、陶器灯火具（6～8）、染付鉢（9）、染付椀（10・12）、染付蓋（11）、白磁皿（13）が出土した。

陶器小杯（1・2）、1は口径6.6cm、器高3.3cmを測り、口縁部に呉須による笠葉文を施す。陶胎染付である。2は口径6.1cm、器高3.1cmを測り、淡い褐色の胎土と透明釉を体部上半に施す。

染付仏飯具（3・4）、3は復元口径6.0cm、器高4.2cm、復元底径4.0cmを測る。体部に草花文を持ち、脚部は中空である。4は漫状文を持つものである。口径5.9cm、器高5.7cm、底径3.9cmを測り、脚部は中空である。

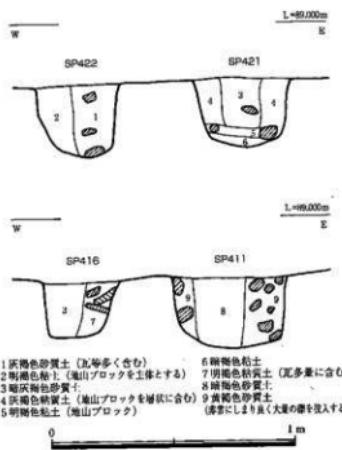


Fig. 033 SP411・416・421・422土層断面図
(S=1/20)

陶器小皿（5）は口径6.1cm、器高1.6cmを測り、口縁部には煤が大量に付着する。淡褐色の胎土に透明釉を施す。

陶器灯火具（6～8）、6・7は灯明受皿である。ともに口径3.0cm前後、器高3.7cm前後、底径3.6cm前後、最大径5.4cm前後を測り、淡褐色の胎土とやや黄味を帯びた釉薬を施す。8は柔焼である。復元口径4.1cm、器高3.4cmを測り、注口部には煤が多量に付着する。

染付鉢（9）は復元口径18.4cm、器高8.5cm、高台径8.6cmを測り、白色の精良な胎土を持ち、比較的厚い釉を施す。底部外面には朱書きによる文字が見える。文字種は不明であるが、縦師の記号と考えられる。

染付碗（10・12）、10は復元口径9.8cm、器高5.1cm、復元高台径3.9cmを測り、体部數カ所を焼継する。底部外面に縦師の記号を記入する。12は復元口径12.1cm、器高5.3cm、復元高台径4.6cmを測り、釉は光沢の強いものである。

染付壺（11）は12と対になるものと考えられる。内面天井部に草文を施す。光沢の強い透明釉を施す。

白磁皿（13）は稜皿の形態を呈し、光沢のある胎土と透明釉を持つ。体部に焼継痕を有し、底部外面に焼継材による「キハ・九」の文字が記される。

灰褐色砂質土出土遺物

陶器壺（14）が出土した。体部上半を欠損する。底径8.2cm、胴部最大径15.5cmを測り、長石を多く含む褐色の胎土と、淡褐色の釉を持つ。体部中央付近は方形に施釉せず、わずかに「山伏」と読める墨書きを持つ。屋号と考えられる。

SK420出土遺物

須恵器杯（15）が出土した。破片のため法量等は不明である。胎土は灰白色で比較的軟質である。

SP412出土遺物

土師器皿（16・17）が出土した。共に破片のため法量等は不明である。16はやや外反気味の口縁部を持つ厚手のものである。17はやや強く立ち上がる口縁部を持ち、口縁端部を丸く収める。

SP424出土遺物

土師器皿（18）と土師器碗（19）が出土した。

土師器皿は復元口径10.3cmを測り、湾曲する体部と、端部に面を持つ口縁部を有する。

土師器碗は有高台のもので、復元高台径7.0cmを測る。橙色のやや粗い胎土を有する。高台は断面しっかりした三角形を呈する。

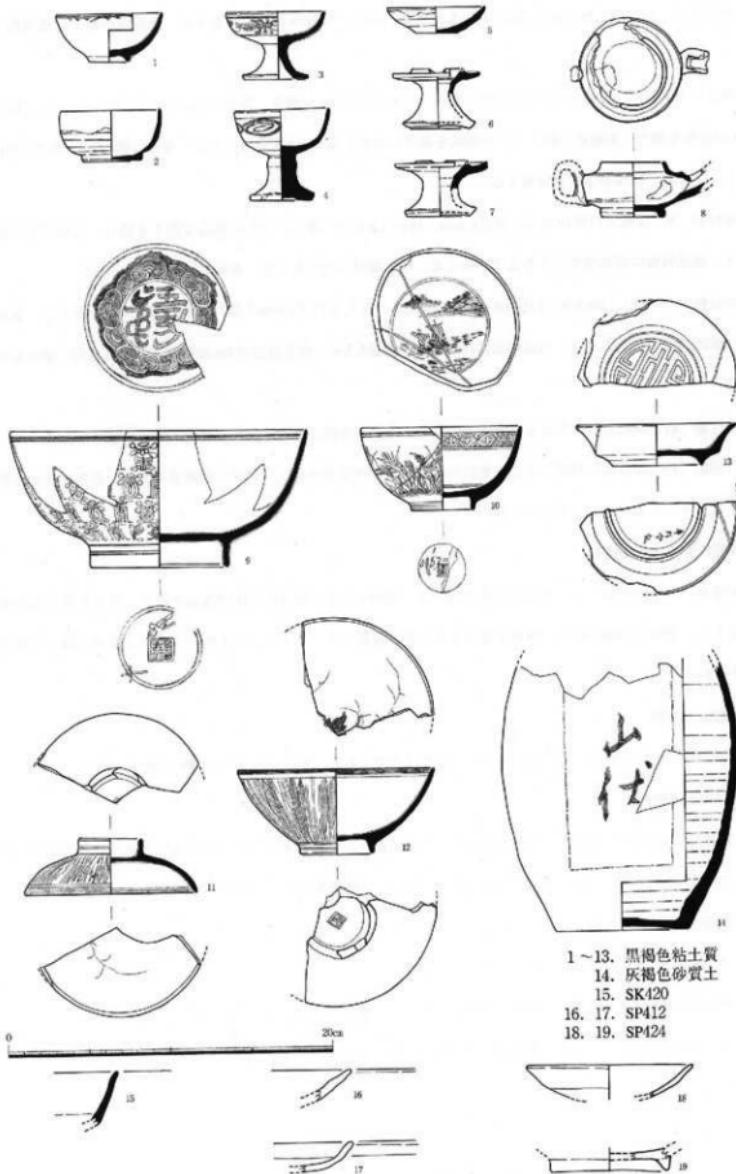


Fig. 034 第4トレンチ出土遺物 (S=1/3)

(6) 元興寺境内防災工事に伴う発掘調査より出土した遺物の分析

1. 分析資料

明褐色粘質土出土銅鏡 (Fig. 024)

暗灰褐色細砂層出土ガラス玉 (Fig. 023)

2. 使用機器及び条件

エネルギー分散型ケイ光X線 (XRF) (セイコーインスツルメンツ (株) 製SEA5230) 資料の微小領域にX線を照射し、その際に資料から放出される各元素に固有のケイ光X線を検出することにより元素を同定する。分析条件は真空下 (ガラス玉)・大気中 (銅鏡)、コリメーター1.8mm、管電圧45kvで測定を行った。

3. 分析結果と考察

銅鏡

主な元素として銅 (Cu)、鉛 (Pb)、スズ (Sn)、鉄 (Fe)、カルシウム (Ca)、チタン (Ti) を検出した。鉄、カルシウム、チタンは土壤成分に由来すると考えられる。銅、鉛、スズを検出したことよりこの古鏡は青銅製であり、通常の銅鏡の成分と比較して特に特徴的な結果は見出せなかった (Fig. 036)。

ガラス玉

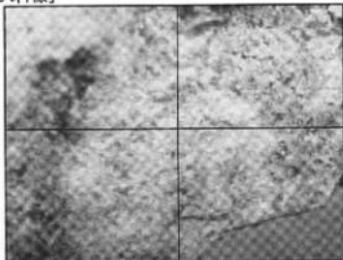
主な元素としてケイ素 (Si)、鉄 (Fe)、銅 (Cu)、鉛 (Pb)、スズ (Sn) を検出した。鉛・ケイ素を含み、バリウム (Ba)、カリウム (K) が検出されなかったことより、 $PbO-SiO_2$ (鉛珪酸塩ガラス) である可能性が高い事がわかった (Fig. 037)。また銅は着色成分として混合されている可能性が高いが、鉄については土壤成分あるいは着色成分の両者が考えられる。どちらであるかはこの分析からでは不明である。

鉛珪酸塩ガラスは奈良文化財研究所肥塚氏の研究によると、紀元前1世紀から3世紀後半まで流通したが、一時途絶え、その後6世紀後半から再び流通するようになったと報告されている (肥塚1999)。

参考文献

肥塚隆保: 1999 「ガラスの調査研究」『日本の美術』9 美術を科学する 沢文堂

[試料像]



視野: [X,Y] 6.25, 4.67 (mm)

[測定条件]

測定装置	SEA5230
測定時間 (秒)	300
有効時間 (秒)	214
試料室雰囲気	大気
コリメータ	Φ 1.8 mm
励起電圧 (kV)	45
管電流 (μ A)	20
コメント	銅錢

[スペクトル]

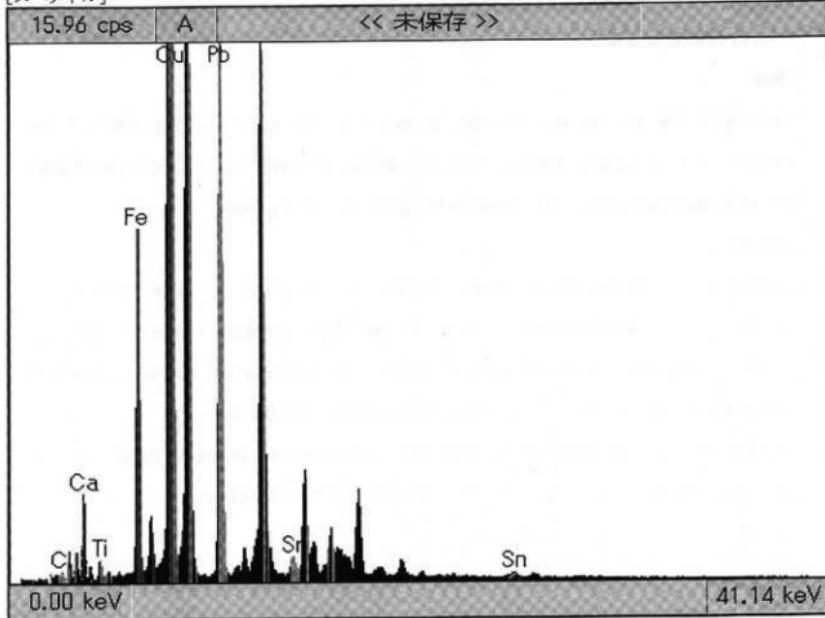


Fig. 036 銅錢のXRFスペクトル

[試料像]



視野: [X,Y] 6.25, 4.67 (mm)

[測定条件]

測定装置	SEA5230
測定時間 (秒)	300
有効時間 (秒)	210
試料室雰囲気	真空
コリメータ	φ 1.8 mm
励起電圧 (kV)	45
管電流 (μ A)	24
コメント	

[スペクトル]

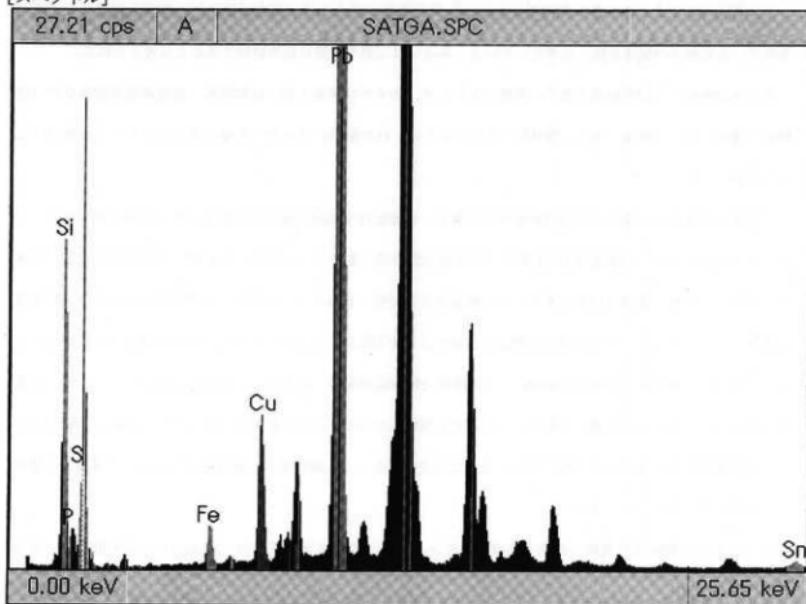


Fig. 037 ガラス玉のXRFスペクトル

IV. 調査のまとめ

(1) 検出遺構について

今回検出した遺構について、いくつかの所見を整理しておく。

最も大きな成果があったのは第1トレンチの調査である。当地は元興寺東室北階大房と東室北階大房の間に位置する。調査の結果古代の僧房に関連する遺構は検出できなかった。しかし、最下層に比較的厚い整地層とそれ以前の柱列が検出できた。整地土の年代は9世紀前半頃の年代が想定できる。現在のところ当該時期の堂舎修理記述は見られず、この整地の契機が如何なるものであったかについては検討の余地がある。奈良市教育委員会が調査を行った元興寺旧境内51次（西室北階大房推定地）でも同時期の整地土が検出されており（奈良市教育委員会1999）、この時期に各地で堂舎の修理が行われていた可能性もある。

この整地土直下より検出された柱列SA135は5°程度西偏するもので、現在の極楽坊、禪室の方位とも、復元されている元興寺の建物方位とも異なっている。あるいは元興寺創建以前の建物であるとも考えられる。

その後10世紀から12世紀後半までの遺構は見られず、わずかに黒色土器、綠釉陶器、羅刹窟須恵器鉢などが12世紀の遺構に混じる程度である。第II章で述べたように、11世紀頃には堂舎の荒廃が進んでいたことを裏付けるものであろうか。

このような状況が一変するのは12世紀後半である。12世紀後半以降大量の土器投棄を伴う土坑が掘られる。これらの土坑はいずれも12世紀第3四半期から13世紀初頭の頃に集中し、瓦器碗、瓦器皿、土師器皿を大量に投棄するもので、同様の遺構は13世紀後半以降大和盆地各地で見られるようになるが、当該時期には南都の寺院周辺に集中して見られる。一例をあげると興福寺旧境内では十万枚以上に達すると考えられる土師器皿が投棄されていた（奈良県立橿原考古学研究所1994）。この時期元興寺は僧房の一部を用いて極楽堂が設けられており、柱寄進文からはここで百日念仏講が行われていたことが判明している。この柱寄進文の最古のものは嘉応三年（1171）で、検出遺構の古いものと年代的に符合することは注意したい。土師器皿の一括投棄はこのような講などの儀礼との関係を考えることができる。

次にこれら12世紀代の遺構を被覆する整地土をみると、この整地土は厚さ10~20cm前後と比較的薄く、突き固めた様子も見られない。大規模な造成ではなく、堂舎の修理、改築に伴うものであると考えられる。整地土内からは13世紀半ばと14世紀後半の瓦器碗、土師器皿が出土しているが、14世紀代のものは上層の遺構、包含層の遺物を混同して取りあげてしまった可能性があり、整地土を切って14世紀後半のSK134が存在することなどから考えても、当整地土の年代は13世紀半ばに求めることができると考えられる。当該期において整地を行うような

堂舎の再編として寛元2年（1244）の極楽房建設があげられる。今回検出した整地層を極楽房建設に伴うものと考えたい。

その後第1トレントでは土師器を主体とする土器溜りSK134が見られるほかは特に目だった遺構は見られない。当地は太子堂の推定地であるが、今回の調査ではその痕跡を見出すことはできなかった。また、1961年の調査では隣接する本堂前において庶民信仰関係資料を大量に包藏した包藏孔が見つかっているが（第II章参照）、これに関連する遺構も検出できなかった。

この他の調査区の結果をまとめると、第2トレントにおいては第1トレントで希薄であった13世紀代の遺構が多く見つかり、釈迦院建設に伴う調査で確認されていた当該期の遺構が南に広く展開していたことが判明した。第3トレントは諸事情により途中で調査を中断したが、調査深度最下部から16世紀代の土師器皿が出土し、少なくとも16世紀段階では揮室西端は現在の位置にあったものであろうことが推定できる。第4トレントからは中世前半期の多くの遺構を検出したが、これらの遺構はこれまでの調査では確認されておらず、今後の検討が必要である。また、今回の調査では墓地は検出されなかったが、南東に近接するの防火壁の調査や東側に隣接する個人住宅建て替えに伴う発掘調査（奈良市教育委員会2001）では同様に墓地が見つかず、南西のポンプ室の調査からは発見されていることから墓地の範囲はある程度設定できる結果となった（第II章参照）。

今回の調査は、非常に規模の小さな調査であったが、得られた成果は大きなものであったと考える。

（2）出土土師器皿の分析

1. 検討対象と目的

今回の調査では瓦も含めて非常に膨大な遺物が出土した。本稿ではこれらの遺物の中でも大量に出土し、詳細な分析が可能な土師器皿を対象として分析を行う。

大和における土師器皿については十六面薬王寺遺跡における松本洋明氏の検討（松本1988）、奈良町における森下恵介氏・立石堅志氏による検討（森下・立石1986、立石1992）、奈良女子大学構内遺跡における坪ノ内徹氏による検討（奈良女子大学1995）、各地域の土器を比較検討した中井淳史氏による研究（中井1994）、菅田遺跡における中山玉生氏による検討（中山2000）など、各遺跡単位、地域単位の土器様相を検討する中で土器様相を構成する一要素という範囲の扱いに留まり、京都における伊野近甯氏や小森俊寛氏・上村憲章氏・森島康雄氏の研究のように土師器皿のみを単独で取上げた研究は見られない（伊野1987、小森・上村1996、森島2001）。本節では良好な一括資料をもとに、主に口径、口縁部形態、胎土の観点からその型式構成を提示し、今後の継続的研究を踏まえた基礎的展望を提示したい。

2. 分析方法

まず、対象とする遺構は、SK105、108、112、114を選んだ。比較的良好な一括性を持つことと、共伴遺物から年代を推定することが容易なことが理由である。それぞれの遺構の年代は、本文中に記述した根拠より、SK105（12世紀第3四半期）、SK108（12世紀末）、SK112（12世紀末）、SK114（13世紀初頭）を想定し、土器器皿の分析結果と対比する。以下の遺物を上述の属性に分解、個々の属性の時間的変化を検討し、時間的変化を示す型式に再構成する。胎土、口縁部形態は下記の分類項目を基準とする。

胎土

A類 淡褐色を呈し、微細な雲母を含む。精良。

B類 淡橙色を呈し、雲母、クサリ礫やや多く含む。

C類 橙色を呈し、砂粒、雲母多く含みやや粗い。

D類 白色を呈し、長石粒を多く含みやや粗い。

E類 淡橙色で雲母、クサリ礫少なく精良である。3mm大の大きな長石を含むものもある。

F類 褐色でやや粗い。

G類 橙褐色でクサリ礫多く含む。精良。

H類 暗褐色で砂礫多く含み、粗い。

I類 赤褐色で雲母、クサリ礫多く含む。

J類 赤褐色で雲母やや多く含み、精良。

K類 暗灰褐色を呈し軟質のもの。

口縁部形態

1類 1段ナデで丸く收める。

2類 2段ナデで丸く收める。

3類 端部を上方へ引き上げ気味につまむもの。

4類 端部をナデにより面を持つもの。明確な面を持つものとナデにより面下部が丸くなるものがあり、いずれの遺構でも後者が圧倒的多数を占める。

5類 いわゆる「て」字状口縁のもの。

6類 ナデにより外反するもの。

7類 ナデにより底部付近に稜を持つもの。

8類 いわゆるコースター状を呈するもの。

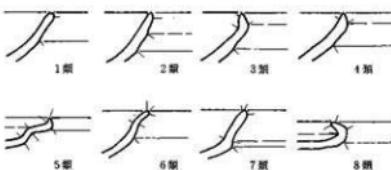


Fig. 035 口縁部形態のバリエーション

3. 属性の変遷について

今回分析の対象とした各遺構からは、大量の土師器皿が出土しているが、その内訳が見ると、SK105からは656点の口縁部破片が出土し、口縁部計測法による個体数復元では124.05個を測る。SK108からは244点34.34個体、SK112からは443点58.51個体、SK114からは287点46.93個体がそれぞれ出土している。まず口縁部破片の中で口径復元が可能な残存率の高いものから復元した口径を比較する。

SK105出土土師器皿は小皿が大半であるが、この小皿の口径分布は10.5cmを中心とし、9.5cm～10.5cmの範囲にはほぼ9割が該当する。また大皿では15.0cmを中心とし、15.0～15.5cmがほとんどである。小皿と大皿の間には両者の中间法量のものが存在する。

次にSK108出土土師器皿ではやはり小皿が大半である。小皿の口径分布はSK105同様9.5～10.5cmを中心とするが、SK105のように10.5cmに分布の中心があるような状況は見出せず、9.5～10.5cmの間に均等に分布することがわかる。大皿でも明確な中心が見えず均等に分布するが、SK105が15.0cmを中心とするのに対し、SK108では14.0cmを中心として13.5～14.5cmの範囲に集中する。

統いてSK112出土土師器では小皿の比率が高まることが指摘できる。その分布は9.5cmを中心として9.0～10.0cmの範囲に集中する。大皿では15.0cmを中心として14.5～15.0cmに集中するが、大皿の数が少なく検討の余地を残す。

最後にSK114出土土師器を検討する。SK114ではSK112とは逆に大皿の比率が増加していることが指摘できる。小皿の分布は10.0cmを中心として9.5～10.5cmの範囲に集中する。大皿では14.5cmを中心に14.0～15.0cmの範囲に集中する。

以上口径の面から見ると、SK105→SK108→SK114→SK112の順に口径が縮小しているということが判明した。

次に口縁部形態の比率について検討する。口縁部形態は各破片を口縁部形態毎に分け、口縁部計測法により個体数を復元、個体数の比率を算出した。

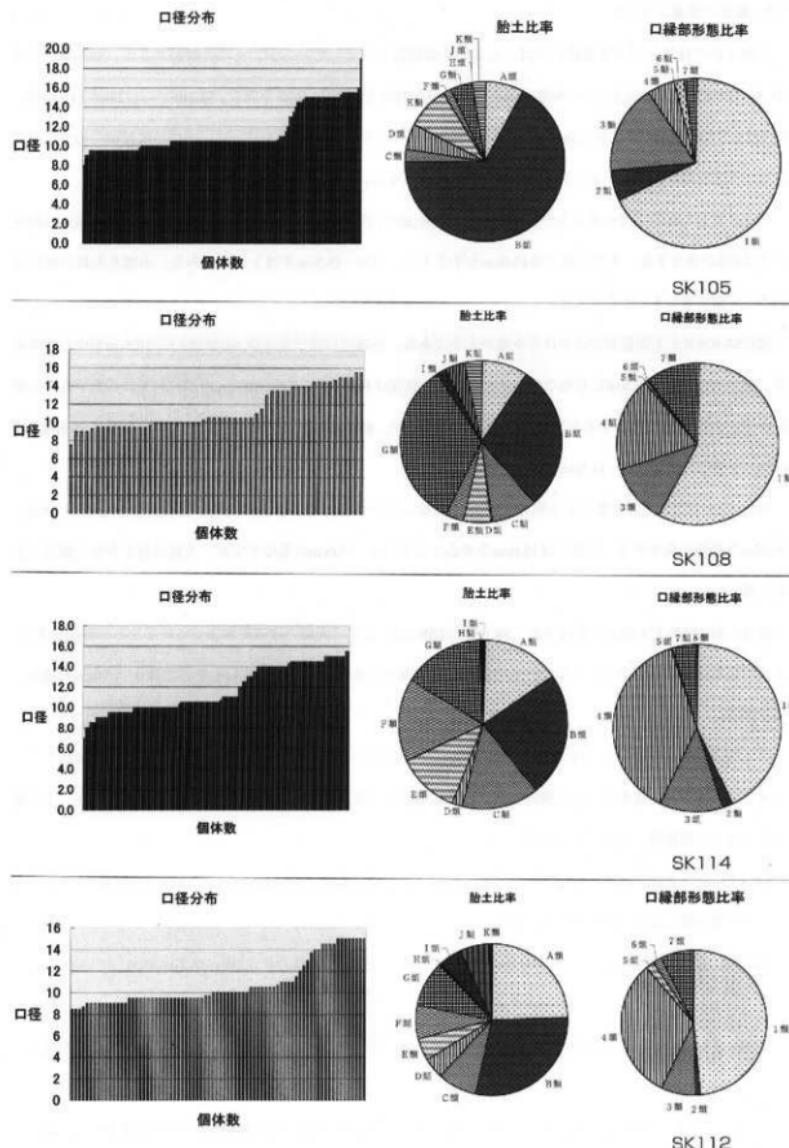
SK105においては圧倒的に1類が多く、統いて3類、4・2類が続き、その他についてはほとんど見られない。3類と2・4類の間には大きな格差が存在する。

SK108では1類が優位であることに変化はないが、2類が見られず、代わりに3類の比率が増加している。また7類が高い比率を有していることも特徴である。

SK112では1類の優位は他と同じであるが、4類の比率の高さが目立つ。これに伴い1類の相対的比率が低下している。

SK114では4類の比率の増加が著しい。3類・7類の比率はSK112と同様だが4類の増加分1類が減少している。

-Tab. 001 出土土器器皿の属性



口縁部形態の変遷を見ると、1・3類の減少、4類の増加という方向で変遷すると仮定すると、SK105→SK108→SK112・SK114という変遷が想定できそうである。

次に胎土比率について検討する。

胎土はSK105においてB類の突出するのに対し、SK108・SK112・SK114では様々な種類の胎土が混在すること、SK108においてG類の突出が見られることなどが指摘できる。

以上の分析結果から、土坑群の変遷を捉えるとSK105→SK108→SK114→SK112とすることができる。

4. 型式の構成

以上各属性の変遷について検討してきたが、ここでそれぞれの属性の組み合せから型式を再構成したい。ただし、今回の分析は1遺跡の資料のみで12世紀後半～13世紀初頭の非常に限られた時期のものである。そこで正式な型式名称については今後広域、多時期の資料の検討を待って設定することとし、今回は仮設型式という名称を使用したい。また、今回の分析では非常に多くの分類項目を使用している。本来的にはすべての属性の組み合せにより数百通りの型式設定が可能であるが、それでは煩雑になるばかりではなく編年研究という本来の目的にそぐわない空虚な型式を大量に発生させることとなる。そこで各遺構の時期的特徴を表す主要な属性の組み合せをそれぞれ数通り設定し、口縁部形態分類と胎土分類を組み合せた1A、2Bというような仮設型式として提示したい。煩雑な文章であるが、ともあれ実際の作業を通して解説して行く。

SK105出土土師器皿を構成するのは、口径9.5～10.5cmの小皿と口径15.0～15.5cmの大皿で構成される。胎土はB類を主体としてA・E類が客観的に存在する。その他にもC・D・F・G・H・J・K類が存在するが、いずれもごく少数である。口縁部形態では1類が圧倒的で3・2・4類と続く。それぞれの実際の構成比率をみると、口縁部形態1類はA・B類の胎土を主体とし、その他の胎土を客観的に有する。2類はB類が主体である。3類はB・G類、4類もB・G類が主体である。

のことからSK105は以下の型式の仮設が可能である。それぞれの型式には大皿と小皿がある。

- ・丸く収める口縁部を有し、淡橙色で精良な胎土を有するもの。仮設1A型式
- ・丸く収める口縁部を有し、淡橙色で雲母・クサリ礫をやや多く含む胎土を持つもの。仮設1B型式
- ・二段ナデを有し、丸く収める口縁部と淡橙色で雲母・クサリ礫をやや多く含む胎土を有するもの。仮設2B型式
- ・口縁端部を摘み上げ気味に成形し、淡橙色で雲母・クサリ礫をやや多く含む胎土を有するもの。仮設3B型式。
- ・口縁端部を摘み上げ気味に成形し、棕褐色でクサリ礫を多量に含む胎土を有するもの。仮設3G型式。
- ・口縁端部にナデによる丸みを持った面を有し、淡橙色で雲母・クサリ礫をやや多く含む胎土を有するもの。

仮設4B型式

- ・口縁端部にナデによる丸みを持った面を有し、橙褐色でクサリ繙を多量に含む胎土を有するもの。仮設4G型式。

以上SK105は仮設1A・1B・3B・4G型式を主体とし、仮設2B・4B・4G型式を客体とする構成を有する。

SK108出土土器皿を構成するのは口径9.5~10.5cmの小皿と、「径14.0~15.0cmの大皿である。SK105と比較して大皿の口径縮小が指標となる。胎土は新たにG類が著しく増加し、A・C類がこれに続く。口縁部形態は前段階の1・3・4類が主体であるが、新たに7類が増加する。1類の口縁部形態に新たにG類の胎土が加わり、7類の口縁部にはB・G類の胎土が主体である。新出の型式は以下のものである。

- ・丸く取める口縁部と橙褐色でクサリ繙を多量に含む胎土を有するもの。仮設1G型式。
- ・口縁部の強いナデにより体部下半に稜を有し、淡橙色で雲母・クサリ繙をやや多く含む胎土を有するもの。仮設7B型式。
- ・口縁部の強いナデにより体部下半に稜を有し、橙褐色でクサリ繙を多量に含む胎土を有するもの。仮設7G型式。

以上、SK108は仮設1A・1B・4B・4G型式を主体とし、1G・3B・3G・7B・7G型式を客体とする。仮設2B型式は著しく減少するものと思われる。

SK114出土土器皿は口径分布においてSK108と大きな差異はない。胎土比率においてE・F類の比率が増加していることが特徴としてあげられる。口縁部形態において4類の増大、3類の減少が著しい。SK112において新たに比率を増すのは以下の型式である。

- ・丸く取める口縁部と橙色を呈し、砂粒、雲母多く含みやや粗い胎土を有する。仮設1C型式。
- ・丸く取める口縁部と淡橙色で精良、大きめの長石が少量混じる胎土を有する。仮設1E型式。
- ・丸く取める口縁部と淡橙色で精良、褐色でやや粗い胎土を有する。仮設1F型式。
- ・口縁端部を摘み上げ気味に成形し、橙色を呈し、砂粒、雲母多く含みやや粗い胎土を有する。仮設3C型式。
- ・口縁端部にナデによる丸みを持った面を有し、橙色を呈し、砂粒、雲母多く含みやや粗い胎土を有する。仮設4C型式。
- ・口縁端部にナデによる丸みを持った面を有し、淡橙色で精良、大きめの長石が少量混じる胎土を有する。仮設4E型式。
- ・口縁端部にナデによる丸みを持った面を有し、褐色でやや粗い胎土を有する。仮設4F型式。

以上SK112は仮設1A・1B・4B・4G型式を主体とし、仮設1E・1F・1G・3G・7B・7G型式を客体とする。

SK112出土土師器皿は小皿の口径が9.0~10.0cmと縮小傾向になることが特徴である。口縁部形態の比率は特に大きな変化が見られないが、胎土比率において胎土分離が著しくなることが特徴である。また仮設3G型式の減少が指摘できる。これに伴い新たに以下の型式が頭在化する。

- ・丸く収める口縁部と赤褐色で雲母を多く含む胎土を持つ。仮設11型式。
- ・口縁端部を摘み上げ気味に成形し、赤褐色で密な胎土を有する。仮設3J型式。
- ・口縁端部にナデによる丸みを持った面を有し、赤褐色で雲母を多く含む胎土を持つ。仮設4I型式。
- ・口縁端部を摘み上げ気味に成形し、赤褐色で密な胎土を有する。仮設4J型式。

SK112土師器皿は仮設1A・1B・1E・1F・1G・4B・4E・4F・4I・4J型式を主体とし、仮設3B・3J・7B・7Gを客体とする。

5. 出土土師器皿の様相

これまでの検討で比較的細かい仮設型式を設定したが、大きくまとめると12世紀第3四半期に該当すると考えられるSK105では口縁部形態1・3類を主体とし、2・4類を客体とする。胎土分離を加味した型式でみると7型式前後を主体とする。続く12世紀末に該当するSK108では口縁部形態2・3類が減少、7類が出現し、4類が増大、主化する。型式としては9型式前後に分化する。さらにはほぼ同時期で若干後出するSK114では口縁部形態比率は大きな変化がないが、型式分化が著しくなり、12型式に分化する。この傾向は13世紀初頭に該当するSK112には一層顕著になり18型式まで分化が広がる。口径の変化は各型式共通してSK105が小皿口径9.5~10.5cm、大皿口径

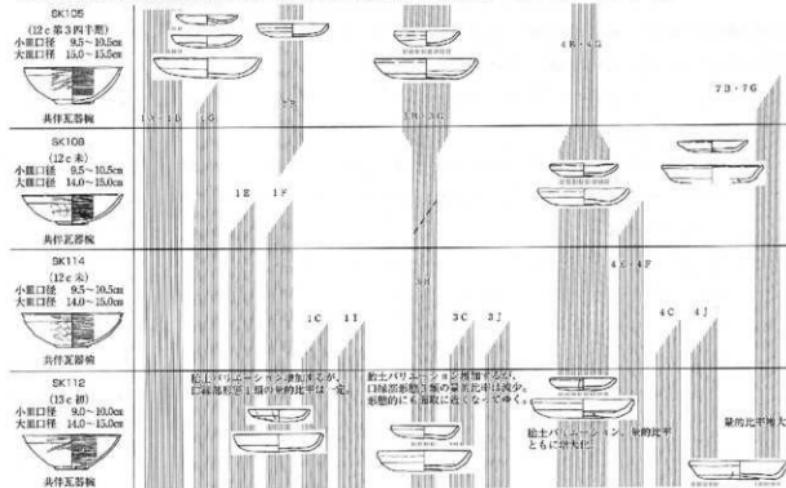


Fig. 036 出土土師器皿の変遷

15.0～15.5cm、SK108が小皿口径9.5～10.5cm、大皿口径14.0～15.0cm、SK114はSK108と大きな変化なく、SK112では小皿口径9.0～10.0cm、大皿口径14.0～15.0cmを測る。

以上、防災工事に伴う発掘調査で出土した大量の土師器皿について分析を行った。その結果、12世紀末を境に胎土の多様化を原因とする型式の爆発的増加が起こることが判明した。今回行った分析は主に口縁部形態と胎土を組み合せて仮設型式を設定したが、今後各地の一括資料に対する同様の分析を通して今回設定した仮設型式の有効性、抽出属性の有効性について検証していくつもりである。

参考・引用文献

- 石井清司 1995「墓窓須恵器」「概説 中世の土器・陶磁器」 日本中世土器研究会
- 伊野近富 1987「かわらけ考」「京都府埋蔵文化財論集」第1集 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 小野正敏 1985「出土陶器よりみた15・16世紀における兩期の素描」「MUSEUM」第416号 東京国立博物館
- 川越俊一 1983「大和出土の瓦器類をめぐる」、「三の問題」「奈良国立文化財研究所創立30周年記念 文化財論叢」奈良国立文化財研究所
- 小森俊寛・上村憲章 1996「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」「研究紀要」第3号 (財) 京都市埋蔵文化財研究所
- 太宰府市教育委員会 2000「太宰府系坊跡」XV
- 中山生五 2000「土師器」「菅原造跡」奈良県立橿原考古学研究所調査報告第78号 奈良県立橿原考古学研究所
- 中井淳史 1994「畿内土器様相の中世的特質」「中近世土器の基礎研究」X 日本中世土器研究会
- 奈良市教育委員会 1996「平城京・藤原京南北軸平互型式・窓」
- 1999「東塔院北方地区の調査第46次」「奈良市遺跡調査概要報告書」平成10年度
- 2001「鷺戸古墳・元興寺旧境内(僧房推定地)・奈良町遺跡の調査第51次」「奈良市遺跡調査概要報告書」平成11年度
- 奈良県立橿原考古学研究所 1994「興福寺旧境内」「奈良町遺跡調査概要報第1分書 奈良県立橿原考古学研究所
- 奈良女子大学 1995「奈良女子大学構内遺跡 発掘調査概要」V
- 松本洋明 1988「十六面・薬王寺造跡の中・近世土器に属する考察」「十六面・薬王寺造跡」 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第五十四号 奈良県立橿原考古学研究所
- 三好美穂 1995「南都における平安時代前半期の土器様相」「奈良市埋蔵文化財調査センター紀要」 奈良市教育委員会
- 森下亮介・立石堅志 1986「大和北部における中近世土器の様相・奈良市内出土資料を中心として」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要』
- 奈良市教育委員会
- 森島康雄 1992「畿内産瓦器焼の併行關係と歷年代」「大和の中世土器」II 大和古中近研究会
- 2001「瓦器編年からみた京都系土器群の年代観—13世紀を軸中心に—」「中世土器研究論集」 中世土器研究会
- 森川 稔 1986「東播磨中世須恵器生産の成立と展開・神出山窯址を中心に」『神戸市立博物館研究紀要』3 神戸市立博物館
- 1995「中世須恵器」「概説 中世の土器・陶磁器」日本中世土器研究会
- 1997「須恵器系の中世陶器生産」「瀬戸市埋蔵文化財センター 研究紀要」第5集 (財团法人瀬戸市埋蔵文化財センター設立5周年記念 シンポジウム「古瀬戸をめぐる中世陶器の世界・その生産と流通・」の記録) 計団法人瀬戸市埋蔵文化財センター

Tab. 002 遺構番号台帳

遺跡名: 6BGN(元興寺境内)

No. 1

S-番号	遺構番号	種別	所見	地区	その他
101	SK101	土坑	擾乱 133・109→101	KG22・23	
102	SK102	土坑	擾乱	KG22	
103	SA135c	Pit		KG22	
104		土坑	擾乱	KG20	
105	SK105	土坑	105→133	KG22	12c第3四半期
106	SA135d	Pit		KG22・23	
107	SP107	Pit		KG23	
108	SK108	土坑		KG20	12c末
109	SK109	土坑	Pitの可能性もあり 109→101	KG23	
110	SK110	土坑	123→110→112・121	KG21	12c末
111		欠番		KG21	
112	SK112	土坑	110→112	KG21	13c初
113	SA135a	Pit		KG20	SA135は13c代
114	SK114	土坑	114→104	KG20	12c末
115		Pit	112→115→112上層	KG21	
116	SA135b	Pit	112→119→116	KG20	
117		欠番			
118		欠番			
119	SK119	土坑	112→115・116→112上層	KG20・21	
120		Pit		KG20	
121		土坑	110・105→121	KG20	
122		Pit	122→104	KG20	
123		土坑	123→110	KG21	
124		Pit		KG21	
125		Pit		KG20	
126	SA136a	Pit	127→126	KG20	
127		Pit	127→126	KG20	
128	SA136b	Pit		KG20	
129	SA136c	Pit		KG21	
130		土坑		KG21	
131		Pit		KG21	
132	SA136d	Pit		KG22	
133	SK133	土坑	最初S105と同一と考えたが、S105を切る土坑と判明 133→101・102	KG22	12世紀第3四半期
134	SK134	土器埋まり?	119→115→112	KG21	14c後
135-200		欠番			
201	SK201	土坑	202→201	KI43	13c半～後
202	SK202	土坑	202→201	KI43	13c前
203	SK203	土坑	203→209	KH43	13半
204		欠番			
205	SK205	土坑	205→206	KH・KG43	16c代
206	SK206	Pit	205→206	KH43	16c以降
207	SK207	土坑		KI43	
208	SK208	Pit		KI43	13c前
209	SK209	土坑	203→209	KI43	
210-300		欠番			
301	SE301	井戸	301→302→303	KA46・47	現代
302		Pit			現代
303	SK303			KA47	現代
304-400		欠番	403→401		中世?
401	SK402	Pit	403→402	JR19	近代

Tab. 003 出土遺物一覧 (1)

1トレ 表土

種別	器種
土師器 (古代～)	皿(12・13・14c他)、釜
須恵器 (中世～)	東播系
瓦器	碗(12c後半)
青磁	龍泉窯碗
国産陶器	土管(現代)、鉢、備前壺、信楽壺
染付	楕(現代)
瓦類	瓦(古代・中世・近世・近代)、平瓦、丸瓦、平瓦(古代)、丸瓦

1トレ 壁面

種別	器種
土師器 (古代～)	皿
瓦器	碗、皿

1トレ 暗灰褐砂質

種別	器種
須恵器	楕(古代)
土師器 (古代～)	皿(12c・13c)、(赤土器・白土器)、(13c後)、釜、(14c)、皿(白土器・赤土器)、釜、皿、釜(B)
須恵器 (中世～)	東播系壺
瓦器	碗(13c後半・12c後半)、楕(12c後半～13c半ば)、小型瓦器楕、楕、皿、小型瓦器楕
青磁	楕(中国産)、楕(中国産)
白磁	近現代
国産陶器	近現代、丹波摺り鉢、常滑壺、蓋・楕(近代)、近現代、信楽(中世)
染付	近現代、蓋・皿(近代)、近現代
瓦質土器	摺り鉢
瓦類	瓦(古代)、平瓦・丸瓦(古代)、軒瓦(室町)、瓦(古代)
金属製品	鉄釘

1トレ 灰褐粘

種別	器種
土師器 (古代～)	皿、杯(9c半ば)
黒色土器	楕
瓦器	楕
瓦類	平瓦(古代)
その他	ガラス玉

1トレ 明褐色

須恵器	壺(古代)
土師器 (古代～)	皿(中世)、皿(12c・13c)、皿(13c半ば)(12c)、釜、皿(白土器・赤土器)、皿、皿(12c後半)(コテ当て痕あり)、釜
須恵器 (中世～)	片口鉢(底地不明)、杯(古代)、蓋(9c)、東播系、壺
緑釉陶器	近江系、東海系山茶碗
黒色土器	B類(10c後半)

瓦器	楕(13c前半)、楕(13c半ば)、楕(12c)、楕(11c後半～12c初頭)、(12c後半)、楕(後半)
国産陶器	产地不明、工官
石製品	サヌカイト・コア
瓦類	瓦(古代・中世)、瓦(古代)、瓦(古代)、瓦(古代)

1トレ S-101

種別	器種
土師器 (古代～)	土釜(中世後期)、皿(12・13・14c)、不明土製品、皿(コースターラー)
灰釉陶器	楕
瓦器	皿
青磁	楕
白磁	楕V類
国産陶器	信楽壺、鉢(灰釉)、常滑壺、ティーポット蓋、浅鉢、植木鉢(アメ釉・胎土土師質)、サイコロ(4に赤色顔料)
瓦類	瓦(古代・格子目)、近世瓦、古代錦目瓦(平瓦)、中世瓦(キラコ付着)、瓦(古代～近代)
金属製品	鉄釘

1トレ S-102(カクラン)

種別	器種
土師器 (古代～)	皿(12c)
瓦器	楕(12・13c)
国産陶器	習り鉢、鉢
染付	巻麦猪口(現代)
瓦類	瓦(古代)

1トレ S-103

種別	器種
土師器 (古代～)	皿(12c前半・13c後半)
瓦器	碗(12c後半)
瓦類	瓦(古代・中世)

1トレ S-104(カクラン)

土師器 (古代～)	皿(12c・13c)、釜
瓦器	楕(13c後半)
白磁	壺(中国産)
国産陶器	常滑壺、产地・器種不明鉄軸(近現代)
瓦類	瓦(古代)(平安・平安後期)
瓦器	碗(13c前半～半ば)、碗(13c後半・混入?)
青磁	楕(龍泉窯)
白磁	碗、壺
瓦類	瓦(古代)、平瓦・丸瓦、軒瓦(奈良時代)
金属製品	鉄(?)スラグ

Tab. 004 出土遺物一覧 (2)

1トレ S-105

種別	器種
土師器 (古代～)	皿(中皿・小皿)、釜(細片)、大皿、鉢(時期產地不明)、皿(「て」字状口縁・11c)
須恵器 (中世～)	鉢(縫・9c)、壺(古代)、鉢(東播系12c初)、碗(東部瀬戸内系11c後半)
綠釉陶器	碗
灰釉陶器	碗
黒色土器	B類(11c前半)
瓦器	碗(12c後半)、皿
青磁	碗(龍泉窯・陶製円盤に転用)、V類
国産陶器	常滑窯、東海系山茶碗
染付	碗(混入)
瓦類	瓦(古代・中世)(古代・格子目タキ)、平瓦・丸瓦(古代)
土製品	焼土
その他	銅津

1トレ S-107

種別	器種
土師器 (古代～)	中皿・小皿(13c)

1トレ S-108

種別	器種
土師器 (古代～)	釜、皿(赤土器・白土器)
瓦器	碗(13c半ば)(13c後半)
国産陶器	壺
染付	碗
瓦質土器	浅鉢

1トレ S-108

種別	器種
須恵器	壺、杯、壺
土師器 (古代～)	皿(13c半ば)、釜、壺
須恵器 (中世～)	東播系鉢
瓦器	碗(13c前)、皿
青磁	碗(龍泉窯)
白磁	碗
青白磁	合子
国産陶器	近現代
染付	碗
瓦類	瓦(古代)、平瓦・丸瓦(古代)

1トレ S-110

種別	器種
須恵器	壺(古代)
土師器 (古代～)	皿(墨書きあり、墨書きの内容は不明)
須恵器 (中世～)	壺(東播系)、鉢(東播系)
黒色土器	A類(10c後半)
瓦器	碗(12世紀末・13c半ば)
瓦類	瓦(古代)(古代・中世)

1トレ S-112

種別	器種
須恵器	杯(8c)、小壺
土師器 (古代～)	釜、皿(「て」字状口縁)
須恵器 (中世～)	東播系鉢、当番系壺
灰釉陶器	碗
瓦器	碗(12c後半)
青磁	碗(龍泉窯)
白磁	碗、V類
国産陶器	常滑窯
瓦類	瓦(古代・中世)(古代・格子目タキ)、瓦(中世)、平瓦・丸瓦(古代)

1トレ S-113

種別	器種
土師器 (古代～)	釜、皿(13c)
瓦器	碗(13c半ば)
石製品	石(被熱)
瓦類	瓦(古代・中世)

1トレ S-114

種別	器種
須恵器	杯(8c)、壺(古代)、古代壺(M)
土師器 (古代～)	皿(12c)、釜
須恵器 (中世～)	東播系鉢
黒色土器	A類、B類、10c後?
瓦器	碗(12c後半)(13c後半)、皿、三足釜、小型瓦器碗
白磁	碗IV類
国産陶器	常滑窯、信楽摺り鉢
染付	近現代
瓦類	瓦(古代・中世)、平瓦・丸瓦(古代)、軒丸瓦(古代)

1トレ S-115

種別	器種
土師器 (古代～)	皿
須恵器 (中世～)	東播系
瓦器	碗(12c)
瓦類	瓦(中世)(コビキA)(古代)

1トレ S-116

種別	器種
土師器 (古代～)	皿
須恵器 (中世～)	東播系浅鉢
瓦器	碗
瓦質土器	浅鉢
瓦類	瓦(古代)

Tab. 005 出土遺物一覧 (3)

1トレ S-119

種別	器種
土師器 (古代～)	皿(12c)
瓦器	椀(12c)
瓦類	瓦(古代)

1トレ S-120

種別	器種
瓦質土器	輪花火鉢?
瓦類	瓦(中世)

1トレ S-121

種別	器種
瓦類	瓦(古代・朱付平瓦あり)、軒丸
	瓦

1トレ S-122

種別	器種
土師器 (古代～)	皿(中世)
瓦器	椀(12c)

1トレ S-123

種別	器種
土師器 (古代～)	皿(12c)(10c後半)
瓦器	椀(12c)
白磁	椀(中国製)・体部の細片

1トレ S-133

種別	器種
須恵器	杯(古代)、鉢(古代)
土師器 (古代～)	皿(白土器)、釜、不明
須恵器 (中世～)	東播系鉢(小型鉢・整地土1片口 鉢と同一個体?)、東播系甕
瓦器	椀(12c後半)(13c半ば)、皿
白磁	壺、V類、四豆壺
国産陶器	山茶碗(東海系)
塗付	明治
石製品	滑石製石鍋
瓦類	瓦(古代)(中世)、平瓦・丸瓦 (古代・中世)

1トレ S-134

種別	器種
土師器 (古代～)	皿(赤土器・白土器)(13c)、釜、 ミニチュア釜など
須恵器 (中世～)	東播系鉢
白磁	椀、V類
瓦類	瓦(古代・中世)、軒平瓦(奈良) (平安)
金属製品	スラグ

2トレ 暗灰褐砂質

種別	器種
土師器 (古代～)	皿(白土器)、釜
瓦器	椀(13c前半)
瓦類	瓦(古代)

2トレ 明褐粘

種別	器種
土師器 (古代～)	皿('て'字状口縁)
須恵器 (中世～)	蓋(9c前半～半ば)
黒色土器	A類、B類
瓦器	瓦器小片
石器	砥石
瓦類	瓦(古代)

2トレ 暗褐粘

種別	器種
土師器 (古代～)	皿
瓦器	椀
国産陶器	鉢(縮瑪瑙)

2トレ 表土

種別	器種
国産陶器	甕
染付	椀

2トレ 壁面

種別	器種
土師器 (古代～)	釜
白磁	電柱の得子
国産陶器	信楽(近現代)、産地不明(近現代)
染付	近現代
瓦類	瓦(古代)(古代末)(中世)(文字瓦)

2トレ S-201

種別	器種
土師器 (古代～)	皿(13c)
須恵器 (中世～)	東播系
国産陶器	備前窯、信楽摺り鉢
染付	幕末

2トレ S-202

種別	器種
土師器 (古代～)	皿(中皿・小皿あり)
須恵器 (中世～)	東播系
瓦器	瓦器(13c前半)

Tab. 006 出土遺物一覧 (4)

2トレ S-203

種別	器種
土師器 (古代～)	釜(B型)、皿(9c前半)、中皿・小皿(13c)
須恵器 (中世～)	東播系・鉢
瓦器	椀(13c半ば)、皿
瓦類	瓦(古代)、軒丸瓦(平安)

2トレ S-205

種別	器種
土師器 (古代～)	皿(16c)(13c前半)
瓦器	椀(13c後半)(13c前)(10c初頭)
国産陶器	信楽窯り鉢(15c前半)
染付	中国(16c)
石製品	カナンボ石剝片
瓦類	瓦(古代)

2トレ S-207

種別	器種
土師器 (古代～)	不明
瓦類	瓦(古代)

2トレ S-208

種別	器種
土師器 (古代～)	皿(13c前半)
瓦器	椀(中世)(12c半ば)
瓦類	瓦(古代)

2トレ S-209

種別	器種
瓦質土器	中世後期?

3トレ 表土

種別	器種
土師器 (古代～)	皿、ホウラク、釜
国産陶器	信楽(15c後半)、唐津椀、丹波(17c)、灯火具、瀬戸天目
染付	中国製(C群碗)、肥前、国産碗、大皿
瓦質土器	深鉢、常滑壺、備前壺、浅鉢(14c前)

3トレ 灰褐粘

種別	器種
国産陶器	備前壺、窯り鉢
染付	壺
瓦質土器	深鉢
石器	サヌカイト剝片
瓦類	瓦(古代)

3トレ 明褐色

種別	器種
土師器 (古代～)	皿(19c)
国産陶器	土瓶
染付	壺(19c)

3トレ 黒褐色土

種別	器種
土師器 (古代～)	皿(16c)

3トレ 壁面

種別	器種
土師器 (古代～)	皿、釜
瓦質土器	こね鉢
瓦類	瓦(古代～中世)

4トレ 黒褐色土

種別	器種
土師器 (古代～)	釜、皿
白磁	皿(近現代)
国産陶器	灯火具、小杯、小皿、常滑壺(12c)、小壺、鉢
染付	鉢(幕末)、小杯、椅・皿、香炉、仏飯具
瓦質土器	窯り鉢
瓦類	瓦

4トレ S-401

種別	器種
土師器 (古代～)	皿(中世)
瓦器	椀(13c前半)(13c半ば)
瓦類	瓦(古代)

4トレ S-402

種別	器種
土師器 (古代～)	ホウラク
国産陶器	杯
染付	瀬戸碗、肥前碗
瓦類	瓦(古代)(近代)

4トレ S-403

種別	器種
瓦類	瓦(古代)(鎌倉後期軒平残欠)

4トレ S-405

種別	器種
土師器 (古代～)	皿
瓦器	瓦器(12c)
国産陶器	瀬戸(灰釉盤)

4トレ S-406

種別	器種
土師器 (古代～)	皿、土釜、土管
国産陶器	椀、鉢、土瓶、壺、柿輪皿、窯り鉢
染付	壺

Tab. 007 出土遺物一覧 (5)

4トレ S-406

種別	器種
土師器 (古代～)	皿、土釜、土管
国産陶器	碗、鉢、土瓶、壺、柿釉皿、彫り 鉢
染付	碗

4トレ S-407

種別	器種
須恵器	壺(?)
土師器 (古代～)	皿(古代)
瓦類	瓦(古代)

4トレ S-411(柱内)

種別	器種
土師器 (古代～)	皿(中世)
瓦類	瓦(古代)

4トレ S-411(掘方内)

種別	器種
土師器 (古代～)	皿(10c?)(中世)

4トレ S-412

種別	器種
土師器 (古代～?)	皿(13c?)
瓦類	瓦(古代)

4トレ S-415

種別	器種
土師器 (古代～?)	皿(時期不明)
瓦類	瓦(古代)

4トレ S-416

種別	器種
土師器 (古代～)	甕(奈良時代)、皿(中世)、釜 (中世後半)、皿(14c半ば・白土 器)
瓦器	碗
瓦類	瓦(古代)(中世)

4トレ S-417

種別	器種
須恵器	須恵器
瓦器	碗
瓦類	瓦(中世・鎌倉?)

4トレ S-420

種別	器種
瓦器	碗(12c末～13c初頭?)
国産陶器	東海系山茶碗(12c)
瓦類	瓦(不明文様あり)

4トレ S-421

種別	器種
土師器 (古代～)	皿(13c後半)、釜(古代)
黒色土器	A類瓶
瓦器	碗(13c後半)
染付	碗

4トレ S-422

種別	器種
土師器 (古代～)	皿(12c)(中世)
須恵器 (中世～)	東播系須恵器、鉢
瓦器	碗(小片)
瓦類	瓦(古代)

4トレ S-424

種別	器種
土師器 (古代～)	皿(赤土器)、釜(中世後半)、碗 (10c)、皿(10c半ば)
瓦類	瓦(古代)
金属製品	鍼釘

小子房東

種別	器種
土師器 (古代～)	近世柿輪小皿、皿、不明鉢(近 世～)、皿(白土器)
国産陶器	信楽彫り鉢(近代)、時期不明 目、瀬戸(?)
瓦類	近現代瓦、中世平瓦・丸瓦、古 代平瓦、軒丸瓦(江戸)、鬼瓦

浮団田横

種別	器種
国産陶器	土管、常滑土管
染付	碗(昭和)
瓦質土器	深鉢
瓦類	瓦(古代)(近代)(中世)

櫛室北東隅

種別	器種
瓦類	瓦(中世)(近代)

東門西

種別	器種
瓦類	瓦(中世)(近代)

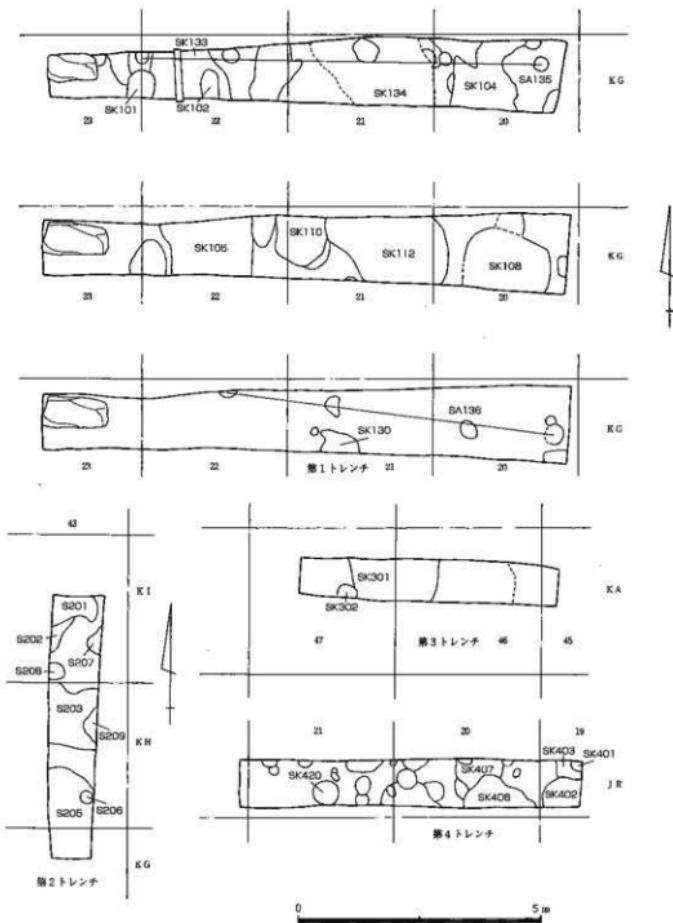
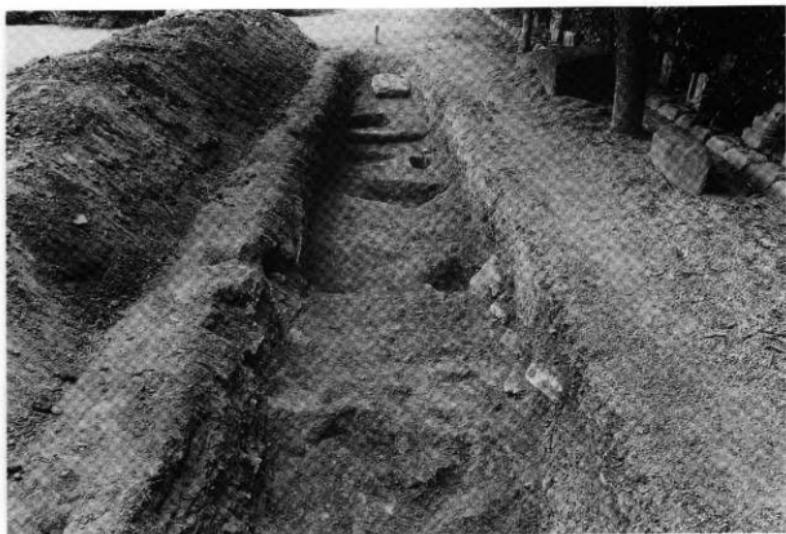


Fig. 037 検出遺構配置略図 (S=1/100)

写真図版



遺物写真に付した数字は
Fig.番号—遺物番号
の類である。



第1トレンチ第1遺構面全景（東から）

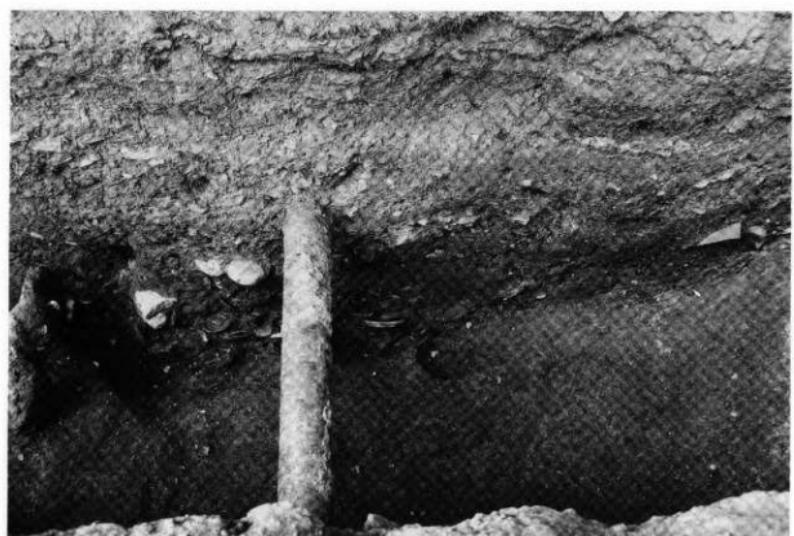


第1トレンチ第2遺構面全景（西から）

Pla.2



SK105遺物出土状況（南から）



SK105発掘状況及び土層断面（南から）

Pla.3



SK108完掘状況（北から）



SK110・123完掘状況（北から）

Pla.4



SK112完掘状況（南から）



SK112土層断面（南から）

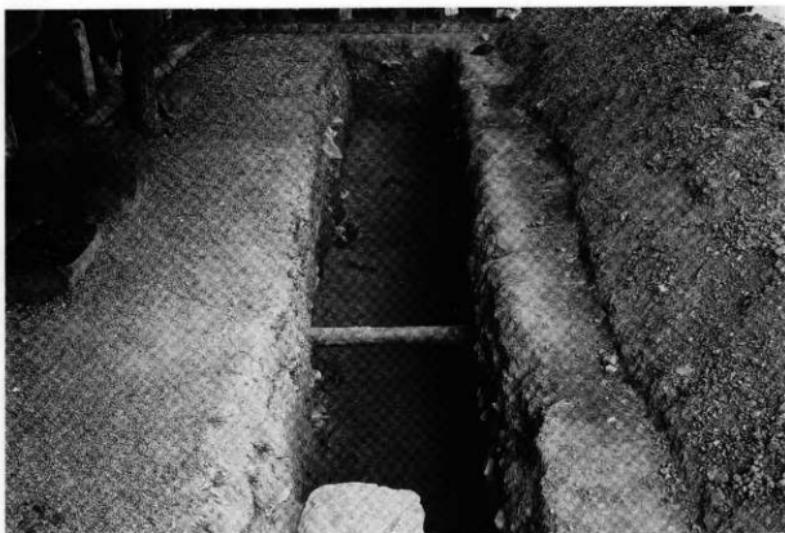


SK114遺物出土状況（東から）



SK114完掘状況（東から）

Pla.6



第1トレンチ第3造構面全景（西から）



第1トレンチ北壁SK105付近（南から）

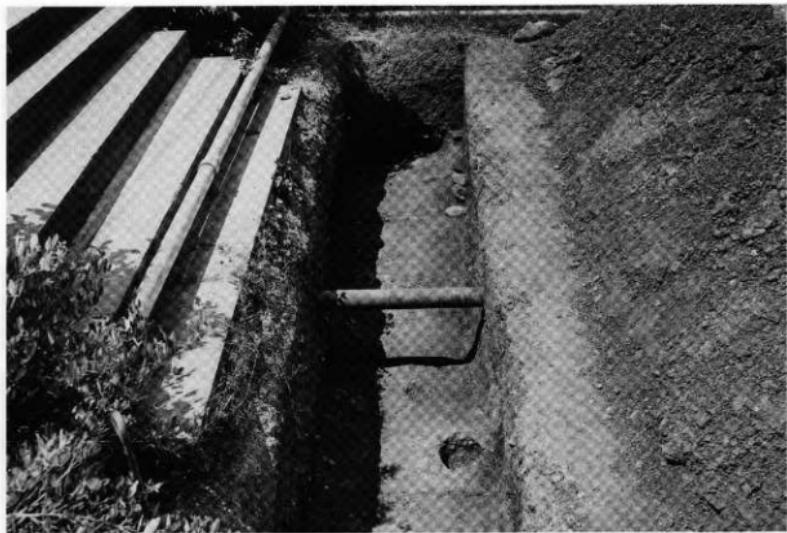


第1トレンチ北壁SK110付近（南から）



第2トレンチ整地土上面全景（南から）

Pla.8



第2トレンチ整地土除去後全景 (南から)

第2トレンチ整地土除去後全景 (南から)



SK201・202完掘状況 (南から)



SK201・202切り合い状況（東から）

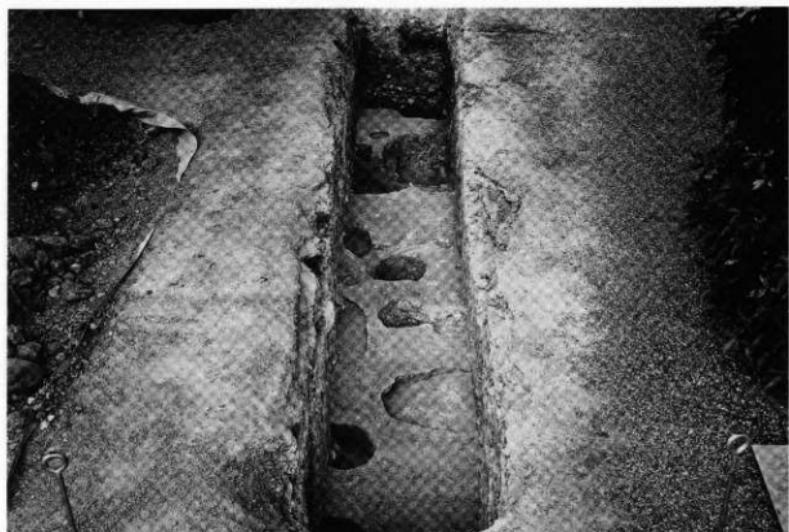


SK205完掘状況（西から）

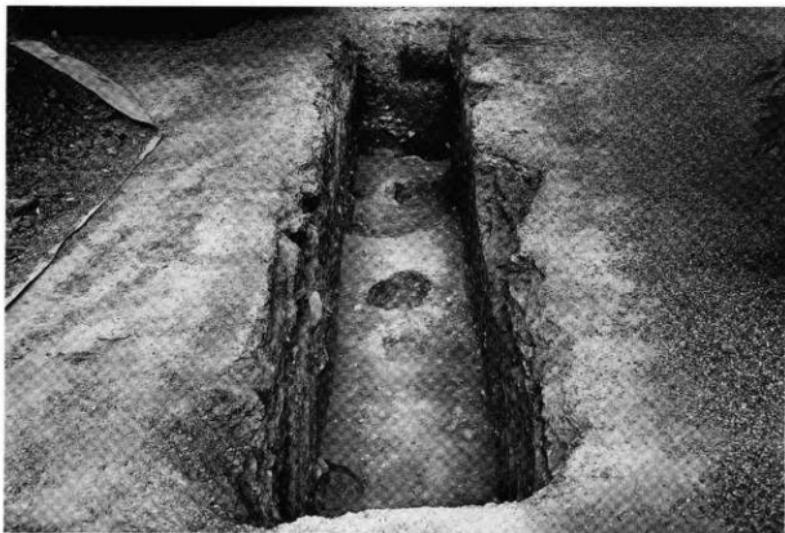
Pla.10



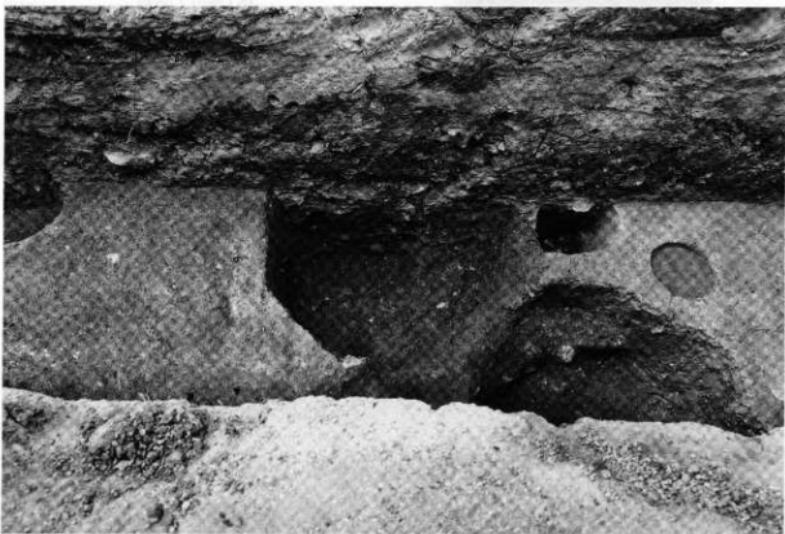
第3トレンチ全景（東から）



第4トレンチ整地土上面全景（西から）

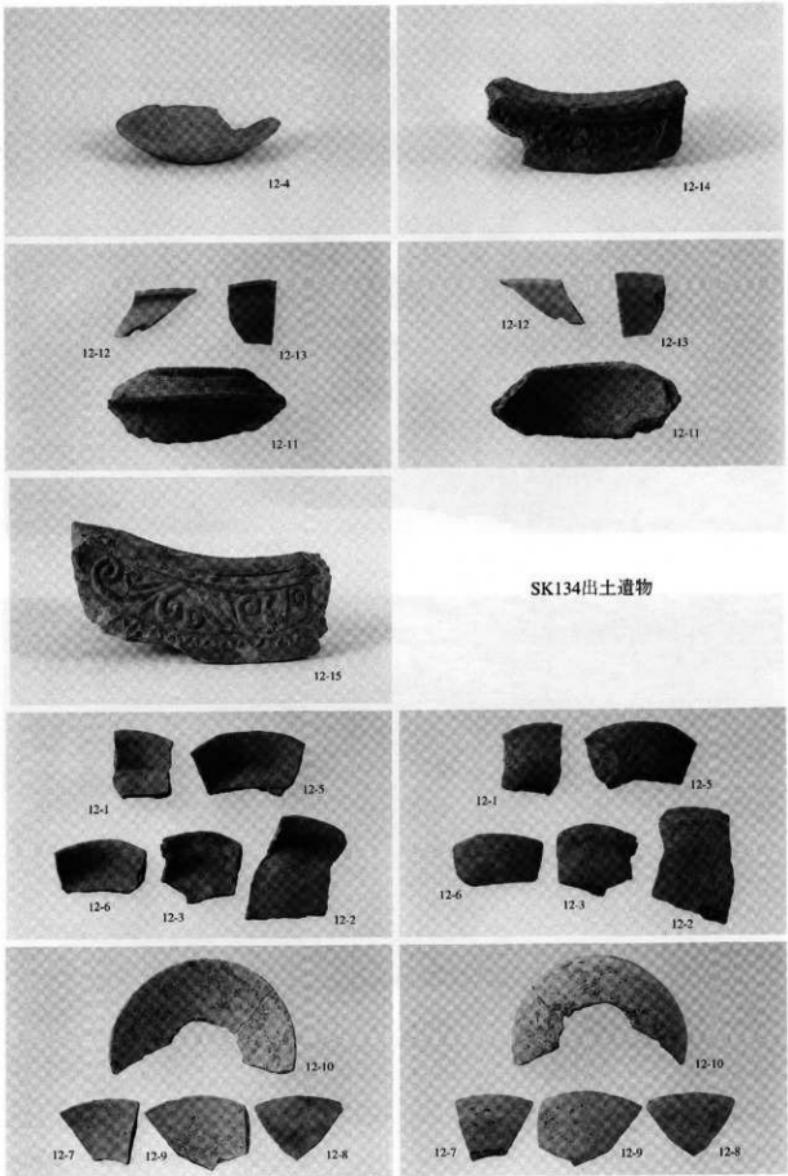


第4トレンチ整地土除去後全景（西から）



SK407完掘状況（北から）

Pla.12





13-3



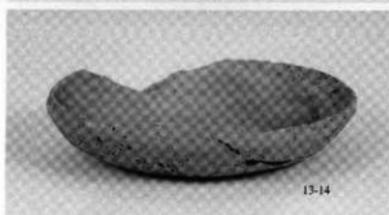
13-5



13-6



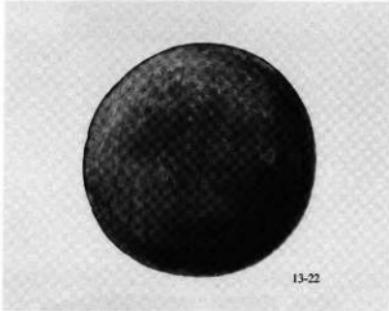
13-13



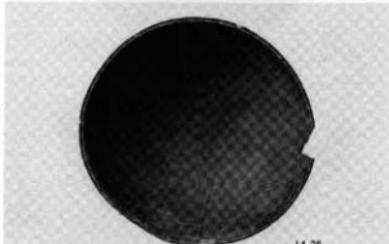
13-14



13-15



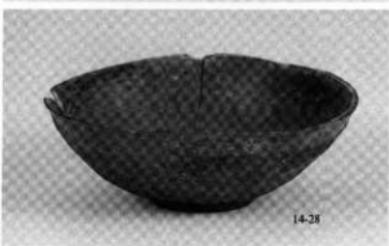
13-22



14-28



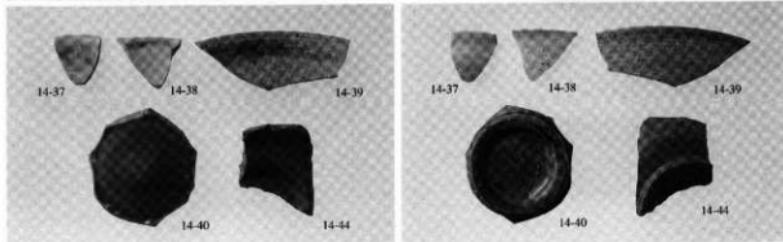
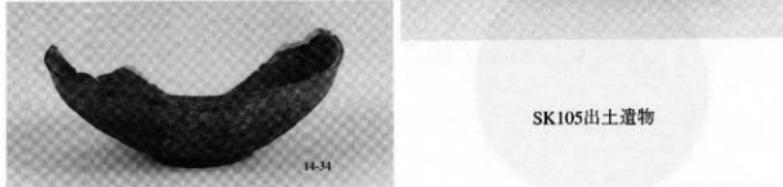
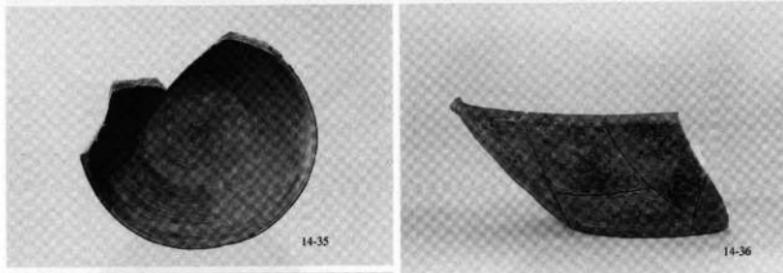
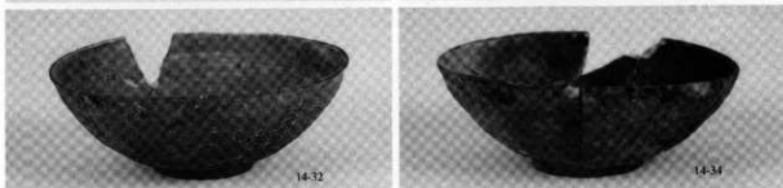
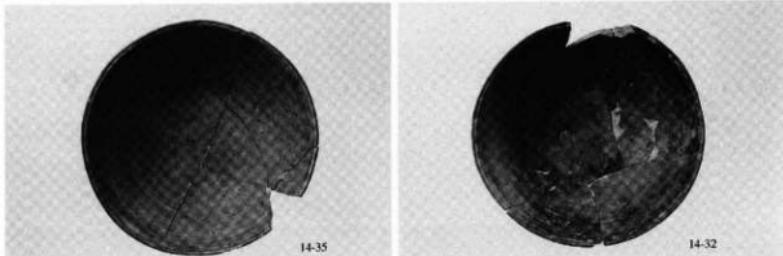
13-22

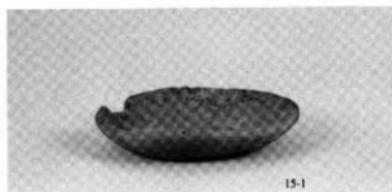


14-28

SK105出土遺物

Pla.14

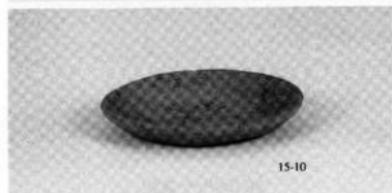




15-1



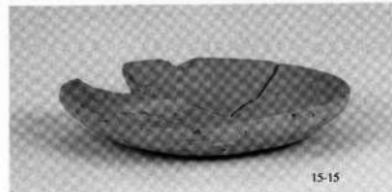
15-7



15-10

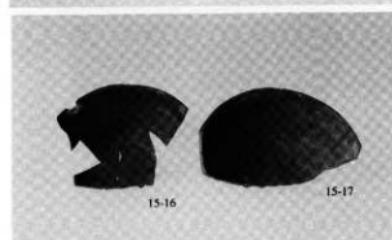


15-14



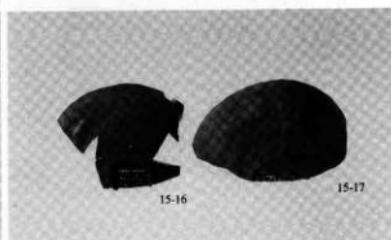
15-15

SK108出土遺物



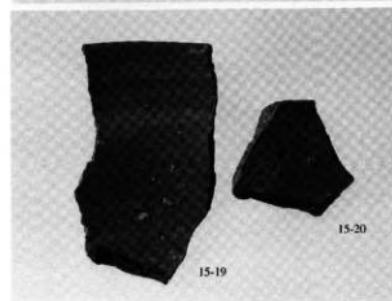
15-16

15-17



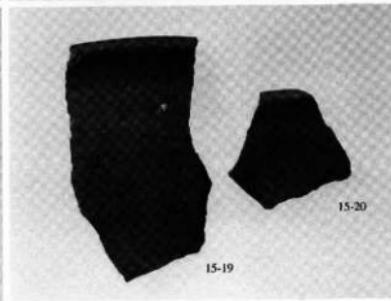
15-16

15-17



15-19

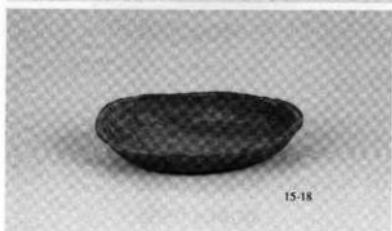
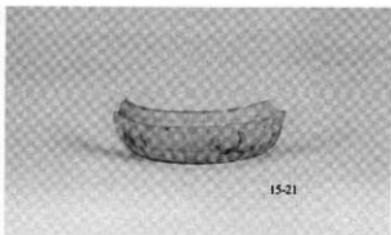
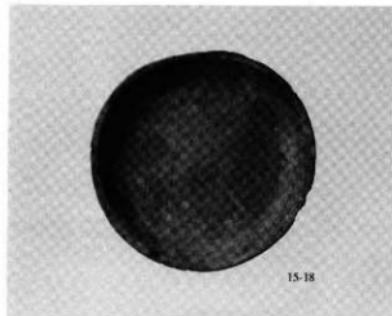
15-20



15-19

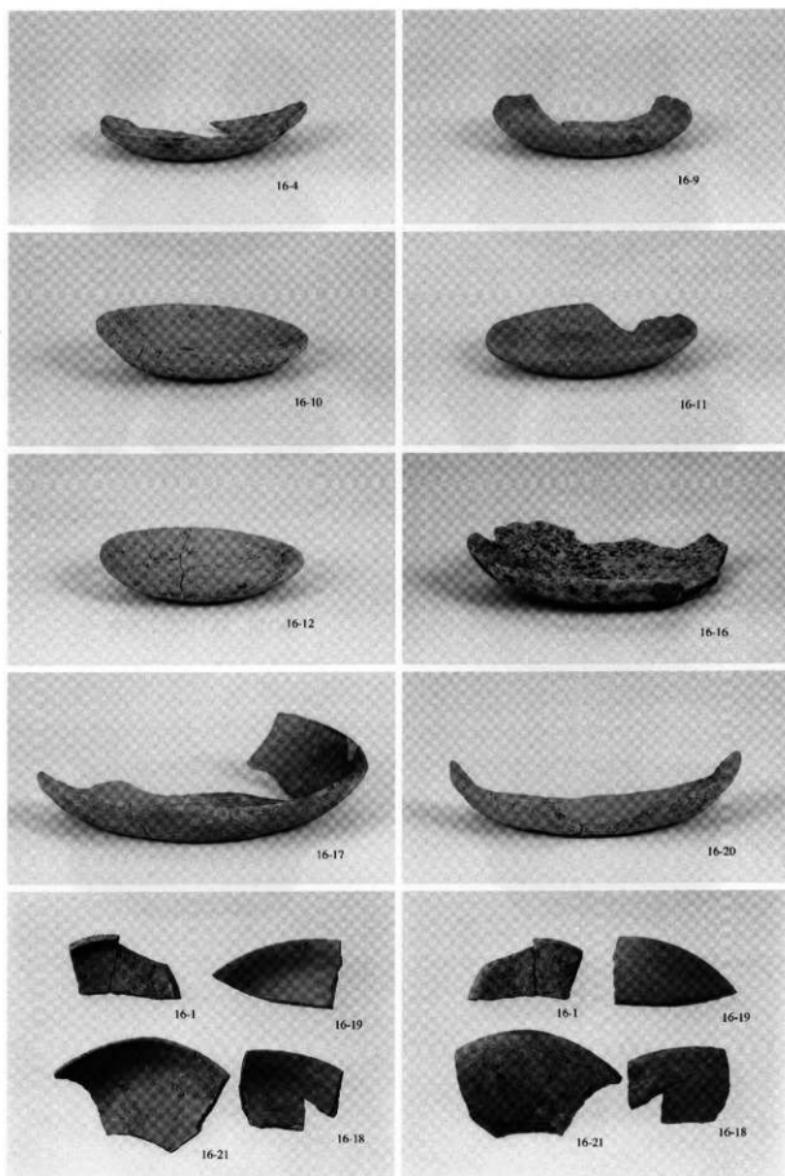
15-20

Pla.16

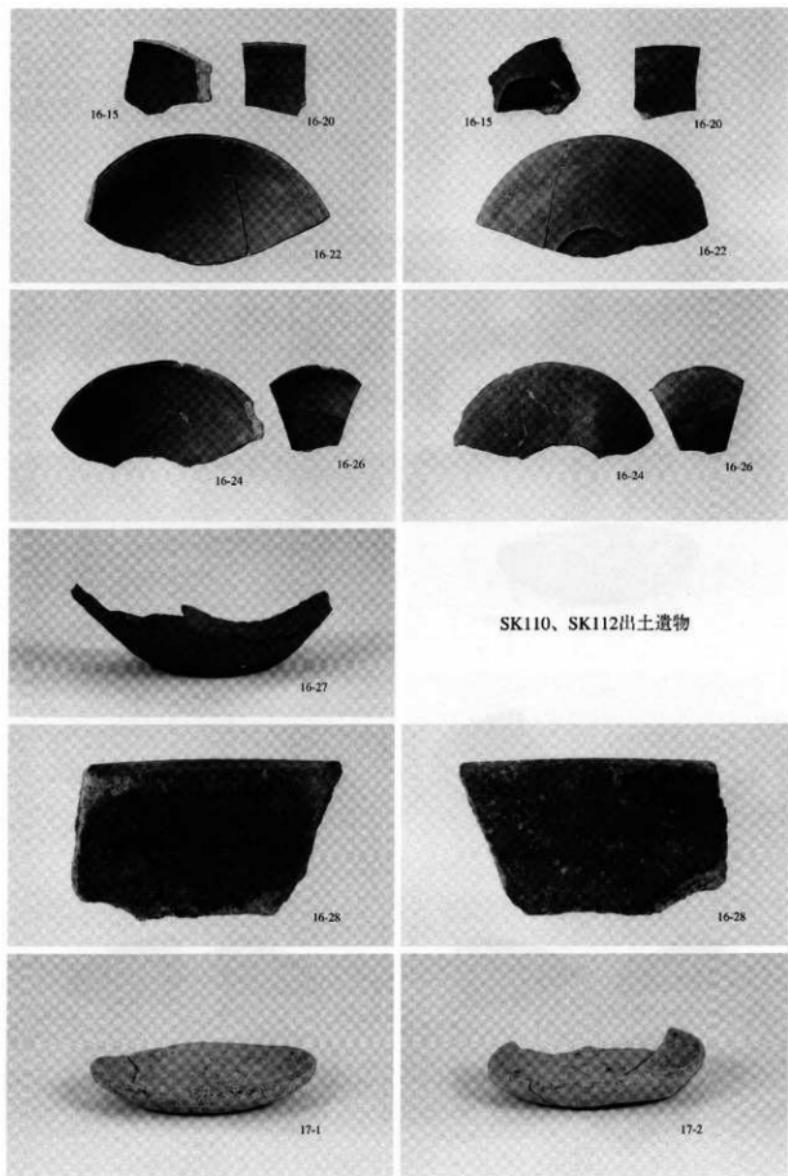


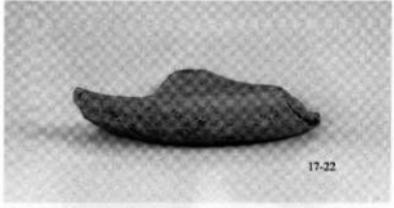
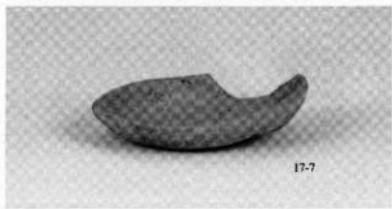
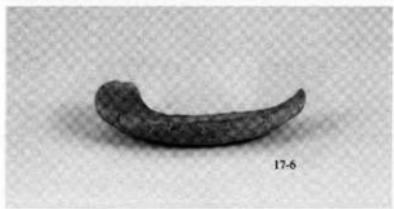
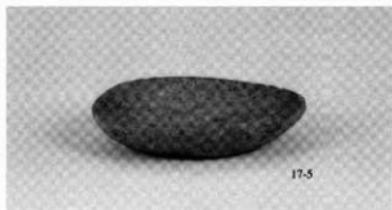
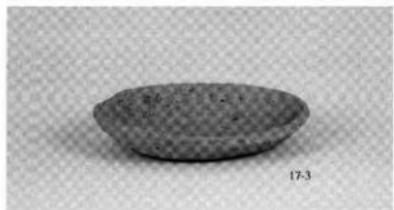
SK108出土遺物



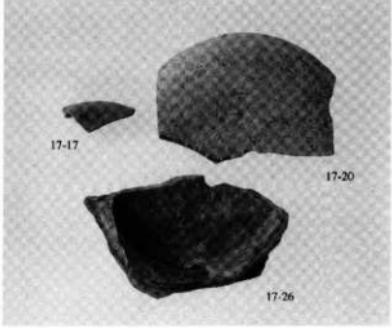
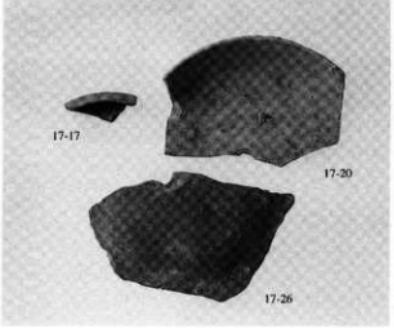


Pla.18

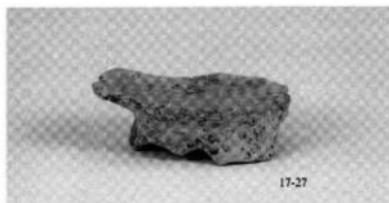




SK112出土遺物

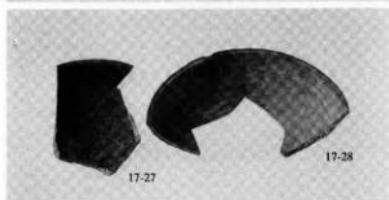


Pla.20



SK112出土遺物

17-27



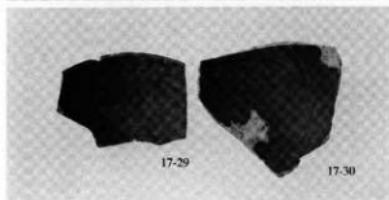
17-27

17-28



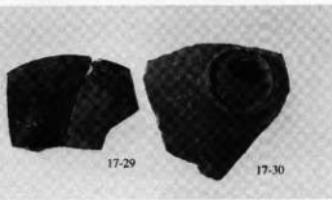
17-27

17-28



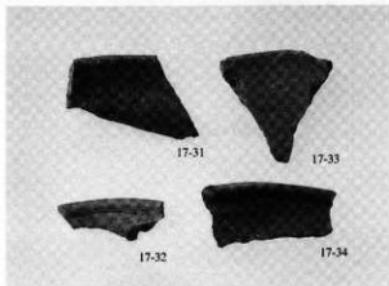
17-29

17-30



17-29

17-30



17-31

17-33

17-32

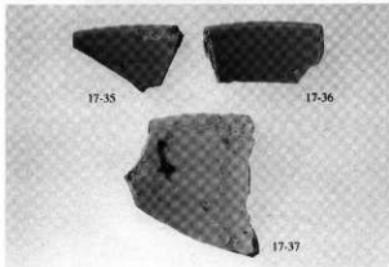
17-34

17-31

17-33

17-32

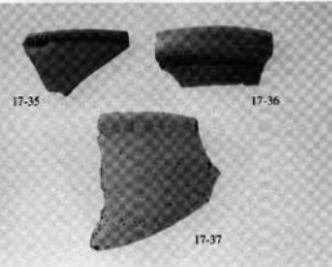
17-34



17-35

17-36

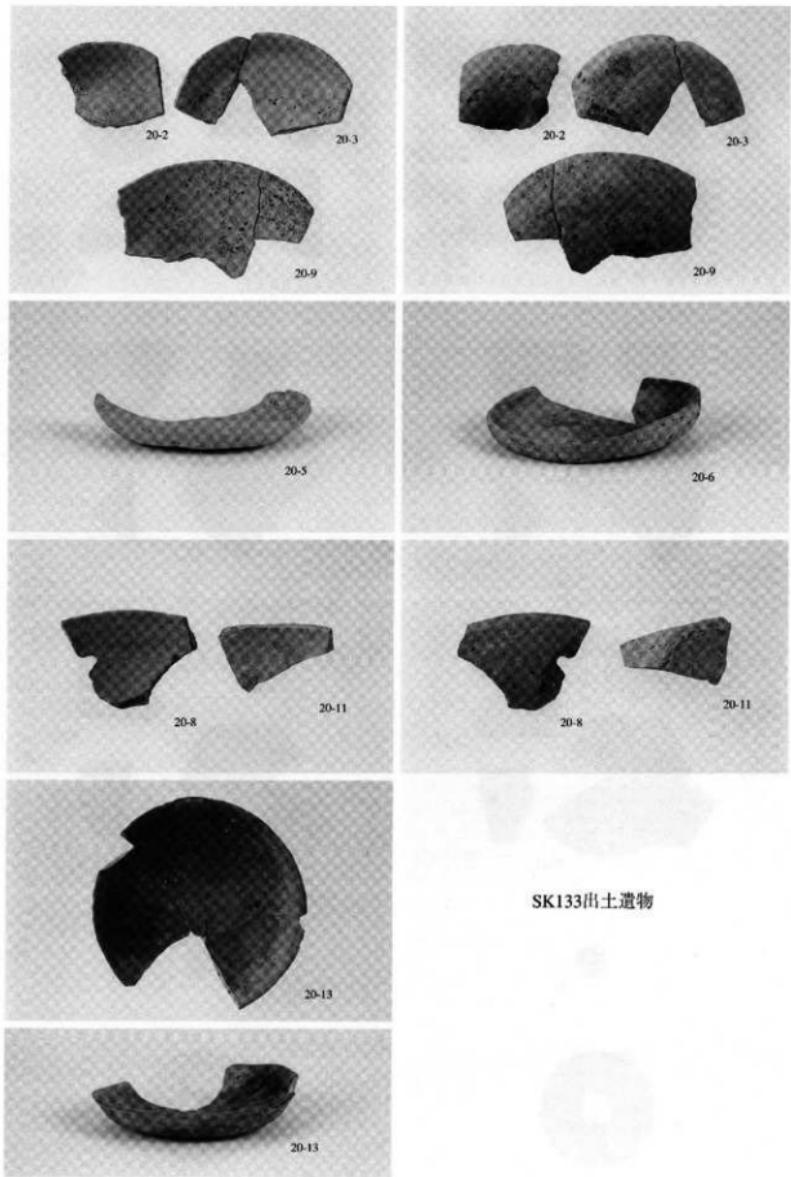
17-37



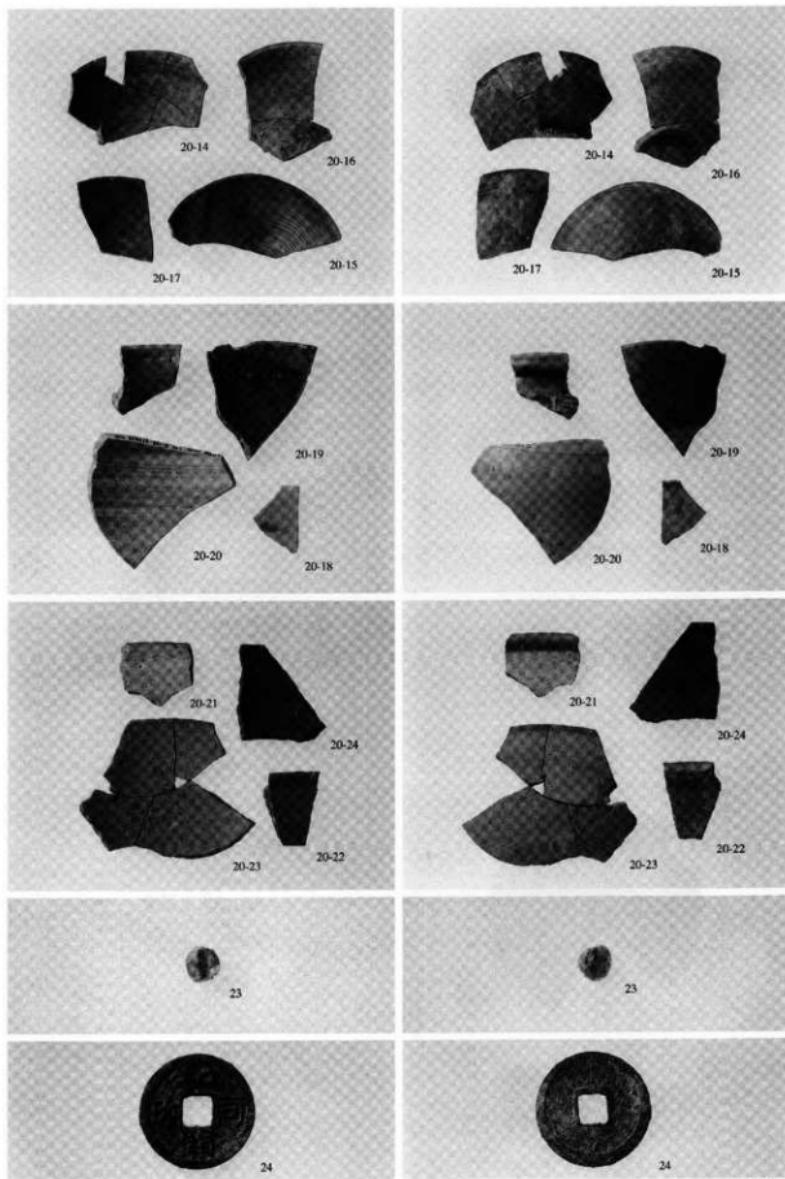
17-35

17-36

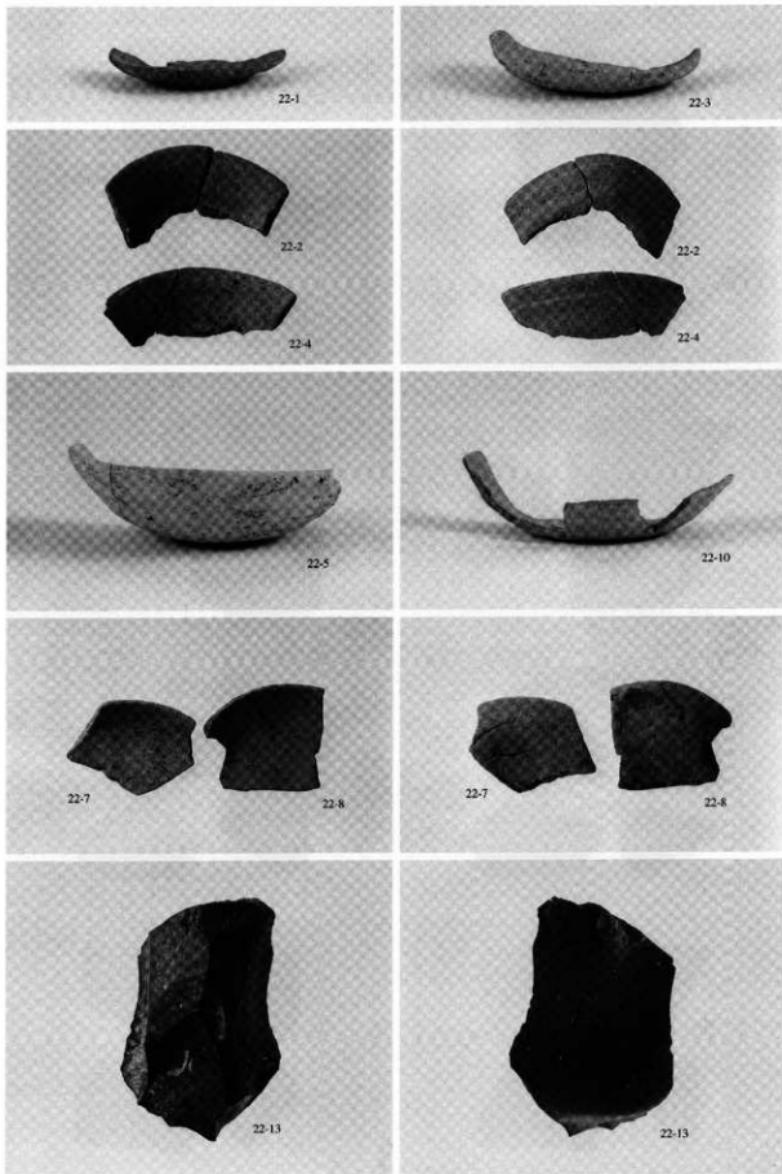
17-37



Pla.22

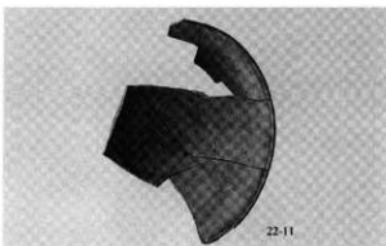


SK133 · 暗灰褐色細沙、明褐色粘土出土遺物

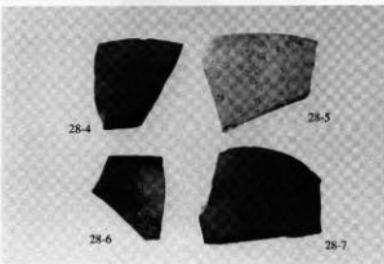
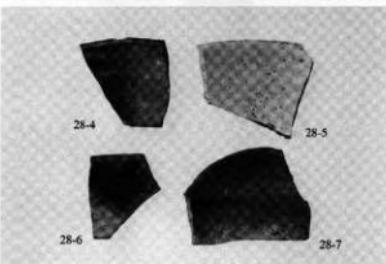
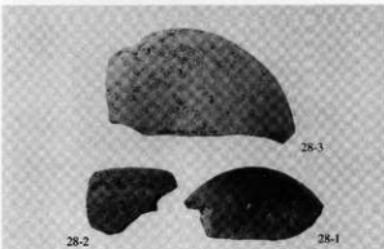
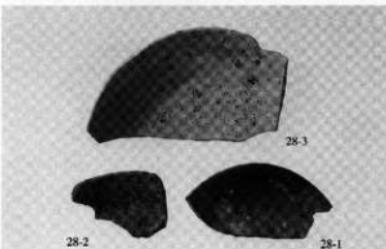
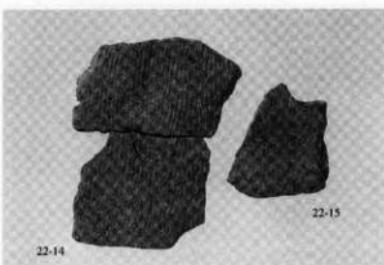


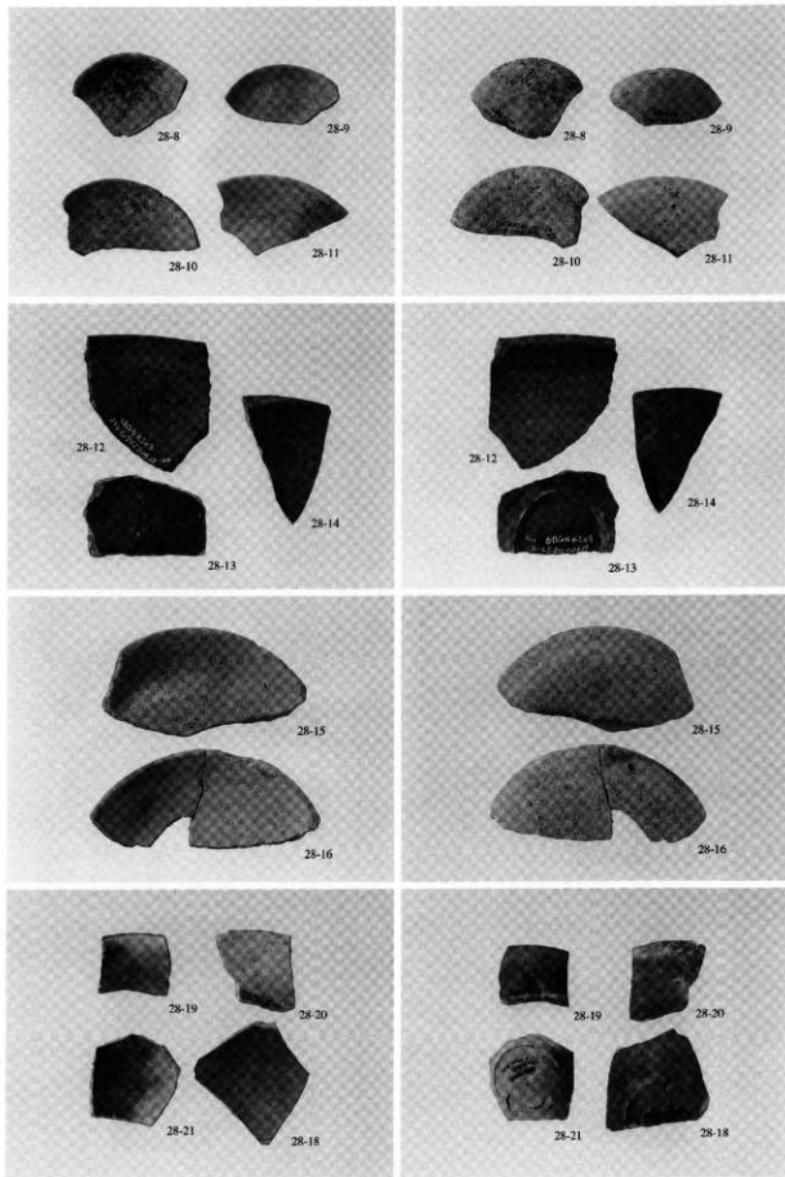
トレ暗灰褐色砂質土、灰褐色粘土、明褐色粘土出土遺物

Pla.24

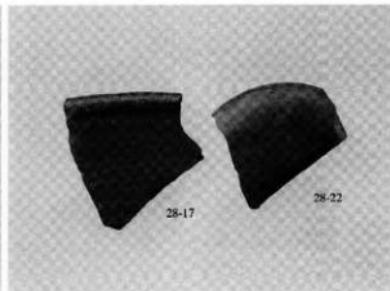
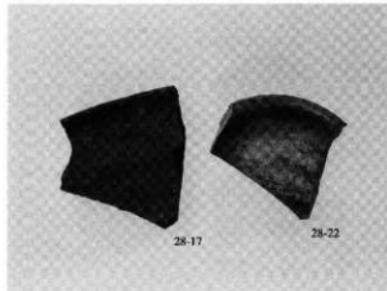


1トレン明褐色粘土・1トレン灰褐色粘土
SK201 出土遺物

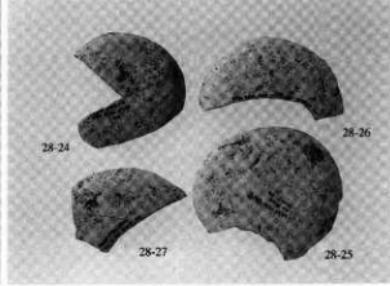
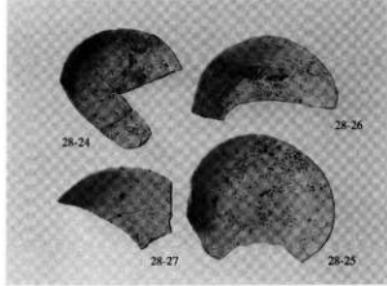




Pla.26



SK203・SK205、2トレ壁面 出土遺物





34-14



34-9



34-9

4 ト レ 灰 褐 色 砂 質 土、 黑 褐 色 土 出 土 遺 物

報告書抄録

ふりがな	がんごうじ							
書名	元興寺							
副書名	国宝元興寺極楽堂ほか防災施設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次								
シリアル名								
シリアル番号								
編著者名	佐藤亜聖							
編集機関	元興寺境内遺跡調査会							
所在地	〒630-8312 奈良県奈良市中院町11番地							
発行年月日	平成14(2002)年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査起因
がんごうじ 元興寺	奈良市 中院町11番地	市町村	遺跡番号	34° 40'29"	135° 50'04"	20010611 ～ 20010713	34.5m ²	防災工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
元興寺	寺院	平安 鎌倉	掘立柱列 柱穴 土坑	土師器 瓦器 瓦質土器 古代・中世瓦 輸入陶磁器 ガラス小玉 銅鏡		大量の土師器皿が出土。 極楽堂建設時の可能性 のある整地層検出。		

元興寺

国宝元興寺極楽坊本堂ほか防災施設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成14（2002）年3月

発行 元興寺境内遺跡調査会
編集

印刷 共同精版印刷株式会社